

初期農耕村落の研究

——テル・サラサート第2号丘
最下層の文化史的 위치づけ——

松 谷 敏 雄

目 次

はじめに

第1部

1-1 遺跡

1-2 遺構

1-2-1 XV 層の遺構

1-2-2 XVI 層の堅穴

1-3 遺物

1-3-1 土器

1-3-1-1 完形土器

1-3-1-2 土器の製造過程について

1-3-1-3 石膏による土器の補強・補修

1-3-1-4 土器片

1-3-2 石器

1-3-2-1 石刃・鎌刃

1-3-2-2 磨製石斧

1-3-2-3 石臼・石杵

東洋文化研究所紀要 第47冊

- 1-3-2-4 石製容器
- 1-3-2-5 その他の石製品
- 1-3-3 紡錘車
- 1-3-4 土製品
 - 1-3-4-1 土製投擲
 - 1-3-4-2 土偶
- 1-3-5 骨角器
- 1-3-6 土器表面にみられる麥粒の壓痕
- 1-4 埋葬
- 1-5 C¹⁴ による年代測定
- 1-6 XV 層と XVI 層の比較
- 1-7 最下2層文化の復原

第2部

- 2-1 メソポタミア先史時代の編年
- 2-2 ハッスーナ最下層とマタツラ下層
 - 2-2-1 ハッスーナ最下層
 - 2-2-2 マタツラ下層
- 2-3 サラサート期
- 2-4 サラサート期文化の集體
- 2-5 アリ・アガ遺跡
- 2-6 ジャルモ期の編年に對する疑問
- 2-7 ジャルモ後期はサラサート期か
- 2-8 ザグロス・グループ
- 2-9 ザグロス・グループとサラサート期
- 2-10 いくつかの文化圏
- 2-11 第2部のまとめ
- 2-12 將來の課題——結語にかえて——

はじめに

1964年にイラクのテル・サラサート遺跡第2号丘の発掘を行なった東京大学イラク・イラン遺跡調査団は、同丘最下層においていわゆる「新石器ハッスーナ期」(Neolithic Hassuna)に属する堆積を発見し、調査した。この調査に参加した筆者は、以前から初期農耕村落に興味をもっており、サラサート第2号丘の最下層の文化は、メソポタミアにおける農耕・牧畜の起源から文明の発生にいたる過程を研究する上に大きな手がかりを提供するものと思ひ、整理をはじめた。この論文は大きく2部に分れるが、第1部は、テル・サラサート最下層の発掘成果をまとめる報告篇であり、これを資料として、第2部考察篇においてほかの同時期の諸遺跡との比較研究を行ない、この時期のもつ重要性の指摘と問題の提起をする。

第1部

1-1 遺跡

テル・サラサート (Telul eth-Thalathat) 遺跡は北イラクの中心地モースル市の西約 90 km の所にある。(江上ほか1965: 圖版6)

アラビア語で「3つの丘」を意味するこの遺丘群は、遠望すると大きな3つの丘が目につくので、このように命名されたものであろう。しかし、近づいてよく観察すると遠くからは見えなかつた低い丘があることがわかる。(江上ほか1965: 圖版7) 東京大学イラク・イラン遺跡調査団は、発掘を開始するに先立つて、4つの丘にひとつずつ名稱を與えた。第2号丘とは、テル・サラサート第4番目の大きさの丘である。

1956年にはじめて発掘調査を行なう際、第2号丘を最初に手がけようと思ったのは次の理由による。

1. 緩傾斜の単純な小丘で、後世墓地などが營なまれた形跡がなく、テルの原形をよくとどめているように観察されること。
 2. 遺跡表面に散布する遺物から、原始農村の単純遺跡か、あるいはそれに近い種類の遺跡であると推定されたこと。
 3. 遺跡の規模が小さく、比較的短期間に發掘調査を完了するという見込みがあつたこと。
- などであつた。(江上1953: 9)

1956—57年に、2シーズンにわたる發掘調査が第2號丘で行なわれた。各層位の農村の様相を明らかにするよう、できるだけ廣い面積を平面的に掘り下げていくことと、第2號丘の堆積を層位學的に確認するために深いトレンチを掘ることが併行して行なわれた。前者の目的に關しては、第XII層まで掘り下げること成功し、VII a層までがウルク期(ガウラ期)、VII b層から下がウバイド期の堆積であることを確めた。一方後者の目的に關しては、ウバイド期の堆積の下に粗製無文土器を主體とする文化層の存在することを確認した。(江上1953: 62—68)

その後、革命によつてイラク國の王制がたおれ、共和制が施かれ、一時國內の治安が悪くなつたためにイラクでの調査ができなかつたが、ようやく1964年に第3シーズンの發掘に着手することができた。第3シーズンの發掘は、先の2シーズンよりも發掘區域を若干狭くはしたが、平面的に掘り下げていく方針は踏襲した。この調査の概報は、すでに東洋文化研究所紀要第38冊(江上ほか1965)に發表されている。筆者が第1部と稱するものは、第3シーズンに第2號丘最下2層(XV, XVI層)で發見された粗製無文土器を指標とする文化の報告である。

1—2 遺構

XIV層にはウバイド期の遺構がM—O—VIII—IXの6區にわたつてか

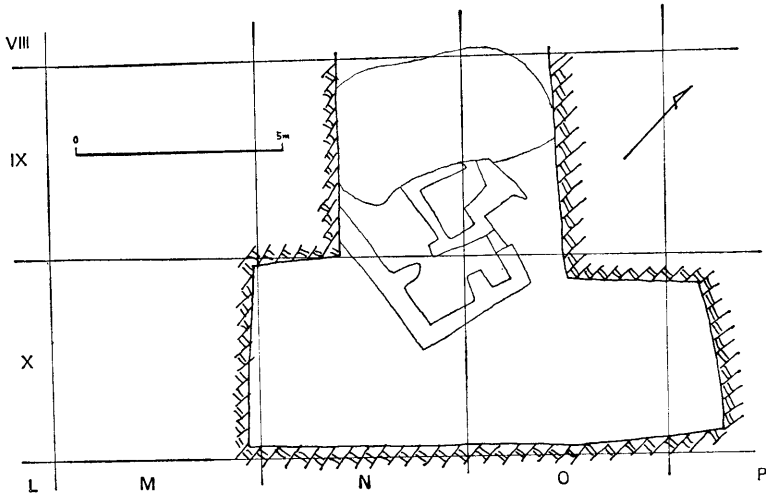


Fig1 XV, XVI 層発掘区域

なり保存よくのこされていた。これらの遺構群の東に隣接する、N-IX, N-X, O-X の3区では、XIV層の遺構は発見されず、XIII層のE3溝によって深く掘りこまれていた。(江上ほか1965) XIV層の調査を終えてからこれら4区において、さらに下の堆積を調査すべく発掘の重点をここに移し、掘り下げていった。その結果、XIV層の下は、それまでの灰色がかつた黄褐色の土でなく、茶褐色の土が堆積しており、この土が堅くしまつた土層であることが判明し、その土層中からは、今までにもE3溝の中などでウバイド期の彩文土器に混つてわずかながら出土していた粗製土器のみが出土することがわかつた。遺物の混入をさけるために、まず発掘区域 (Fig1) 全域にわたつて、茶褐色の土の面が出るまで清掃した。その際、出土した遺物をXIV~XVとして分類した。

このような處置をした上で下層の發掘をはじめたが、最初にあらわれたのがXV層であつた。さらにその下にあらわれたのがXVI層の堅穴であり、この堅穴は地山に掘りこまれていた。堅穴が處女層に掘られていたことは、

發掘區域の南端で深さ 1.5 m のピットを掘り、それが完全な無遺物層であることを確めたのである。(Pl 2—1 上方の四角いピット参照)

1—2—1 XV 層の遺構

XV 層はさらに a, b, c 3 層に分けることができる。これらのなかで最もはつきり遺構の確認ができるのは XV b 層である。

袖壁で 2 つの部分 R 137 と R 138 に分けられた長さ 2.3 m, 巾 1.2 m の部屋とその西側に並んだ R 140 と R 141 の部屋によつて構成されたものが、XV b 層の建物である。(Pls 1—2; 8) R 140 の南側の壁は F 2 (XIV 層) の建物の下方に入りこみ、その端は確認することができなかつた。また、R 141 の西側の壁は XIV 層からの深い掘りこみ (XIV-P と畧稱する) によつてけずられており、さらに西に別の部屋があつたかどうか不明ではあるが、一應この四部屋によつて成る建物をほぼ完全にのこされた一軒の家とみることができる。この建物にはジャルモ遺跡にみられるつくりつけのカマドは發見されない。

建築史學の立場からこの調査に参加した堀内(1964: 44)は XV b 層の遺構に關して、「R 140 は一見前面吹きはなちポーチのようにみえる。もし、この見解が正しければ、横長廣間と、その前面にある側壁とポーチという構成をもつていたことになる。この構成は F 2 (XIV 層) の住宅と全く同じ原理から成つている」と述べている。この解釋に、R 138 の北壁にある閉じられたかつての入口と思われる部分 (Pl 8 の點線で示した所) について若干つけ加えておきたい。

現在の近邊の村では、家を日乾レンガでつくつており、入口は狭く、一軒の家に複数の入口があることが多い。この場合、彼らは冬期には、おそらく保溫のためであろう、不要な入口にレンガをつんで閉じてしまうことがある。夏期になるとまたレンガをはずして、出入口として利用する。今日行なわれている習慣を XV b 層の遺構にもあてはめて考えることができるのでは

ろうか。この推測にもとづくとき、ひとつにはこの遺構の放棄されたのが冬期であつたことが想像される。もうひとつには、われわれが R 139 と名づけた空間の意味を考慮する必要があるといわねばならない。R 139 と名づけた部分はたしかに壁で囲まれていないので、部屋とはいえない。しかし、土器片をはじめとするさまざまな遺物が最も稠密に出土する。この事実からこの空間を夏期における仕事場としてみることも可能ではないかと考えるのである。

次に建築材料について觸れる。XV b 層の「建物の大部分は日乾煉瓦ではなく、練土（ピゼ）で造られていたとみられるが、R 140 の壁には煉瓦状の色がわりの壁面がみられる。従つて部分的には日乾煉瓦がすでに使われていたのかもしれない。ただ目地の様子が普通の日乾煉瓦とちがうから、あるいは煉瓦状に整形した土を、乾かないうちに積んだのかもかもしれない。」（堀内 1964 : 44） XV b 層の建物の壁は、まだ日乾レンガの発明がなされず、練土をつみ重ねてつくられたものとみられる。堀内はこれをピゼ（pisé）とよんでいるが、これについてすこしのべておきたい。

「フランス語の pisé が考古學ではよく用いられるが、これは適切でない。というのは pisé は杵にやわらかくこねた泥をつめこんでつくるものをいうからである。またスペイン語やアメリカ語で使用するアドベ（adobe）ということばは、ときには日乾レンガそのものを、ときには日乾レンガでつくられた壁をいうのに用いられる。イラクでは現在でも *tauf* の壁が庭や内庭の壁としてつくられている。これをつくるときには杵は用いられず、ジャルモ遺跡の *tauf* にも何ら杵が用いられた痕跡がない。従つて、ジャルモ遺跡の建材を *tauf* とよんだ方がより適切であろう。*tauf* のつくり方は以下のごとくである。十分やわらかくした泥を 3～4 インチつみ、両側と上面を平らにする。必要な範囲をめぐる一段ができると次にまた一段つむ、これをくりかえしていつて高い壁にするのである。」（Braidwood and Howe 1960 : 40）

筆者がイラン高原南西部のマルヴ・ダシュト平原の村（ケイルアーバード）

で見聞したことも、この指摘に合う。ペルシア語では、アラビア語で *tauf* と呼ぶものを *chineh* と呼ぶ。つくり方は先に引用したものと全く同様で、多くの場合、果樹園などの壁をつくるのに用いられている。アラビア語で *libn* と呼ばれる日乾レンガは木製の升形の木枠に入れてつくり、これをペルシア語では *khesht* といい、家の壁を築くのに普通用いられている。また、圓錐形にしたてずくねの日乾レンガがあり、村をとりかこむ厚い壁などをつくるときに用い、これを *nuna* とよんでいる。これは adobe に當るといえよう。ここで重要なことは、現地の人々がこれら區別を載然とつけていることである。

もし、フランス語でいう *pisé* が枠に入れてつくるものであるとすれば、枠を用いないアラビア語の *tauf* もしくはペルシア語の *chineh* を *pisé* と稱することは誤解をまねくであろう。もちろん、考古學的に發掘された古い壁から製作の段階で枠を用いたかどうかを判定するのはむずかしい場合が多かろう。だがしかし、枠に泥を流しこむ方法と枠を用いず、一段つくりそれがあるていど乾燥してその上に人がのれるようになってからまた一段つむ方法のちがいは把握できるであろう。その意味で、XV b 層の建物の壁の材料を *pisé* というよりはやはり *tauf* と呼ぶ方がより正確である。

しかし建材が同じ *tauf* であつても、テル・サラサート遺跡 XV b 層にはジャルモ遺跡においてみられるような壁の基礎に塊石を敷いた形跡は全くない。

R 137 と R 138 を区分する袖壁の端にある石、R 140 の南壁からすこしはなれた所にある石 (Pls 1—2; 8) はいずれも平らたい石であり、これらはいずれも立っているので、壁を保護するために置かれているのではないかと思われる。

XV a 層としたのは、XV b 層の建物が放棄され崩壊した後で壁の上部がこわれて堆積した、その面の上のにつている文化層である。(Pls 1—1; 7) XV a 層の時代に XV b の建物のあつた空間が住居として利用されたか

どうかよくわからない。しかし、XV b の R 141 の北隅に 2 個の爐址があること、R 139 には扉の軸受け石 (door socket) をはじめとする石が数個かたまつて存在していることなどは、住居として利用されないまでも、この部分が XV a の人々によつて利用されていたことを物語るものといえる。では、当時の主要なる建物はどこにあつたかという点、それは XV b の建物の東北部に壁の残存がみられる遺構ではなかつたかと想像している。この部分的に残つた壁は保存が悪く断片的にしかのこつていないし、發掘区域の中に入つていないので、建物のプランなどについては全く不明である。壁の材料も XV b と同様、*tauf* であつて、塊石の基礎敷石などみられない。しかし、層位學の見地からみて XV b より上層のものであることはいえる。XV a の建物が放棄されて後數千年の長きにわたつて、第 2 號丘は無住の地となつたために XV a の建物の崩壊が著るしく進行し、保存が悪くなつたものと思われる。

次に XV c 層の遺構についておのべる。これは Pl 18 に圖示した通り、XV b 層の建物の直下にのこる断片的なもので、長徑約 4 m、短徑約 2,5 m の橢圓形の範圍に玉石を敷いた床をもつ遺構である。これが、どういう性格のものであるか全くわからないが、XV b 層の建物の壁の下に入りこんでいることから、XV b 層の下層として處理した。また、龍骨形壺 (Pls 3—1; 10—3) を用いた甕棺も XV b の壁下に位置するのでこれに對應するものと考えている。

1—2—2 XVI 層の堅穴

XVI 層は XV c 層直下にあり、處女層の茶褐色の地山に掘りこまれた堅穴によつて成つている。堅穴は全部で 8 個發見された。(Pls 2—1・2; 9) 發掘區域にひつかかるもの、部分的にこわれているものもあつて、完全なプランをあらわしえないものもあるが、堅穴のプランはほぼ圓形か橢圓形であつたらしい。大きさ、深さは Table 1 のごとくである。

	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)
Pt 101	?	1.8	36
Pt 101 a	2.7	?	53
Pt 102	4.0	?	78
Pt 103	5.5	3.1	24
Pt 104	?	?	?
Pt 104 a	?	1.5	16
Pt 105	2.8	2.4	56
Pt 106	?	?	?

Table 1 XVI 層の堅穴の規模

これらの堅穴の中で、Pt 103 のようにはつきりと區別された爐の址のあるものや、Pt 101, Pt 102 のように明確に區別されてはいないが、炭灰の堆積した爐址を有するものがある。堅穴が完全にそのプランの全貌を明らかにしている中で爐址を持たないのは Pt 105 だけである。

8 個の堅穴は同時に營なまれたのではなく、前後関係のわかるものがある。Pt 101 a は Pt 101 より新しい。Pt 101 は Pt 105 より新しい。Pt 103 は Pt 105 より新しい。上記のごとき前後関係が發掘の過程で確認されている。したがって、一時点における堅穴の共存関係を復原することは、日本の堅穴住居址からある時点での農村のありさまを復原することの困難さと同様のむずかしさをもっている。しかしながら、Pt 103 の掘りこみの線が Pt 105 に近い部分で Pt 105 の輪郭にかなり影響されていることなどから、その時間的前後関係は決して大きなものではなかつたと思われる。むしろ比較的短かい時間の間に營なまれていたとみる方が妥当である。

次に、これらの堅穴がはたして住居址であつたか否かは大きさの点などから問題がある。しかし、筆者は江上ほか (1965: 11) と同様爐址を有する堅穴があることから、堅穴住居址であるとみたい。發掘の過程で堅穴の上部構造を暗示するような證據は何ひとつ得られていない。だから、どのように屋

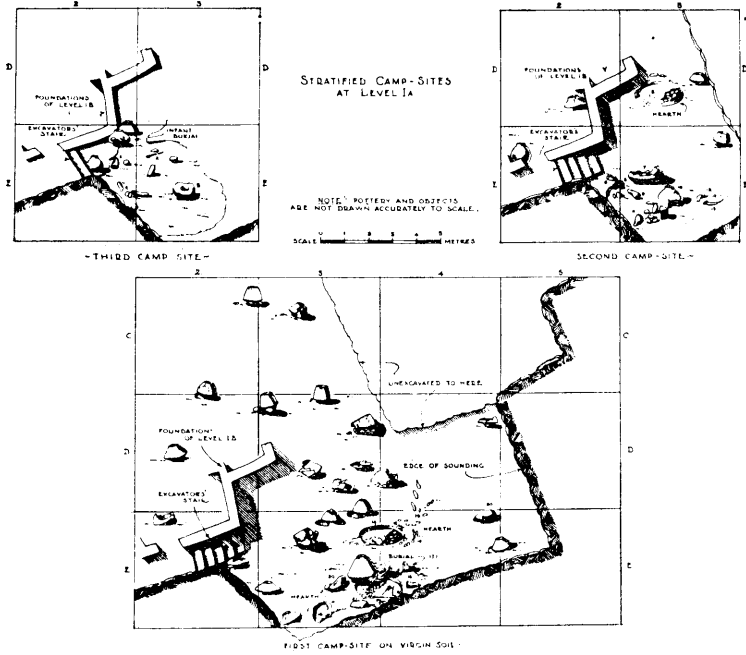


Fig 2 テル・ハッスーナ1aの層のキャンプ・サイト (Lloyd and Safar 1945 : Fig 27)

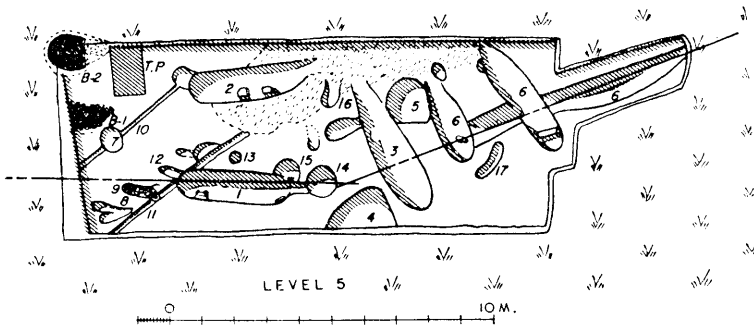


Fig 3 テル・マタラ第5層の竪穴 (Braidwood et al 1952 : Fig 4)

根を葺いてあつたかわからないが、おそらく棒を立てテントのようなおおいをつけていたものと想像される。もしそうだとすれば、必ずしも柱穴がなくても不思議はない。またこのように考えれば、堅穴の部分だけをテントがおおつていて、その中だけで生活したと考える必要もない。堅穴を含む広い平面にテントがかかつていて、穴の部分特別な目的に使用したと想像してよいのではないかと思つている。そうすれば、テル・ハッスーナ遺跡最下層のキャンプ・サイト (Fig 2) と同じ種類のもつとみられるのでないだろうか。上記の理由から筆者としては、テル・サラサート XVI 層の堅穴をマタッラ遺跡のそれ (Fig 3) と比較するよりはむしろハッスーナ遺跡最下層のキャンプ・サイトに比較して考えることに興味を覚えるのである。

1—3 遺物

出土遺物は、大きく分けて XV 層出土のものゝ XVI 層出土のものゝに分けられる。XV 層については、遺構の分類にしたがつて、a, b, c と 3 区分し、さらに XV b 層については各部屋毎に分け、とくに上記細分に入らないものを XV 層としてある。XVI 層については、XVI 層の堆積の中から出土したものと、各堅穴から出土したものを区分してある。

筆者が遺物の整理上最も中心的に關心をもつたのは、XV 層と XVI 層の遺物の上でのちがいである。一見した所、とくに土器においては全く同じように見えながら、遺構の面で XV 層では地上に泥で建物を建てているのに対し、その前の XVI 層ではまだ地上に建物を築くことをせず、地面から掘り下げた堅穴を營んでいることは、その間に何らかの革命的な變革ないしは別の所からのアイディアの導入を想定しなければ説明がつかない。だが、もし遺物の上で XV 層と XVI 層との間に決定的なちがいがあるとすれば、それは文化のちがい、もしくは別の文化としてとらえることができると考えられる。この觀點に立つて、XV 層の遺物と XVI 層の遺物との間に本質的な相違

が認められるか否かを明らかにすることを目標にして遺物の整理を行なつた。その結論は後にゆずつて、まず、遺物の記述を行ないたい。

1-3-1 土器

1-3-1-1 完形土器

完形土器つまり口縁部から底にいたるまで連続してのこつていて、器形全体がうかがえるものはわずかしかない。XV層出土の鉢 (Pl 10-2), 小形深鉢 (Pl 14-3), XIV層よりの掘り込み凹地 (XIV-P) の中から出土した平面形が楕圓形を呈する鉢 (Pl 14-5) の3点しかない。完形土器に準ずるものとして、口縁部もしくは底は失なわれているが、ほぼ器形のうちがえるものとして、XV層出土の壺 (Pl 14-1), 壺 (Pl 10-4), XVc層出土の龍骨形壺 (Pl 10-3), XVI層出土の深鉢 (Pl 14-6), 平面形が楕圓形を呈する鉢と同じ器形のものと思われる鉢 (Pl 14-4) の5点がある。これらを合わせても8点しかなく、はたしてこれだけの器形の種類が當時つくられた土器の器形のバラエティを代表しているかどうか疑わしい。

完形土器1 (XVb-R 140), Pl 10-2, 登録番號3 ThII-825, 高さ9.5cm, 最大径26cm

大きな破片として出土したが、他にこれにつくものはない。

胎土：多量の礫を含み、若干の砂粒を含む。

整形：wet-smooth, つまりまだ粘土がやわらかいうちに、あるいは少々かたくなつていたら水をつけて器面をなでるていどの處理

焼成：土器の外表面は赤褐色、内表面は褐色、部分的に黒褐色を呈し、壁心は黒い

完形土器2. 小形深鉢 (XV), Pl 14-3, 高さ4.3cm, 最大径3.7cm

小さいでずくねの土器で、口縁部が欠けているだけであとはほぼ完全

胎土：礫の含有はすくない。砂粒は表面からはみえないので含まれていないのかも

しれない

整形：表面がつるつるしており、磨研されているとみてよい。しかし光るほどの磨研は行なわれていない

焼成：土器の内外表面とも褐色。外面が部分的に赤褐色を呈す

備考：他の大多數の土器に比して、つくりがていねいといえる

完形土器 3. 平面形が楕圓形を呈する鉢 (XIV-P), Pl 14—5, 長径約 28 cm, 短径約 17 cm, 高さ 9.5 cm

XIV 層からの掘りこみ凹地より出土。

胎土：苧を多量に含有。直径 3 mm ぐらいの砂粒がかなり混入

整形：器壁のいたみがはげしく、よくはわからないがおそらく wet-smooth

焼成：土器表面はレンガ色つまり濃い赤褐色を呈し、器壁中心部は黒い

準完形土器 1. 碗 (XV), Pl 14—1, 登録番號 3 ThII—810, 最大径 17 cm

破片をつなぎ合わせても底を欠く。

胎土：苧と砂粒を含有

整形：表面は若干磨研してある

焼成：表面は内外とも黄褐色を呈す

準完形土器 2. 碗 (XV), Pl 10—4, 最大径 15.5 cm

胎土：苧の含有多く、砂粒はみられない

整形：wet-smooth

焼成：器壁表面は内外とも褐色、壁心はわずかにねずみ色を呈し、火まわりはよい

準完形土器 3. 龍骨形壺 (XV c), Pls 3—1; 10—3, 登録番號 3 ThII—839, 最大径 43 cm

XV b の建物の壁下より出土し、XV c 層に屬するものと思われる。嬰兒の甕棺として使用されていた。出土の時には逆さに置かれていた。口縁部が欠けているのは、こわれた土器を嬰兒を埋葬するのに轉用したことを物語っている。

胎土：苧を多量に含有、砂粒は直径 2~3 mm ていどのものがほんのわずかみえる

整形：wet-smooth

焼成：器面は外が赤褐色、部分的に褐色に變化する。内面は火の通りが悪く、褐色

初期農耕村落の研究

を呈すが、はげ落ちており壁心の黒色があらわれている。壁心の黒色部は、器壁の厚さの50～80%におよぶ

備考：龍骨部に織布の壓痕がある。(Pl 3—2) 装飾の意圖はうかがえず、偶然の所産と思われるが、当時の織物を知る上に重要な手がかりを提供する。ジャルモ遺跡でも2點の同様の壓痕が認められたという(Braidwood and Howe 1960 : 46) が何らくしわく報告されていないので比較できないが、テル・サラサートのこの例は、縦糸のはりが強く、横糸のはりが弱いもので、マットなどの織り方に近いものと考えられる

準完形土器 4. 深鉢 (XVI), Pl 14—6, 最大径 14 cm

龍骨部で2つに折れている。底はないが、底近くまでのこつている。

胎土：苧はそれほど多くない。直径 5mm ぐらいの砂粒を含む

整形：wet-smooth, 外面はいたみがはげしくよくわからないが、内面は保存よく、凸凹した面をなでたあとがみえる

焼成：外は褐色、内は赤褐色、壁心は口縁近く 5 cm ぐらいでは褐色だが、それから下は黒い。焼きはよい方

準完形土器 5. 平面形が楕圓形を呈する鉢 (XVI—Pt 105) Pl 14—4 高さ 10.5 cm

2個の破片をつなぎ合わせたもの。しかし全體が Pl 14—5 (完形土器 3) と同様の器形であることは十分にうかがえる。

胎土：苧多量に含有、砂粒はみられない

整形：いたみが著るしくわからないが、おそらく wet-smooth

焼成：表面は赤褐色で部分的に黒褐色を呈す。壁心は黒色

以上のべた8點の完形ないしは準完形土器をもつて、XV, XVI層の土器の種類すべてが含まれているとは思えない。しかし、器形のバラエティとしては、

- 1 無頸の龍骨形壺
- 2 龍骨にちかい明瞭な稜を有する鉢
- 3 深鉢

4 埴

5 平面形が楕圓形を呈する鉢

6 小形深鉢

などがあることは積極的にいいうる。それらに加えて、破片から

7 方形の箱形土器 (Pl 13—7)

8 脚をもつ土器 (Pl 11—5, Pl 13—2, Pl 13—1)

が想定できる。方形土器の破片は、のちに破片處理の項でのべるように、底部破片の中に直線に近い輪郭を示すものがかなり存在するので、想像の域を出ないが一應箱形土器を考えてよいと思つている。しかし、佐藤の箕形土器と稱したもの(江上 1953 : 66) の存在は認められていない。脚をもつ土器というのは、マタツラ (Braidwood *et al* 1952 : 14, Fig 11—1) にもあり、報告者は“fruit stand”とよび、三脚であつたろうと考え、脚の上には丸底の埴がつくとおべている。Pl 11—5 や Pl 13—1 は最下端がすりへつており、形こそちがうが脚足とみることは間違いではあるまい。疑問のこのころのは、Pl 13—2 である。とくに最下端がすりへつていないこともないし、大きさ、形の上からみて、把手としても機能しそうである。マタツラからは把手もでている (Braidwood *et al* 1952 : Fig 11—3) が、それは大きな乳房状突起のようなもので形態がちがう。そこで、ここではやはり脚足とみておきたいのである。

破片から器形のバラエティに加えることができるのはこれぐらいしかないが、いずれにせよ器形の種類は決して多くない。

1—3—1—2 土器の製造過程について

XV, XVI 層の土器の製造過程を含めた全體の特徴をまとめると以下のごとくである。

1 胎土

胎土には一般に苧の混入が著るしい。まれにわずかしか含まれていないものもあるが、全く含まれていない例というのではないといつてよい。(この點でのちにのべる土偶、紡錘車、土製投彈の胎土と大いに異なる) 苧の混入の有無をもつて精製、粗製の區別をすることは、テル・サラサートのこの種の土器においては不可能である。砂粒の混入は、必ずしも一般的とはいえないが、大きな破片なら探せばまずみつかる。しかし必ず含まれているとはいえない。この點から、意圖して混ぜたものではなく、偶然に入りこんだものとみたい。マタッラでは、混入する砂粒の大きさによつて分類を行なつてい⁽¹⁾るが、テル・サラサートでは意味がない。だが、印象として次のようなことがいえる。苧の含有もすくなく、器面がていねいに仕上げられている土器では砂粒の混入もすくなく、あえていうとすれば、これらを稱して精製土器といえるかもしれない。だが、一般に精粗の區別を一線をもうけて分けることは不可能である。⁽²⁾

2 成形

完形ないしは準完形土器の記述においては觸れなかつたが、いずれもてづくねであり、おそらくは輪積み法によつたのであろう。底の破片の中には平底それ自體と胴部への立ち上り部分ではずれるようにこわれているものがあるので、平底をつくり、それに側壁をのせる方法がとられたのであろう。もちろん、全部がこの方法でつくられたとはいえない。ゆるやかに側壁にうつる底では、別のつくり方が行なわれた可能性はある。胴部は適當な高さの粘土の帯をつみかさねていつたのであろう。たとえば、底から龍骨部までの比較的大きな破片である Pl 11—12 では、6—7cm ぐらのおきにはり合わせたあとと思われる隆起がみられる。胴部のはり合わせは比較的よくなされたものらしく、この部分で密着不十分ではずれているようにこわれている例はあまりない。

胴部に龍骨様の稜を有する土器は、この部分で上下をはり合わせているら

しい。ここでこわれている破片がかなり多い。こわれた方から想像すると、まず平底の鉢のようなものをつくり、それに内閉するように粘土を重ねていつたものらしい。

3 整形

器面調整は、一般には wet smooth である。つまり、とくに強く磨研するのではなく、粘土がまだやわらかいうちに、水をつけてあるいは水をつけずに器面をこすつたていどである。手でこすつたらしいことは、指紋ののこつている破片があることから想像できる。とくに粘土をしまらせるために道具でたたいたとは思えないし、土器の調整具のようなものはみつかつていない。まれに、器面をつるつるにしたもの (Pl 14—3) があるが、これも一般的な規準からいつて磨研しているとはいいいがたい。

ほとんどの土器が無文土器であるが、數點彩文あるいは化粧土のついているもの、焼成後に顔料を塗りつけたものがある。一例としてあげた Pl 13—3 は XV 層より出土し、黄褐色の器面の上に、鈍い赤褐色の彩文あるいは化粧土をかけたものである。何かを描いたというのではなく、全面におよんでいたらしい。他にやはり XV 層から出土した土器片のなかにレンガ色の化粧土をかけたものが2點ある。同じく XV 層より出土した土器片に、焼成後赤い顔料をぬりつけたものが1點ある。これは、こすると赤い顔料がとれてしまうほどのものである。

4 焼成

器面は黄褐色ないし、赤褐色のものが多く、黒褐色のものがこれに次ぐ。點數をかぞえたのではなく、印象でしかない。大きな破片をみると部分的に変化することも多く、點數をおさえるのは容易ではない。

壁心は黒いものが壓倒的に多く、壁心まで表面と同じ色に焼けている例はごくすくない。器壁の厚さが 7~8mm を越えるものは、すべて壁心が黒いといえる。わずかに壁心まで火の通つているものは、厚さ 4~5mm ていど

の薄手のものであり、小形の比較的ていねいに作られたものが多い。

5 装飾

装飾であるのかあるいは実用的な目的を有するものかわからないが、口縁部直下に貼付文のみられる土器片がかなりある。Table 2 によつて明らかなように最も多いのは乳房状突起を1個つけたものである。XV層で17点、XVI層で5点、XIV層からの掘りこみ中に2点、合計24点⁽³⁾を出土している。そのうち7点を写真と実測圖であげた。Pl 12—8 (XV b—R 139), Pls 4—1; 12—6 (XV), Pl 12—5 (XV), Pl 12—9 (XV b), Pl 12—4 (XV), Pl 13—5 (XVI), Pl 13—6 (XVI—Pt 105)。乳房状突起の中でも多い形が圓形ないし橢圓形のものだが、形そのものは個體によつて變異がある。Pl 13—5 はいわば2段の貼付のようであるが、一應乳房状突起の變形とみることができる。乳房状突起に孔を貫いたものはない。すべて貼付けただけのものである。全部の破片で口縁部近くであることがわかるわけではないが、口唇面のついている破片がかなりの数におよんでいることから、ほぼ口唇部直下につけられたものとみることができる。

	XIV-P	XIV~XV	XV	XVI	計
乳房状突起1個	2	3	14	5	24
乳房状突起2個連			1	1	2
特殊形	1	3	5	1	10

Table 2 貼付装飾の層位別出土表

次に、乳房状突起を2個連ねたものが2点ある。Pl 12—7 (XV), Pls 4—2; 13—4 (XVI—Pt 102)。これらの破片は両方とも口唇面をのこしていないが、乳房状一個のものと同様、口唇直下にほどこされていたとみてよいであろう。

ほかに特殊形がある。これらは一か所個性をもっており、同じものは2

つとない。

a) XIV層からの掘りこみ中から出土したもの

Pl 12—12：直線の貼付に接するように乳房状突起がついた形であり、何を象どつたものかわからない。より大きな装飾の一部であつたとみることができるが、口唇面直下にあり、その可能性もうすいように思える。

b) XIV～XV層出土のもの

Pls 4—3; 12—1：十字形の貼付装飾であつたと思われる。十字の右端が缺けてしまつているので他の模様も考えられるが、十字形を考えるのが穩當であろう。口唇部直下にある。

Pl 12—2：口唇面に平行にはりつけられた直線文。この場合はあるいは装飾としてより實用の便も考へうる。つまり、無頸の壺を持ち上げるときのちよつとしたひつかかりとしての働きはあるかもしれない。

Pl 12—11：上述のものと同じタイプではあるが、破片の観察からこの場合は垂直方向にはりつけられた直線文であつたらしい。したがつて、破片の大きさも小さいことであるので、より大きな複雑な装飾の一部とみた方がよさそうである。

c) XV層より出土したもの

Pls 4—4; 11—2 (XV)：乳房状突起とその下に貼りつけられた圓弧形の模様の組合せであるが、破片の端にわずかに器面のいたんだ部分があるので、これがもしはげ落ちたあとだとすれば、Pl 11—2 に示したように同形の装飾が2個並んでいたのかもしれない。

Pl 12—3 (XV)：口唇部直下にある鍵形の貼付文。

Pls 4—5; 11—4 (XV b)：口唇部直下にごく薄い貼付ではあるが明瞭な形をあらわしている。圖版説明では「人形文」としたが、この解釋には何ら根據とする所はない。別のもの、たとえば蛙を表わしているともみれる。しかし、これとて同様に説得力はもたない。筆者としては、一應「人形文」を

とつておきたい。

Pl 10—1 (XV b—R 139) : 口唇部で直径約 25cm, 高さ 19cm ぐらいにまでまとまる龍骨形壺の上部である。これは貼付装飾がいかにつけられていたかを知る上により手がかりになる。下に開く馬蹄形文であり, その反対側にもあつたかどうか間をうめる破片が失なわれているため不明である。また, 器面のいたみがかなり著るしいが, 他に貼付のはげ落ちた跡がないかと探したがみつからない。安全にいうなら, 馬蹄形文が一個つけられていたといえはよいが, 何となく反対側にもついでいて, 把手としての役割を擔つていたような印象をうける。偶然の所産であろうが, 土器の内側で口唇面から 1.5cm ぐらい下つた所に直径 2cm 弱の圓形の凹みがついている。これは, 指でついたものと思われるが, 位置も馬蹄形文と関係がなさそうである。

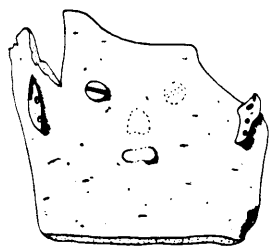
Pls 4—7, 11—3 (XV b) : 小さい不完全な破片であるが, 興味深いものである。半分以上失われているが, 楕圓形の貼付の長軸にそつて深い沈線を



Fig 4 ハッスーナ土器に人面のえがかれている例
(Lloyd and Safar 1945 : PL VII—2, 3)

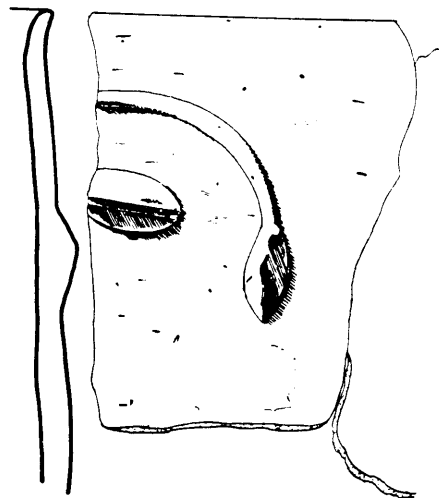


a



30

325 ?



b

31

Fig 5 a, b マタッラ精製土器, 人面付の破片
(Braidwood *et al* 1952 : PL VI-1, Fig 6-30, 31)

掘りこみ、その掘りこみの両側にできた稜の上に刻みをほどこしている。Pl 11—3 の上方にある圖は、筆者の復原圖であるが、これは何を形どつたものであろうか。「子安貝」ではないかと思つている。

さらに想像をたくましくして、テル・ハッスーナ出土のハッスーナ土器に人面のえがかれているものがあり、その目は貼付によつて表現されているし (Fig 4), マタッラ精製土器にも人面を貼付によつて表現している例 (Figs 5 a, b) があるので、時期こそテル・サラサートの例の方が古くはあるが、この破片は人面の一部で、しかも目を表わしているのではないかと考えている。

d) XVI層から出土したもの

Pl 13—8 (XVI—Pt 102) : のこつているだけでは「L」字に見えるが、はがれた部分からの推測によれば、もとの形は「L」字を對照に2個つけた錨形のものであつたらしい。

以上、特殊な貼付文についてすべてのべてきたが、その種類の豊富さには驚かされる。土器を飾ろうとする制作者の意圖は十分うかがえる。

装飾とはいえないが、XV層より出土した口唇部直下に貫通孔のある土器片 (Pls 4—6; 12—10) について觸れておきたい。この貫通孔は外から内方向に貫たれたものである。すこしちがうが、同様の破片はハッスーナでも出土しており、その報告者はこれを注口であるとみている。(Lloyd and Safar 1945 : 277, Fig 6—22) Pls 4—6; 12—10の場合は外側に凸部を生じているので、ハッスーナのものとは形態的に異るともみれるが、注口としての役割を否定するほどの理由にもならないと思うので、筆者は注口とみておきたい。

1—3—1—3 石膏による土器の補修・補強

Pls 5—1, 2 にあげた寫眞に土器を石膏で補修もしくは補強していたことを示す 2, 3 の例である。Pl 15—14 は、土器の口縁部近くが破損したため

に破損部を石膏で補った例ではないかと思われる。下の方には土器が石膏に付着している上、両端は土器の割れ目の凸凹をそのままうつしている。その上、口縁部は土器の口縁部形態分類で最も多い種類の典型的な「1」形を示している。(25頁参照) このような例は、他に2例あるのみだが、石膏による破損土器の修復例としてとりあげたい。

Pl 5—1, Pl 5—2, Pl 13—6 は修復というよりはむしろ粗製土器の補強のために石膏をぬりつけたものであろう。このように土器の両面に石膏をうすく(2・3mm~7・8mm)ぬった例は数多くみうけられ、口縁部のみでなく、胴部、底部の破片にまでおよんでいるのである。いうまでもなく、素焼の土器は水もれがはげしい。この時期の焼成不良の粗いつくりの土器ならば、水もれの度合は著るしかつたにちがいない。それをふせぐために石膏をぬったのではないかと思われる。もちろん、強度の點でも大いに役立ついたにちがいない。だが石膏製容器が存在したと想像できる證據は全くない。

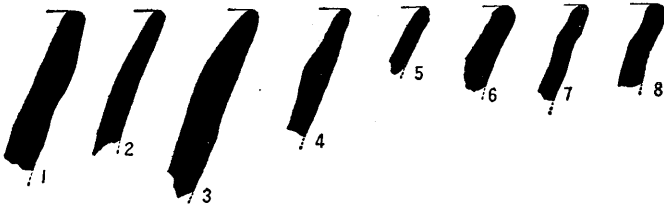
1—3—1—4 土器片

完形土器の項でのべたように、破片をつなぎ合わせて完形に復原できるものがわずかしかなかく、大多数の土器片は復原することができない。そのため土器片として処理することを考えなければならなかつた。この種の土器ははじめで発見されたものならば、テル・サラサート第2號丘最下層の出土物を整理するための目的だけで分類整理をしてもよいであろうが、現實には同種の土器はすでにハッスーナ、マタツラ、ジャルモ等の遺跡でみつかつており、テル・サラサートの第1, 第2シーズンの調査の際にもトレンチで出土しているので、すくなくともそれらの資料との比較検討の行なえるような整理を考えなければならない。ハッスーナ、マタツラ、ジャルモ諸遺跡出土の粗製土器については特別くわしい整理が行なわれていないのに對し、テル・サラサート第2號丘トレンチの資料は佐藤(江上1953: 62—68)がかなりこまか

い分類規準を設定し、土器片の整理を行なっているのである。われわれが第3シーズンに N-IX, N-X, O-IX, O-X, の各區で第 XV 層第 XVI 層と命名した層位から出土する粗製土器は、前回佐藤の整理したものと同じ種類のものであると考えられるので、筆者は佐藤の資料とわれわれの資料との比較が行なえるように、彼の行なつた分類方式に従つて粗製土器の分類を試みた。まず、佐藤の分類をここに再録する。

口縁部の分類

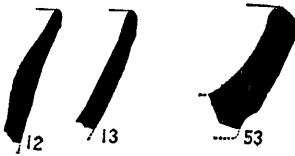
1 口端上面が丸味をもつもの



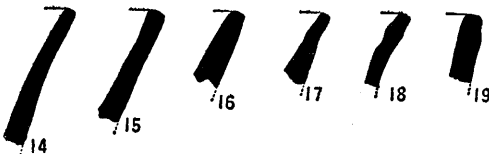
1x 口端尖端部が軽微な外反の傾向を示すもの



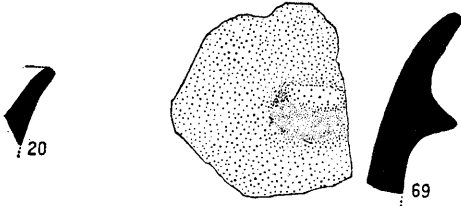
1y 内彎の傾向を示すもの



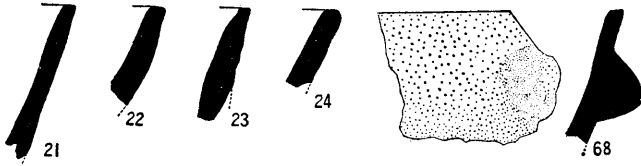
2a 口端上面が平坦で、その平坦面が外側に傾斜するもの



2ax 2a で外反の傾向を示すもの



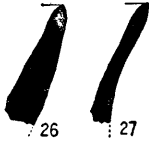
2b 平坦面が水平なもの



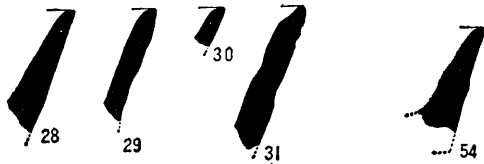
2bx 2b で外反の傾向を示すもの



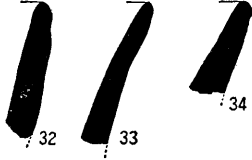
3a 口端部が稜をなし、その稜が口縁部のほぼ中央を走るもの



3b 稜が外側を走るもの。いいかえれば平坦な外表面と彎曲する口端部との境界が稜となるもの

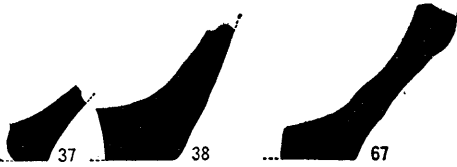


3c 稜が内側を走るもの



底部の分類

1a 側壁の下部，底面に近い部分と側壁が外反せず，そのまま底面に移り，その境界がかなり明瞭な稜をなすもの



1b 1a と同様の底で，側壁と底面の境界が丸味を帯びるもの



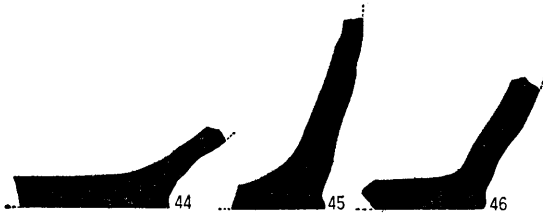
2a 側壁の下部，底面に近い部分で側壁が外反するが，底部が側壁の外側に張り出さないで，側壁と底面の境界がかなり明瞭な稜をなすもの



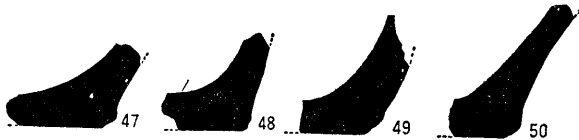
2b 2a と同様の底で，側壁と底面の境界が丸味を帯びるもの



3a 底部が側壁の外方に張り出し、側壁と底面の境界がかなり明瞭な稜をなすもの



3b 3aを同様の底で、側壁を底面の境界が丸味を帯びるもの



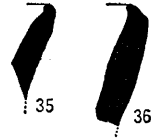
(江上1953: 62—68)

この分類のうち、底部の分類についてはこの方式に従うことはさほどむづかしくなかつたが若干問題がある。それは、佐藤が上記分類規準を盤形土器と思われる破片について設定し、彼が鉢あるいは埴形土器の底部破片と判定した3例のものは上記分類から除いているが、筆者は底部破片を完形土器の器形を考慮せず、全部いずれかに分類したことである。

次に口縁部破片については、より大きな問題がある。佐藤のあつかっている口縁部破片はすべて外に開くものであるが、XV, XVI層出土の口縁部破片の中には、内に閉じる口縁部の破片がすくなく存在するのである。もちろん、正確に測定できるものならば、口縁部の開きの角度を測つてそのちがいを明瞭に適できるが、破片で開きの角度を測定するにはあまりに誤差が大きすぎ、信憑性が乏しいので、外開するものと内閉するものに大きく2分して整理してみた。形態名の中でダッシュをつけてあるのが内閉するものである。形態 1' とは内閉し、口端部の丸味をもつもの (Pl 10—1, Pl 14—1) であり、形態 2'bx とは 2bx が内閉の状態になつたもの、つまり口端上面が平坦で内閉し、口端部近くがすこし開くもの (Pl 12—1) であり、形態

3'b とは、口端部が稜をなし、その稜が外側を走るもので内閉するもの (Pl 14—6) をいう。

なお、佐藤のいう特殊形 (右凸版) と稱するものはみら



形態		器壁厚		4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
外	1	1	3	3	11	4	4	8			5	6	8	2	3	1	1		1		61 (2)
	1x			1	1	2	1	1			5	1									12
	1y			1			1	2			1										5
開	2a																				
	2ax																				
	2b			1	4	3	3	5			4	6	1	1	1			1	1		31
	2bx							2			1	1									4
閉	3a	1		1	1	2	5	3			1	2	1	2	2						21
	3b	4		3	1	3	3	5			5	4	3	2					1		34
	3c													1							1
小計		1	8	10	18	14	19	24			21	21	13	8	6	1	1	1	2	1	169 (2)
内	1'			2	1	1	1	3			1	1	2		1	1					14 (2)
	1'x	1			1	1		4			1	3	1								12
	2'b					1		2													3
	2'bx					2		1			1										4
	3'a			2		1	1	1							2						7
3'b				1	1	1	1			1				1						6	
小計		1		4	3	7	3	12			2	3	5	1	4	1					46 (2)
計		1	9	14	21	21	22	36			23	24	18	9	10	2	1	1	2	1	215 (4)

Tabl 3 XV層口縁部：形態—器壁厚

形態		器壁厚																計
		5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17				
外	1	1			3						2		2	1				9
	1x					1				1								2
	1y				(1)													(1)
開	2a				1													1
	2ax																	
	2b			1						1		1						3
	2bx																	
	3a									2			1			2		5
3b									1	2		1					4	
3c																		
小	計	1		1	1	3	1			1	8		4	2		2		24
						(1)												(1)
内 閉	1'						1			1								2
	2'a					1	1											2
	2'b						2						1					3
	3'a					1												1
小	計				2	4			1			1					8	
計		1		1	1	5	5			2	8		4	3		2		32
						(1)												(1)

Table 4 XVI層口縁部：形態—器壁厚

れず，局所的な變異を示すものではないと思われる。

このような分類規準のもとに XV 層と XVI 層の粗製土器の口縁部および底部破片を分類整理した。口縁部の器壁の厚さは口端より約 2cm 下つた所で測り（佐藤と同様），底部の側壁の厚さはその破片において厚さが一定する部分を，立上り角度は底の面と側壁のなす角度を測定した。

口縁部破片については，形態と器壁の厚さの相關が知りうるような表 (Tables 3, 4) を XV, XVI 各層についてつくつた。用いた破片数は XV

初期農耕村落の研究

形態 \ 角度	80	95	100	105	110	115	120	125	130	135	140	145	150	計
1 a			2	1	6	4	14	9 (1)	12	5	1		2	56 (1)
1 b				2	3	1	1	4	7	5	4	1		28
2 a		1	2	1	9	13	15	10 (1)	5 (1)	2	3			61 (3)
2 b			(1)	2		2	1							5
3 a	1	1	2	2	4	6	2	4	2	1	1			26
3 b			1	1				3	2					7
計	1	1	6 (1)	9	23	26	33	30 (2)	28 (1)	13	9	1	2	183 (4)

Table 5 XV層底部：形態—立上り角度

形態 \ 厚さ	4	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	23	計
1 a		2	2	4	8	10	2	5	9	3	3	2	1	1	2		1	55 (1)
1 b		2	2	7	2	4	1	1		1	4	2			1			27
2 a	1			4	7	3	11	9 (3)	4	3	6	5	1	3	2	1		60 (3)
2 b					1	1	1			1		1						5
3 a			1	2	2	3	3	4	2	2	3			1				23
3 b					1	2	1								3			7
計	1	4	5	17	21	23	18	20 (3)	15	10 (1)	16	10	2	5	8	1	1	177 (4)

Table 6 XV層底部：形態—器壁厚

層で215点，XVI層で32点である。括弧内は完形土器のものを示す。

次に、底部破片については、個々の破片の形態を判定し、器壁の厚さ、立上り角度を測定した。その結果を、形態—立上り角度 (Tables 5, 8)、形態—器壁厚 (Tables 6, 9) 立上り角度—器壁厚 (Tables 7, 10) のそれぞれの相関のわかるようにまとめた。この表の合計で数字が合っていないのは、破片によつては形態の判定できないもの (すりへつたり、こわれた

厚さ 角度	4	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	23	計
80～										1								1
95～									1	1								2
100～				1		1	1		1					2				6 (1)
105～				1	1		(1)		1	2			1	1	2			9
110～				1	1	2	3	3	3	1	3	4			3			24
115～				2	1	4	1	7		2	2	2	1		3	1		26
120～		1	2	2	3	5	2	3	5	2	3	2	1	1				34
125～				2	6	3	6	4	5	1	1	2						31 (2)
130～		1		4	4	4	4	3	1	4	2	2		1				30 (1)
135～		1	2	4	1	2	2	1	1	1							1	16 (1)
140～	1	1	1	1	3	1							1					9
145～							1											1
150～				1		1												2
計	1	4	6	18	21	23	19	21	18	13	15	13	3	5	9	1	1	191 (4)

Table 7 XV層底部：立上り角度—器壁厚

形態 角度	95	100	105	110	115	120	125	130	135	計
1a					2		2	2	1	7
1b				1	1	2	2	1		7
2a				3	4	2	2	2	1	14
2b						2			1	3
3a				1		1	1	1		4
3b	1	1			3	1	2			8
計	1	1	1	4	11	7	9	6	3	43

Table 8 XVI層底部：形態—立上り角度

初期農耕村落の研究

厚さ 形態	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計
1a		1				1	2	2	1									7
1b		1	1			1	1	2			1							7
2a	1	1		2		2	1	2	1	1	1	1				1		14
2b					1		1	1										3
3a			1			1				2								4
3b	2			1	2			1	1					1				8
計	3	3	2	3	3	5	5	8	3	3	2	1	1		1			43

Table 9 XVI層底部：形態—器壁厚

厚さ 角度	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	計
90～									1									1
95～														1				1
100～				1														1
105～									1	2								3
110～				1		1	1	1								1		5
115～				1	2	2	1	2	1		1	1						11
120～	1		1		1		2	1				1						7
125～	1	1				2	2	2	1									9
130～		2	1	1			1	1										6
135～								2	1									3
計	2	3	2	4	3	5	5	8	6	4	2	1	1		1			47

Table 10 XVI層底部：立上り角度—器壁厚

りしていてどの形態に分けるべきか決められない), 同様の理由で厚さの測定できないものがあつたためである。用いた破片はXV層で197點, XVI層で46點(立上り角度—形壁厚の總計値が47になつているのはPl 14—4に

ついて2ヶ所で測定し、それぞれ異つた値を示したため)である。括弧内の数字は完形土器のものである。

なお、粗製土器破片のうち若干をバグダッド博物館に残してきており、これらの寫眞は撮つてあるが、形態、厚さ等の判定できる資料がないので、こ
(3)
こには入っていない。

口縁部

XV, XVI層とも外開する形態が圧倒的に多く、兩層とも全體の75%ほどが外開するもので占められている。この口縁部を有する器形は、壺、鉢、もし存在したとすれば皿などであろう。のこりの25%ほどが内閉する口縁部をもつが、これは Pl 10—1, 11—1, 14—6 などの龍骨部を有する壺、壺、深鉢などや Pl 14—1 のような壺の破片であると思われる。

口縁部が外開するもので、外反あるいは内彎する傾向をもつものが少量で、大部分が直口であることは、XV, XVI兩層を通じていえることであり、佐藤のMトレンチの結果 (Table 11) とも一致する。

厚さは XV層では 4mm~21mm まであるが、量的に多いのは、5mm~15mm のもので95%以上の割合を示す。XVI層では、全體の量がすくないためか 5mm~17mm までの變化しかないが、5mm~15mm のものがやはり90%以上の割合を示す。

佐藤は 8mm 以下, 9mm~10mm, 11mm~14mm, 15mm 以上の4

形態			計
1		19	26
	x	4	
	y	3	
2	a	9	19
	x	2	
	b	7	
	x	1	
3	a	2	15
	b	8	
	c	5	
計		60	

Table 11 口縁部：形態別集計
(江上1953: 64)

形態 \ 厚さ(mm)	6~8	9~10	11~14	15~19
1	8	6	7	5
2	11	5	3	
3	3	6	6	
特殊形		1	1	
計	22	18	17	5

Table 12 口縁部形態—器壁厚相関表 (江上1953: 65)

つに区分して表 (Table 12) をつくつた。そして、「1は薄手のものからとくに厚手のものにいたるまで平均して存在する。2は薄手のものに多く、とくに厚手のものがない。3は中程度ないし厚手のものに多く、2と同様とくに厚手のものがない」と表をよみ、「一般に厚手のものには粗製のものが多く、入念につくられたものは薄手に多いから、2はこの種の粗製土器のなかでは精製の種類に多いとみることができよう。しかし、1が薄手のものにかなり多いことは、この時期の土器が概して等質的であることを示す」と判断した。

筆者の整理した口縁部土器片の場合 (Tables 3, 4) と比較してみると、資料の点数が多くなっているためか必ずしも佐藤の表とは一致せず、結論的にいってしまえば、どの形態も薄手から厚手まで分布しているとしかいえないのである。しかし、表にはあらわれないが、厚手のものは粗製が多く、薄手のものに入念につくられたものが多いという佐藤の観察には全く同感である。

まず、外開するものについてのべたが、次に内閉する口縁部破片について觸れたい。Tables 3, 4 をより単純化した Table 13 によつて明らかなように内閉する口縁部破片が XV, XVI 層を通じてかなりみうけられる。内閉するものについても直口が多く、外反もしくは内彎する傾向を有するもの

形 態			XV			XVI		
			個數	小計	計	個數	小計	計
外 開	1		63	80	171	9	12	25
		x	12			3		
		y	5					
	2	a				1	4	
		x						
		b	31	3				
	x	4						
3	a	21	56	5	9			
	b	34		4				
	c	1						
内 閉	1'		16	28	48	2	2	
		x	12					
	2'	a				2	5	
		b	3	7		3		
		x	4					
	3'	a	7	13		1	1	
		b	6					

Table 13 口縁部形態別個數：XV層とXVI層の對照表

はすくないことは外開する形態と同様である。

さきにこれらは龍骨部を有する壺，碗，深鉢や内閉する碗のものであろうと書いたが，この點をもう一度考えなおしてみたい。龍骨部破片もかなりの數量あり，その破片が龍骨部において内屈する（P1 10—3'）ものか，外屈する（P1 10—5）ものかに區別して，XV，XVI兩層でそれぞれの點數をかぞ

	XV b	XV c	XV	XV 計	XVI
内 屈	31	8	143	182	40
外 屈	2	5	18	25	0
不 明	3	3	14	20	0

Table 14 龍骨部破片：内屈，外屈の層位別出土数

えてみたのが Table 14 である。これによれば、内屈するものが大多数を占めており、外屈するものがわずかしかなくわかる。龍骨部で内屈しそのまま口縁部に到れば、當然口縁部は内閉しなければならない。しかし XV, XVI 層のいずれをとつてみても、口縁部で内閉する破片の数倍の量の内屈する龍骨部破片が出土している。一方、Mトレンチの粗製土器の場合は、口縁部が内閉するものがなく、龍骨部破片（佐藤は側壁に屈曲のある例と記述している）は20例あつて、内屈するものはそのうち4点である。Mトレンチの場合は龍骨部破片で外屈するものの方が多く、XV, XVI 層の場合と全く逆ではあるが、いずれにせよ、内屈する龍骨部破片に比して内閉する口縁部破片があまりにもすくないといわねばならない。

この事實は、この時期の土器の器形において、何らかの事實を暗示しているのかもしれないが、それは今の所筆者にはわからない。ごく單純に次のように考えておきたい。つまり、一般に龍骨部では器壁の厚さが増しており、破片としてのこりやすい要素をもっているのに對して、口縁部の方は甕棺として用いられていた龍骨形壺(Pls 3—1; 10—3)について觸れ、石膏による補修の項でのべたように、口縁部はこわれやすかつた。そのため、破片としてのこつた量の上に大きなひらきが出てきたのであろう。

底部

底部破片については佐藤は器壁の厚さを測つていないが、筆者は側壁がそ

の土器片において一定した厚さを呈する所をとつて測つた。そして、形態、立上り角度、厚さの3つの要素それぞれの相關のわかる表を作成した。(Tables 10~15)

厚さについては XV 層では 4mm~23mm までみられ、XVI 層では 6mm~22mm までみられる。これを口縁部破片の厚さの變化に比較すると兩層いづれも口縁部の最大厚の値より、大きいものがあることが知れる。これは、底部近邊の方が口縁部より器壁厚が若干厚くなつていたことを示すのであろう。また、厚さの變化をみると、底部破片の方がより厚いものに數量が多くなつており、完形、準完形土器の知見も上記の推測を裏づける。

立上り角度については、XV 層では 95°~150° (80° という例外的なものが1點だけある) まで變化し、XVI 層では 95°~135° まで變化する。しかし、いずれの場合も量的に多いのは、110°~130° までのものである。

形態については、a のついた形態、いいかえると側壁と底との間に明瞭な稜の認められるものの方が壓倒的に多いことがいえる。しかし、1b は兩層共にかかなりの量がある。これは、底から側壁にゆるやかに移つていくものでは明瞭な稜をつくらぬものが多いことを意味している。

形態——立上り角度 (Tables 5, 8),

XV, XVI 層を通じて、形態1はどちらかといえば立ち上りのゆるやかなものに多く、形態3は急なものに多く、形態2はちょうどその中間に位置するようにみうけられる。しかし、この事實が確認されたとしてもさほど意味はないように思う。というのはわれわれの設定した形態それ自體のもつ機能的な側面をいいあらわしているにすぎないからである。

形態——器壁厚 (Tables 6, 9)

XV, XVI 兩層とも、各形態それぞれがかなり廣い範圍に變化しており、とくに顯著な規則性はみられない。

厚さ立上り角度 (Tables 7, 10)

XV, XVI 兩層とも、薄手のものは一般に立上りがゆるやかで、厚手になると立上りが急になるといえる。ここでつけ加えておかねばならないことは、立上りが $90^{\circ}\sim 100^{\circ}$ に近いものには、底部の周縁がほとんど直線をなすものが多いことである。佐藤は「底部破片のうち、底部の周縁が強く彎曲するものと、ほとんど一直線をなすものがあるので、平面形はおそらく橢圓形を示すもの」と想像したが、筆者は、上記の知見からむしろ厚手の方形に近い形の器が存在したのではないかと想像している。(16頁参照)

このように口縁部、底部破片をこまかい形態分類の規準を設定して分類し、点数をかぞえあげた整理の方法は、今までかくのごとき粗製土器については行われていない。マッタラの粗製土器の記述のなかにわずかにこれに關係する記述がでてくるが、それも下記のごとく簡単なものである。「小形の開口壺の口縁部は、ナイフ状（先細という意味か）のものが多く、1 点だけ器壁の厚さを減じないで外反するものがある。」「底の形態で最も多いものは、平底で側壁との境にわずかの凸帯様のとび出しのみられるもの (Fig 6—21) であり、次に多いのが、平底で側壁が垂直近く立上っているもの (Fig 6—22) である。決して数は多くないがよりていねいな仕上げの側壁がゆるやかな立上りを示すもの (Fig 6—19) や、底の輪郭の明瞭なもの (Fig 6—20) もある。」(Braidwood *et al* 1952 : 12) という記述がみられるのみである。この記述によつて、マッタラの報告者が何らかの形で破片の処理を行なおうとしたことは明らかであるし、彼らの設定した形態のなかに、われわれの設定した形態に一致するものがみられる (Fig 6—19 は 1 b に、Fig 6

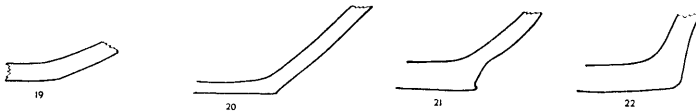


Fig 6 マッタラ下層粗製土器の底部形態 (Braidwood *et al* 1952 : Fig 10)

—20 は 1a に, Fig 6—21 は 3a に, Fig 6—22 は 2a ないし 2b に對應できる) ことは興味深いといわねばならない。

上記のごとき土器片の形態分類に基づく整理の結果, Mトレンチの粗製土器と XV, XVI 層各々の粗製土器の間に本質的な差違は認められず, 同じ種類のものと考えてよいと思われる。また, マタッラの粗製土器とも共通する所が多いと考えられるのである。

1—3—2 石器

1—3—2—1 石刃, 鎌刃

石刃には黒曜石製 (Pls 6—1~13, 15—1~6, 8) とフリント製 (Pls 6—14~18, 15—7) の 2 種がある。すべて XV 層から出土し, XVI 層から出土したものはない。XVI 層からはフリントの剝片が 1 点だけ出土しているのみである。数量的にみると黒曜石が 14 点, フリントが 5 点であつて, 前者の方が多し。しかも, 黒曜石製石刃は石器としてのできがよい。14 点のうち打撃面をのこすのはわずかに 2 点だけであつて, のこりはすべて折りとられている。一方, フリントの方は 5 点のうち 4 点までが打撃面を有する。なお興味深い事実として, 石刃製作の際, 不要として出る剝片をすべてがぞえてみると, 黒曜石 3 点, フリント 25 点であつて, 有効な石器の比率と逆になつている。これは何を物語るのであろうか。

かなり大膽ではあるが, 筆者は黒曜石製石刃の輸入を考えたい。黒曜石の原石は西アジアでは数ヶ所の原産地しかなく, 今日ではその含有する微量の元素の定量的な分析によつて, その原産地を同定することができるようになっており (Renfrew, Dixon and Cann 1966), テル・サラサートの資料は分析されていないが, おそらくはアナトリア高原ヴァン湖周縁のものであると思われる。黒曜石の原産地の同定は, 先史時代における廣範圍にわたる

交易の證左として價值ある資料である。しかしながら、一方ではやはり當時の貴重品であつたことは想像にかたくない。また、交易の材料とするにしても原石の形で行なうより、完成品として持ちこぶ方が有利であることは十分うなづける。そこで、筆者は、テル・サラサートでは黒曜石石刃は製作されず、完成品として輸入されていたのではないかと想像する。

ジャルモ遺跡においても完成品の出土の方が多く、剥片はすくないという。報告者は、「ジャルモの人々はいつの時點でも、決して十分な黒曜石を持つていなかつたらしい」とみているが、この事實もやはり完成品輸入という見方でみるとよく説明されるのではないかと思われる。

もちろん、石器製作が發掘區域以外の場所で行なわれていたという見方もできるが、フリントの剥片が完成品にくらべて大量にのこつているのに黒曜石の剥片がすくないことはやはり黒曜石石刃の製作が他の場所で行なわれていたとみる方が妥當のような氣がする。發掘者が、完成品のみならず、剥片まで考慮に入れて發掘を行ない、さらに報告するようになることを願つて、あえてこの假説を提出する。

石刃のなかで觸れておかなければならないのは、フリント製石刃のなかに鎌刃 (Pl 6~17) があることと、黒曜石製有柄石刃があることである。イネ科植物を刈る鎌刃として用いられた場合、その莖に含まれている珪酸のために石器の刃の部分に光澤をもつようになる。光澤をもつものが必ずしも、俗によくいわれているように使用痕としての小さい剝離がみられるとは限らない。そのため、筆者はあえて使用痕については觸れない。小さい剝離がみられるからといって、それが必ずしも使用された痕跡であるとは考えないからである。また、黒曜石の石刃の場合など、たとえば毛をそるのに用いられたとすれば、小さな剝離（顯微鏡大ならあるかもしれないが）がのこつているとはいえず、もしかつてこのように石刃を使用することがあつたとしたら、小さい剝離の有無をもつて使用のありなしを云々することができないと思う

からである。⁽⁴⁾

有柄の黒曜石石刃 (Pl 6—13; 15—3) は黒曜石の石刃の一方の端をリタッチして柄に加工したものである。これが完成品であるか、こわれたものであるか、あるいはまた未成品であるか明らかでないが、完成品であるとしたら、使用目的は何であろうか。小さい石刃にわざわざ小さい柄をつけているのはよほどはつきりした使用目的があつたにちがいない。石匙として皮はぎ⁽⁵⁾に用いられたとみることもできる。また未成品とみた場合、柄だけをつくり、反対の方をさらに加工するつもりであつたのかもしれない。しかし、テル・サラサートでは他にそのような遺物が出土しないので、はつきり確言することができない。この有柄石刃については、第2部でまたとりあげたい。

1—3—2—2 磨製石斧

刃の折れた破片が一個 XV 層より出土するのみである。石質は緑泥片岩のようで、緑色の青黒い斑點がある。刃は失なわれているので手斧形であつたか、蛤刃であつたかわからないが、おそらくは蛤刃であつたと思われる。日本では、このような磨製石器を石斧とよぶのが普通だが、その使用目的に関しては必ずしも斧として用いるだけではなかつたものと思われる。英語の報告書ではよく小形石斧のみ (celt) といつて、大形の石斧、石鎌と區別している。小形のものとはしかにのみや楔としての使用があつたものと思われる。この石斧にも刃のついていたのと反対の端に打撃されたあとがあるので、むしろのみもしくは楔と考えた方がよさそうである。(Pls 6—19; 15—9)

1—3—2—3 石臼, 石杵

すべて破片であつて完全な形でのこつているものはない。XV 層より 5 點, XVI 層より 1 點出土している。石質はモースル近邊によくみられ、ハトラ遺跡の建築や彫刻にもちいられている石と同種の石で、貝などの化石を大

量に含有する白灰色ないし緑灰色の堆積岩である。形態は、すべてが破片であるため不明だが、圓形もしくは楕圓形の平面形をしたものであつたらしい。摩擦面は凸面を呈していたようにうかがえる。この他に、石製容器として処理しておいたもの (Pl 15—15) もあるいは石臼であつたかもしれない。この石は上述の6點の石臼破片とちがひ黒色の粗い石であつて、テル・サラサート第2號丘のウバイド期においてはさかんに石臼につくられた石と同種のものである。この點からみれば、形態的には石製容器のようでありながら、石臼としての役割をもつていたかもしれない。

石杵としてはつきり認定できるものはない。1點だけ直徑12cm ぐらいの片面が比較的平坦にすりへつている石がある。この面が凸凹なく平坦であれば、石杵というのに何ら躊躇しないが、磨滅はしているがかなりの凸凹が認められるのでちよつと疑わしい。もう1點石杵らしきものとして、Pl 15—13 にあげた球形石製品がある。黒色の粗い石でできており、上下にある平坦面は、あるいは磨滅のためにできたのかもしれない。

はつきり石杵といえるものがないにせよ、石臼があつたのだから當然石杵の存在は豫想できる。

1—3—2—4 石製容器

石製容器の完全なものはない。破片ばかりである。XV層から5點、XVI層から2點出土している。XVI層のもの (Pl 15—15) については、前項石臼のところでのべたようにあるいは石製容器とみるよりは、石臼とみる方が穩當かもしれないが、ここでは一應石製容器としてみておく。あとの1點は口縁部の破片で、土器の口縁部の形態でいうと1形態の断面をもつ小さい石製容器もある。XV層からの5點のうち、4點までが口縁部の破片 (Pl 15—10) であり1點が胴部破片である。石質はいずれも石灰岩質のものと思われるが、大理石と認められる石はない。色は濃い褐色から黒までである。器形の

種類については、破片ばかりなので、わからないが、碗形のものであつたと想像される。Pl 15—10 でわかるように、口縁部断面の形は丸みをおび、土器の口縁部形態でいえば「1」に屬するものばかりである。

ジャルモ遺跡にみられるごとき、さまざまな器形、大きさの種類の豊富さはみられず、それほどさかんに製作されたとは思えない。

1—3—2—5 その他の石製品

a. 鍬形石製品 (Pl 15—12)

XV 層より出土したこげ茶色のスレートのような石でつくられた平らな石製品。刃とみとめられる部分はないので鍬として利用されたとは思えない。中央部の平らな面がわずかに凹んでいるので、パレットのように用いられたのではないかと思われる。

b. 石製玉 (Pl 15—11)

XV 層出土。茶色い石でつくられた玉で、おそらく首飾のような装身具の一部だつたのであろう。

c. 赤鐵鑛の未成品

XV 層出土。赤みがかった比重の大きな石で、表面にさまざまな方向のこまかいキズがあり、粗面をのこす所はごく小さい面積しかない。このキズが大きな面にのみみられるのならば、砥石のような用途を考えられるが、ほぼ全面におよんでいるので、むしろこの石をすりへらそうとしていたとみる方がよいであろう。垂飾のような装身具をつくらうとして途中で放棄してしまつた未成品であるとみたい。

1—3—3 紡錘車

XV 層から石製のもの 3 點、土製のもの 1 點計 4 點が出土している。

Pls 6—21; 16—3 (登録番號 3 ThII—829) は白灰色で、石灰質砂岩製。

Pls 6—23; 16—1 (登録番號 3 ThII—811) はスレートもしくは砂岩製。

Pls 6—24; 16—2 (登録番號 3 ThII—827) は白色で、石灰岩製と思われるが、石灰分の付着が著るしい。孔のまわりに棒をビツメンでとめたと思われる跡がのこつている。

これら 3 點の石製紡錘車はいずれも薄い圓盤状を呈し、大きさ、孔の大きさ、孔のあけ方などすべて共通しており、同じ型式といえる。

土製の 1 點 (Pls 6—20; 16—4) はちょうど半分欠けている。形は算盤球形 (biconical) であつて、石製のものと全く異なる。胎土は土器のそれとはちがい苧を含まず、良質の粘土を使用している。焼成も土器に比して良く、火の通りもよく中心部まで褐色になつている。もう 1 點紡錘車の未成品ではないかと思われる土器片がある。粗製土器片をまるくうちかいてととのえたもので、孔をあける準備もみられないが、後世土器片を利用した紡錘車がよくつくられるので、紡錘車に加工しようとしたものとみることができる。

當時織布がつくられていたことは、これらの紡錘車の出土と土器にのこされた壓痕 (Pl 3—2) によつて證明される。

1—3—4 土製品

1—3—4—1 土製投彈

XV 層から 4 點 (Pl 16—6~8), XVI 層から 3 點出土している。XVI 層出土の 2 點を除けば、すべて紡錘形をしており、大きさには大小あるがほぼ同じ型式のものとみられる。これらの投彈の胎土は紡錘車のものと同様、苧を含まず、焼きもよくかたい。明らかに土器をつくる粘土と紡錘車、投彈、それに次にのべる土偶をつくる粘土を區別していたと想像できる。XVI 層出土のひとつの投彈は扁平な球状を呈し、胎土も他のものとちがう。かなりの苧を含み、他のものにくらべてやわらかい。この點から、あるいは投彈で

はなかつたかもしれないものである。

1—3—4—2 土偶

1 点だけ、それもかなり立派なものが XVI 層の Pt 105 から出土した。(Pl 16—5) 胎土に苧は含まれず、表面は磨研といつてもよいほどの仕上げ方で、ていねいな作りである。表面は褐色だが、中心部は黒く、焼成は土器と同様よくない。胎土の面からいえば、紡錘車や土製投彈のそれに近く、器面調整からいえば、Pl 14—3 の土器に近い。制作者の技術上の能力からいえば、これだけのものをつくることができたにもかかわらず、土器製作に當つてはその能力を發揮せず、土偶をつくるときに發揮したとすれば、この土偶にはやはり心をこめてつくつたのであろう。

形態は破損が著るしいのでかなり補つて、復原して考えなければならない。兩足、上半身、兩手上腕部、乳房、尻は失なわれている。Pl 16—5 で點線によつて示したのは、その失なわれた部分を復原したものである。

臀部を中心とする部分が最もどつしりとつくられていて、足、上半身はほんのどつてつけたような印象をうける。乳房ははりつけだつたのであろう、はずれてしまつてないが、それほど大きな表現がなされていたとは思えない。右手は眞直ぐにのびし、右大腿部に置く。肩からつながつていたのであろうが、胴部と密着していなかつた部分は折れてなくなつてゐる。左手は肘で曲げ腹部に置く。上腕部はやはり欠けている。左手に何か抱いていたとすれば、當然そのはずれ落ちた跡が左手もしくは胸部にのこつてゐるはずであるが、それが見られないことは、何も抱いていなかつたとみてよい。左右共に指がそれぞれ 3 本の沈線で表現されており、これだけがかなりリアルに表現されているのでちよつと異様な感を受ける。服裝など、身につけたものに關する表現は一切ない。

1—3—5 骨角器

出土したのはわずか2点である。一方は関節部を利用したよくみられるタイプの錐 (Pl 16—10, 登録番號 3 ThII—818) である。一方はおそらく篋の破片と思われる扁平な骨角器 (Pl 16—9, 登録番號 3 ThII—819) である。他に 2cm ぐらいの小さい破片が1点得られただけで、加工のない自然骨も含めて他に骨は出土しない。

1—3—6 土器表面にみられる麥粒の壓痕

炭化した植物の實物は1点も発見できなかつたが、土器の表面に麥粒の壓痕がしばしばのこされている。

Pls 5—3, 4 にあげたのがそのうちの2例である。この他、土器片の中には麥粒と思われるものの壓痕がのこされているものがかなり存在し、當時すでに麥を食することが行なわれていたことを暗示する。ここでは一應壓痕という名稱を使っているが、胎土中に混じた芎と共に偶然麥粒が入りこみ、それがたまたま表面近くにあつてみえるというのがより正確な表現であろう。つまり焼成前のやわらかいうちに麥粒の痕がつけられたのではないのである。

種については現在不明である。ジャルモの土器の中にも同様の壓痕があり、それから種を判定しているので、それができれば、野生種、栽培種のちがいも指摘できよう。(Braidwood and Howe 1960 : Pl 27—A, B)

1—4 埋葬

埋葬例は2例ある。さきに土器の項でのべた XV c 層出土の龍骨形壺 (Pl 3—1) を使用した甕棺と XV a 層にある土壙墓である。前者は嬰兒骨であり、埋葬の詳細については全く不明である。後者は幼兒骨であり、Pl 1—1 の右端に土壙が半分切られて寫っている。土壙はやつと身體をまげて入るていどの橢圓形の堅穴であり、長軸はほぼ南北である。埋葬された幼兒は、頭を南

にし、横臥屈葬で顔は西をむく。いずれの例も副葬品は全くみられない。

1—5 C¹⁴ による年代測定

XV, XVI 層出土の炭化有機物を「東京大學放射性炭素年代測定装置委員會」で行なつた年代測定の結果は以下のごとくである。

TK—23 7,360±100 B. P

TK—24 7,520±120 B. P

TK—23 は XVI 層 Pt 103 のカマドより採集した木、草などの炭化物が資料であり、TK—24 は XV 層の炭灰層より採集した木、草などの炭化物を資料としている。層位學的にいつて XVI 層の方が古いわけであるが、C¹⁴ による年代測定の結果は逆に XV 層の方が古くあらわれている。しかしながら、これらの値は、統計誤差内で一致し、因みにこれらの平均値として、7,440±80 という数字を出すことができる。

放射性炭素による年代は、XV, XVI 層がほぼ紀元前 5,500 年ぐらいの時期のものであることを示している。

1—6 XV 層と XVI 層の比較

XV, XVI 兩層の遺物の種類を比較するためにつくつたのが、Table 15 であるが、XVI 層の遺物の種類が極度に限られていることが明らかである。理論的にいえば、出土しなかつたからといつて當時つくられていなかつたとみることはできない。いいかえると、出土したものについては、その遺物が當時のものであることを積極的にいいうるのに對して、出土しなかつた遺物が當時なかつたということはむずかしい。しかし、普通にはかなりの面積を發掘することによつて出土しなかつてもは當時もなかつたのであろうといういい方をする。實際問題としては、理論的原則をふりかざしていると生産的でない場合が多い。だが、XVI 層の場合は發掘面積が狭かつたために、未

發掘の遺物の積類を豫想する方が適當であると思われる。因みに發掘區域の面積は、XV層で120m²であるのに對して、XVI層で高々30m²でしかないのである。土器については、先にのべたように、XV、XVI兩層の間に大きなちがいは認められず、同一種類、同一時期と思われる。

筆者は、先史時代の文化を比較する際には、土器や石器のみの比較でなく、ある遺跡のある時代における文化の集體を比較する方針をとりたいが、XVI層の場合は、石刃、紡錘車等がみつからなかつたからといつて、XVI層の集體の要素にそれらがなかつたとはみたくないのである。

このような考え方をいかなる場合にも適應させていくと、この上もない危険におちいることはいうまでもないが、XV、XVI層の場合は、發掘面積の不充分さのためにこのようなちがいを生じさせたのであつて、基本的には同一文化に屬するものと判斷してよいと思う。放射性炭素による年代測定の結果もこの考え方を支持するものであろう。

XV、XVI層が同一文化、同一時期であると判斷するとき、遺構の上の變化、つまりXVI層で堅穴であつたものが、XV層にいたつて地上に構築し

	XV	XVI
土器		
完形(含準完形)土器	5(1)	2
土器片	多量	多量
石器		
磨製石斧	1	
石刃：黒曜石	14	
フリント	5	
剝片：黒曜石	3	
フリント	25	1
石臼(破片)	5	1
石杵	1	
石製容器	5	2
骨角器	2	
紡錘車：石製	3	
土製	1	
土製投擲	4	3
玉	1	
土偶		1

Table 15 XV層, XVI層出土遺物種類別對照表

た建物をたてて、そこに住まうようになったことをどのように説明すればよいのであろうか。ひとつには、建物を地上にたてることがどこか他の場所で創造もしくは發明され、それをテル・サラサートに住んでいた當時の人々がとり入れたというみかたであり、ひとつにはテル・サラサートに住んでいた人々こそが建物を地上にたてることをはじめたのだという見方である。筆者は、全く證據をもたないが前者の考え方の方が無難であるような氣がする。とはいえ、考古學的な同一時期というものは數百年の巾をもち、同一時期の同一文化の擔い手が變ることは十分に考慮しなければならない。堅穴、もしくは平地にテントのようなおおいをかけて住む方式と建物をたててその中に住む方式との間には考え方の上で大きな變化があることはたしかであるので、堅穴に住んでいた人々が建物をたてるようになったとすれば、そこにはかなり大きなショックがあつたと想像される。堅穴住居もしくは平地住居から建物への變化に關してはさまざまな推測が可能であらう。しかし、筆者としては現段階では以下の事實の確認をしておくことが最も意義あることであると思われる。「どこで方形の泥づくりの建物をたてることが發明されたにせよ、この粗製土器を主體とする文化の續いている間に、堅穴もしくは平地住居から地上に建てた構築物に住まうという變化が北メソポタミアで起つた」という事實があることを確認する。

1—7 最下2層文化の復元

テル・サラサート第2號丘最下2層の文化は、定住農耕村落文化としてとらえることができる。農耕を裏づける積極的な資料は、土器の表面にのこされた麥粒の壓痕の形態學的研究によつて栽培種が確認されよう。間接的な資料としては、鎌刃、石臼、石杵の存在をあげることができる。普通には、これらの道具類の併存によつて農耕の證左とするが、嚴密に理論的に考えれば、必ずしも農耕の證明とならないことはいうまでもない。野生種の植物を刈り

とつて食したとしても、やはりこれらの道具類は必要であつたにちがいないからである。

これらの道具類の存在をもつて穩當な想像をするとすれば、イネ科植物に非常にちかい関係をもつていたという表現になるであろう。麥粒から栽培種のみならず、野生種も確認されたときには、完全な農耕村落というよりは、一部を農耕に、一部は野生種の採集に頼つた生活を営んでいたものとみられる。

動物の家畜化に関しては、サラサートの資料があまりにも貧弱なので何もいうことができない。しかしながら、錐、筥などの骨角器の存在から、動物との関係はかなり強かつたものと想像される。

當時の人々が住んでいたのは、はじめは一部に堅穴を有する平地住居で、おそらくはテントのようなものをおおいとしてかけていたのであろう。テントの材料は皮や織物が考えられるが、織物の可能性が強い。紡錘車の出土、土器にのこされた織物の壓痕などは當時すでに糸を紡ぎ、さらに織物を織る技術を有していたことを證明している。その糸の材料が何であつたかと考えるとき、當然動物——羊、山羊——の毛を利用したものと思われ、具體的な證據はなくても、動物の飼育を行なつていたのではないかと想像できるのである。

平地住居は何らかの理由で止められ、次の時期には地上に泥で壁をつくり、家を建てるようになった。この變化は口でいうほど簡單なものではなく、同じ人々はその變化を受け入れたとすれば、かなり大きな動搖があつたにちがいない。別の見方をすれば、他の文化要素については全く同種の別の人々の到來を考えてよいかも知れない。いずれにせよ、この時代に北メソポタミアでは、平地ないし堅穴住居から地上に建てた家の中に住まうことがはじまり、それ以來連綿と今日まで續いているのである。

道具類の遺物、あるいは他の遺物のなかで、泥でつくられたものは、これ

も厳密にはその組成まで分析してその地のものであることをいわねばならないが、まずまず、この土地でつくられたと考えられる。数多くの粗製土器、紡錘車、土製投弾、土偶などは彼らの手になる製品であろう。ここで注意しておかねばならないのは、容器としての粗製土器と、紡錘車、投弾、土偶などをつくる胎土の質が全くちがうことであり、彼らが明らかに區別していたことである。いつたいこれが何を意味するのかはわからないが、つくられるものに應じた胎土を選んでいたことは興味深い。

一方、石でつくられたものは、その材料が近くにあるとは限らないので、當然材料もしくは完成品としての輸入を考えねばならず、當時の交易の範囲を知る上に重要な手がかりを提供する。石臼の材料は、近邊によくみられる石灰岩であるし、石膏の材料となる石灰岩は、わずか數キロはなれた所に露出している層がみられるし、サラサート遺跡の下は深く掘り下げていくところの石灰岩の岩盤に當るので比較的容易に手に入れることができたものと思われる。しかし、石刃をつくる黒曜石やフリント、磨製石斧をつくる特殊な石などは近くにはみられないので、遠くからの輸入を考えねばならない。黒曜石はアナトリア高原のヴァン湖方面からの輸入であろう。これに関して、筆者は、黒曜石の剥片がすくないことから石器の完成品としての輸入を考えている。フリントの原産地は、割合普遍的に存在しているためかよくわからない。筆者の知るところでは、シリア砂漠にあるが、そんなに遠くなくても、もつと近い所に適したフリント原石を産出する所あがつたのかもしれない。とにかく、紀元前 5,500 年頃の定住農耕村落が決して閉鎖的な生活をしていたのではなく、廣範囲にわたる交易圏の一部をなしていたのである。交易がどのような形で行なわれていたかというテーマもそれ自體非常に魅力ある問題ではあるが、ここでは觸れない。

死に際しては、地中に埋葬したらしいが、嬰兒の場合は甕棺葬に、幼児より大きいものは屈葬にして體がようやく入るぐらいの墓穴を掘つて埋葬し

た。しかし、成人の埋葬については例がないので詳細は不明である。

上記の記述からうかがえる初期の農耕村落は、おそらく平和な日々の生活を追う人々のものであつたのであろう。土製投擲とよばれるもの以外に武器らしいものはなく、あるのはただ生産に關係する道具ばかりである。大きな不安といえば、死と、それから早魘ぐらいであつたろう。天水農耕にたよるこの地方では冬の雨不足は今日でも大きな被害をおよぼす。地母神像と稱される土偶は、おそらくは種族繁榮と母なる大地の豊饒を祈つてつくられたのである。

第 2 部

2—1 メソポタミア先史時代の編年

メソポタミア先史時代に關するいかなる研究書、概論書(Braidwood 1952, 1961, Braidwood and Howe 1962, Mellaart 1965 etc.) をみても、カリム・シャヒル (Karim Shahir) 期, ジャルモ (Jarmo) 期, ハッスーナ (Hassuna) 期, ハラフ (Halaf) 期, ウバイド (Ubaid) 期, ウルク (Uruk) 期, ジェムデット・ナスル (Jemdet Nasr) 期 [もしくは原文字 (Proto-literate) 期] という編年をメソポタミア先史時代の編年に用いている。北メソポタミアと南メソポタミアでの發展のちがいが、それぞれの時期の名稱についての若干のちがいはみられるが基本的にはこの編年が通用している。

1931年オランダのライデンで考古學者會議が開かれ、楔形文字によつてわかるスメール人の國家の成立に先立つメソポタミアの3つの主要な文化期に關して、ウバイド、ウルク、ジェムデット・ナスルの3期の順序と名稱が決められた。(Lloyd 1961 : 2) その後、オッペンハイムのテル・ハラフの發掘によつて發見されていたハラフ式土器がスパイザーのテベ・ガウラの調査で層位學的にプレ・ウバイドに来ることが判明して、ハラフ期が設定された。

1943年にイラク政府古物局のサファールはテル・ハッスーナの發掘を行ない、ここでハラフ期の前に位置するハッスーナ期の存在をつきとめた。1948年から55年にかけて、シカゴ大學東洋研究所のブレイドウッドの指揮する「イラク——ジャルモ調査計畫」はクルディスターンの遺跡の調査を大規模に行なつた。その目的はとくに農期の萌芽的出現から農耕の發明までの遺跡の發見に重點をおき、カリム・シャヒル、ジャルモ、マタッラ (Matarrah)、アリ・アガ (Ali Agha) 等々數多くの重要な遺跡の發掘調査をした。そして、ハッスーナ期の前にジャルモ期を、ジャルモ期の前にカリム・シャヒル期を設定した。カリム・シャヒル期では完全な農耕というよりはごく萌芽的な形態の農耕の存在が認められ、ジャルモ期に至つて完全な農耕の發生があり、土器もジャルモ遺跡の上層において出現することを確認したのであつた。

先にあげた今日定説化している編年はこのような學史的な背景のもとに成立したのである。

第2部において主眼とする目的は、第1部で詳述したテル・サラサート第2號丘最下2層の文化がメソポタミア先史時代のいかなる位置を占めるものであるか、またテル・サラサートの資料が加わつたためにメソポタミア先史時代編年にどのような新しい知見を加えることができるかを論考することにある。

2-2 ハッスーナ最下層とマタッラ下層

テル・サラサート最下2層の文化を集體 (assemblage) としてとらえ、關係の近いものを探してみると、すでに第1部でしばしば引用しているテル・ハッスーナ遺跡の Ia 層、マタッラ遺跡のいわゆる下層がうかがはがつてくる。それぞれの遺跡と當該層位について報告書 (Lloyd and Safar 1945, Braidwood *et al* 1952) から引いて記述しておく。

2-2-1 ハッスーナ最下層

テル・ハッスーナはモースルからバグダッドに至る幹線道路を南に22マイル下つたシューラ (Shura) の北東5マイルの地點にあり、現在のハッスーナ部落から北に1000ヤードほどいつた所で、小さなワジ (潤澤) が合流する所に位置する。Ia層は地山の直上にある堆積で、3つの前後する平地キャンプ・サイトによつて構成されている。キャンプ・サイトにはしつかりした壺がつくられており、かなりの點數の土器が置かれていた。(Fig 2) 埋葬人骨も發見されているが、その様式は保存状態が悪いためによくはわからないけれども、頭を北にしていたらしい。そもそもいねいに埋葬されたものかどうかとも疑わしく、土壙もはつきりしないが、頭近くに發見された壺と人骨の間から發見された石製鋏はあるいは副葬品かもしれない。遺物の種類は、土器、各種の石器、紡錘車、土製投彈、骨角器などである。土器は大量の粗製土器と少量の磨研された精製土器がある。粗製土器の器形は、その部分のプロポーションによつて若干の變化がみられるが、基本形は全く同じで、ひとつのタイプの中の變異とみなすことができる。浅い皿あるいは鉢の上に徐々につぼまつていく上部構造をつけた無頸の壺のような器形である。(Fig 7) 色は鈍黄褐色で、壁心は黒い。胎土には多くの苧を混入し、壁の表面は wet-

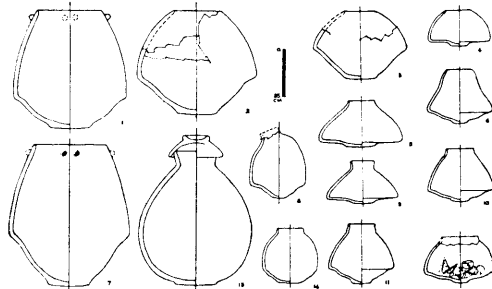


Fig 7 ハッスーナ Ia 層出土の粗製壺
(Lloyd and Safar 1945 : Fig 6)

smooth で、ときにはごく簡単な磨研のほどこされていることもある。背の高い器の場合、口唇部直下の向き合った所に2個ないし3個を一組とする「乳房状突起」をつけているのが普通である。半圓形あるいは水平直線形、あるいは「T」字形のはりつけがみられることもある。注口のための凹みが口唇部にほどこされているものもみられる。

この種の土器の使用目的はさまざまであつたと思われる。甕棺として用いるのがひとつある。ある壺の場合にはちいさい水のみ用のコップがそばに置かれていた。60 cm ぐらいの背の高い土器は乳を入れておく桶とか水を冷すためのものであろう。ある破片の裏側には炭化物がいつぱい付着していた(ので料理用にも用いられたであろう)。貯蔵用の目的も考えられる。というのは、のちに第III層になつて、ビツメン(アスファルト)と石膏をつかつて地面を掘りくぼめた所に全く同じ器形のしつらえた容器をつくり、それを貯蔵に用いている例がみられるからである。

これらの粗製土器のほかには8点の磨研された小形碗の破片、1点だけではあるが、口唇部に一本の彩文がほどこされている碗の破片が出土しただけで、すべてがこの種の大形粗製の壺であつた。比較的狭い層の發掘區域の中から29個もの土器が出たのである。

石器の種類は石刃、有柄ポイント、石鏃、打製石斧(石鋏)、磨製石斧(のみ)、石皿、石杵などである。石刃、有柄ポイント(石槍)、石鏃などはフリントもしくは黒曜石でつくられている。ここで注目すべきは、有柄ポイントと打製の石鋏の存在である。

有柄ポイント(Fig 8)は石槍であろうが、完全な黒曜石製のものが1点出土している。ブレイドウッド(Braidwoods 1953: 304)も指摘しているように、これは東地中海沿岸シロ・シリシア地方に特有なもの(Fig 9)であり、當時における文化交流を知る上に大きな手がかりとなる。また、パーキンス(Perkins 1949: 15)は8点ほどみつかつて磨研土器の破片は、

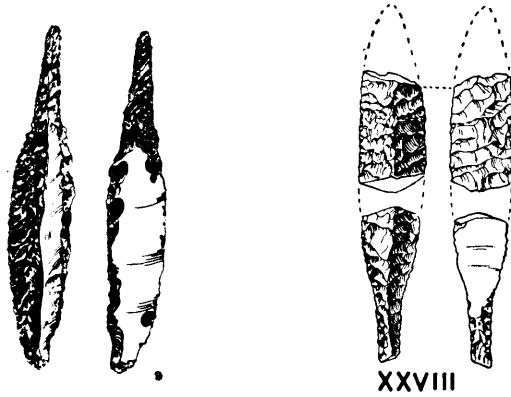


Fig 8 ハッサーナ Ia 層出土の有柄ポイント
(Lloyd and Safar 1945 : Fig 22-9)

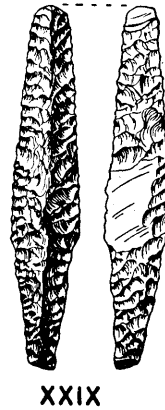


Fig 9 メルシン出土の有柄ポイント
(Garstang 1953 : Fig 5)

シロ・シリシア地方の優勢な磨研土器工作の傳統との關係を暗示すると指摘している。

打製石鍬は石英岩もしくは硅岩のような岩で作られており、洋梨形のものを基本形とした形を示す。(Lloyd and Safar 1945 : Figs 19, 20) これ

は、名称をあえて鋏としているように、農耕具とみられている。柄をとりつけるためのビツメンのあとのこつているものもある。

紡錘車については、各層から出土したものをまとめて撮った寫眞が一枚のせられているだけで、どれが Ia 層から出土したものかわからないが、テル・サラサートの石製圓盤状のものと全く同じ形をしたものがあり、これが Ia 層出土ではないかと想像している。

普通に土製投弾 (missile pellet, sling ball, sling pellet, sling missile) とよばれているものが、爐の中から出土するので、あるいは焼石料理法 (stone boiling) に用いられたのではないかという見方は面白い。

骨角器は錐である。どこにでも普通にみられる形のものといつているので、關節部を利用したテル・サラサートのもの (Pl 16—10) と同種を考えられる。

食料を知る手がかりとして、蛙 (toad) の骨がいつばいつまつた壺と山羊の顎の骨とが出土している。

報告者は、Ia 層が Ib 層およびそれ以上の層の文化と非常に異なっていることを主張する。記述の面でも他の層位に比してとりわけくわしいのはそのちがいを説明するためであるものと思われる。そして結論として、この層の文化を「新石器的」(neolithic) と規定し、上層と區別したのである。(Lloyd and Safar 1945 : 262)

2—2—2 マタツラ下層

マタツラ遺跡は、キルクーク市の南 34km (35° 23'N, 44° 12'E), 海拔 220 m の所にあり、比高 8m のテルで、上部 4m が遺物含有層である。近くにワジ (潤澤) がある。發掘は13のテスト・ピットと階段状トレンチ TT—1 によつて行なわれた。

土器の發掘區・層位別の出土量の表 (Braidwood *et al* 1952 : Ch. 1) か

ら判断して、テル・サラサート最下2層に比定できるのは、第VI区の3層から5層までである。これは、報告者のいう下層(Lower Phase)に當る。

第3層および第4層には *touf* (*tauf*) でつくられた方形の建物があつた。(Braidwood *et al* 1952 : Fig 4) 一軒の家が完全に出てきたものではないので、そのプランについてはわからない。しかし、3層のものも4層のものも同じ方位で建てられていたらしいことはよみとれる。

第5層には堅穴が地山に掘りくぼめられている。(Braidwood *et al* 1952 : Fig 4) 報告書では、これを堅穴(pit)と排水溝(drain)とよんでいる。堅穴には、床をピツメンでおおっているもの、壁が焼けて赤褐色になっているもの、爐址のあるものなどがみられる。これらの堅穴のうち、切り合いから新舊のわかるものがあり、すべての堅穴が決して同時点において共存したのではないことを物語っている。これらの堅穴の機能について、報告者は確言をさけているけれども、やはり一時的な住居であつたように想像しているようではあるが、1m 巾で2m ないし4m の長さの堅穴では住むにはあまりにも狭いのではないかと感じているらしい。一時的にせよ住居として用いられていたとすれば、テント様のおおいをかけていたと推測されるわけであるが、その端をおさえるためにのせたおもりが *tabuk* という名の土製品であると報告者はみている。これは、Braidwood *et al* 1952 : Fig 5 に示されているもので、断面形が梯形を呈した細長い土製品である。これらは完全には焼かれていないレンガ様のものであり、発見された例はすべて破片であつた。

筆者はすでにテル・サラサート第2號丘のXVI層の堅穴の記述の所で主張したように、これらの堅穴は、その中だけで生活することを考えず、その堅穴を含む空間で生活したとみればやはり住居址とみてよいと考えている。

次に出土遺物に移りたいが、報告者は出土遺物からマタツラの堆積を上層(第1層~第2層)と下層(第3層~第5層)に2分しており、記述する際

にもこの分け方に従つてのべられているので、特定の區の特定の層位についてのくわしい出土状況を知るには全く不便である。はじめに報告書に注文をつけるのは順序が逆であるかもしれないが、すくなくとも發掘者はあくまでも生の資料を提供し、さらに彼自身の意見があるならつけ加え、まとめなおすという方針をとるべきであつて、自分なりのまとめ方で遺物を整理してしまい、それを報告するのは良心的な發掘者のとるべき方法ではないと信ずる。

さて、土器の出土状況の表 (Braidwood *et al* 1952 : Ch. 1) によれば、3～5層では大部分が粗製土器であり、若干の無文精製土器、刻文精製土器を含むとみられる。この表の説明によれば、第3層にはウバイド期の土器片の混濁がみられるというし、第5層出土として處理した遺物は堅穴の中から出土したものであり、堅穴を埋めた土は必ずしも堅穴の營なまれた時代のものばかりでなく、後世の遺物の混入が考えられるという。(いずれの場合も無文精製土器や、刻文精製土器の数が減り、第4層ないし第4～5層の割合に近くなる要因がここに潜んでいるものと思われる。——筆者意見)

報告書から第VI區第3～5層の遺物を選び出して文化の集體を構成することは不可能にちかい。したがつて、これから先の遺物の種類については、報告者が「下層」とのべているものによつてゐることをことわつておく。

粗製土器には、鉢7種、碗4種、それに脱穀盆が認められる。ハッスーナの粗製土器よりいくぶん種類が豊富である。大きさも大小さまざまあり、形もほぼ半球状のものから極度に下部の張つたものや龍骨形のものまで變化する。口縁部、底部の形に關しては、前に觸れた。(39頁) また胎土についても、その含有されている砂粒の大きさ、密度によつて分類していることも第1部でのべた。(17頁) 燒成は不十分であり、器壁の50%まで黒いが、燒成完全な壁面は鈍黄褐色を示す。

乳房狀突起を口唇部直下に有するものも存在する。

石器としては、石刃、錐、磨製石斧(のみ)、石皿、石杵、玉などがある。

石刃は大部分がフリントでわずかに黒曜石が混る。鎌もみられ、ビツメンの付着しているものもある。石刃は比較的量が多く、発掘されたもののほぼ40%に當るものが816點に達し、そのうちわけはフリントが722點、黒曜石が94點である。⁽⁶⁾石器について注意しておかねばならぬのは、はつきりと石鍬と判断できる石器、もしくは鍬として用いられた痕跡をもつ道具がないことである。

土製品としては投彈、紡錘車、土偶がある。投彈は下層では上層に比して量がすくないけれどもみつかつている。紡錘車はすべて算盤球状のものである。土偶は地母神像が1點でているが、これは上層のものであつて、下層からは動物像が出土している。

骨角器には、錐、篋、針がみられる。ハッスーナには針がなかつた。骨で玉もつくられていた。

埋葬例は青年のものが1體 VI 區 4 層からみつきり、屈葬で、頭は南から東に20°はずれた方位をむく。副葬品として、石と貝の玉をつらねた首飾がそえられていた。

2—3 サラサート期

前項で概観したハッスーナ遺跡とマタッラ遺跡は兩方共、北メソポタミアのなだらかな丘陵部に位置し、サラサートと同様冬の降雨によつて天水農耕の營める地帯に含まれている。ハッスーナ Ia 層やマタッラ下層の文化の集體をテル・サラサート第2號丘 XV, XVI 兩層のそれと比較するとき、それぞれ若干のちがい（土器の器形、種類のちがい、有柄ポイント、打製石鍬の有無など）は認められるにしても、全く同じであることに氣づく。C¹⁴ による年代測定の結果も、マタッラ遺跡第 VI 區第 4 層の年代が 7,570±250 B. P. (W—623) であり、ハッスーナ遺跡層のそれは残念なことに混入が著るしく正しい年代が與えられていない (3,030±200 B. P. : W—609) が、

第V層の年代が $7,040 \pm 200$ B. P. (W—660) であるので、Ia層の年代は當然この數字より大きいものでなければならぬので、ほぼマタラの年代に近いものと考えられるのである。サラサート XV, XVI 兩層の年代は、それぞれ $7,520 \pm 120$ B. P. (TK—24), $7,360 \pm 100$ B. P. (TK—24) であり、マタラ4層の年代と誤差の範囲内で完全に一致する。したがって、サラサート XV, XVI 層、マタラ下層、ハッスーナ Ia層は、ほぼ同時代 (C^{14} 年代測定によれば、紀元前 5,500 年頃) の同一の文化であると考えてよいと思われるのである。

では、サラサート最下2層を今日普通に用いられている編年表の「ハッスーナ期」の中に入れるだけでよいであろうか。筆者としては、テル・サラサートにおいては土器の面で粗製土器単一であることが気になるので、この點を生かして考えなければならないと思う。そこで思い出されるのが、テル・ハッスーナの發掘者が、その遺跡 Iaの層をして「新石器」(neolithic)として Ib層から上の層と區別した⁽⁷⁾ことである。(Lloyd and Safar 1945 : 265) この見解に對して、ブレイドウッド (Lloyd and Safar 1945 : 258, Braidwood *et al* 1952 : 67) は、ハッスーナ Ia層をとくに neolithic Hassuna としてより上の層と區別する必要のないことを主張している。その理由として、ハッスーナの報告者が粗製土器をハッスーナ古拙土器とよんでいること、Ib層から上にも數は減るがひきつづいて存在すること⁽⁸⁾、第III層では Ia層と同じ器形の石膏とピツメンによつてつくられた器が出土することをあげている。また、マタラの資料が加わつた段階においても何らその考えを改める理由はないと考えている。

ブレイドウッドの主張したいのは、彩文土器の出現をもつて大きな文化の飛躍であるとする見方に對して、彩文土器の出現などは決して文化段階のちがいを示すものではないということであろう。ジャルモ遺跡において、下層は無土器であるのに上層に至つて土器を伴うようになるにもかかわらず、土

器の出現をそれほど大きな変化とは認めず、ジャルモ遺跡の堆積を全部ひとつの文化期としてとらえているのもこれに共通する基本的な態度のあらわれであろう。

先史時代を研究する際、社會經濟史的に、さらには人類史における先史時代の發展の様相を明らかにしなければならぬというブレイドウッドの考え方にかなり強く影響されている筆者にとっては、彼の主張する所は十分に理解できる。このような理念は理想であり、われわれはつねにそれに近づきうるような姿勢を保つていかねばならないことはもちろんであるが、先史學は遺物・遺構によつて時代區分をし、さらにある時代の文化を復原し、そして文化の發展をあとづけなければならないのである。とすれば、はじめに假設的な文化期を設定してしまい、以後にあらわれる資料を強引にその枠の中におしこめていくようなことは絶対にさげなければならない。

筆者としては、文化期あるいは文化段階と考古學上の遺物によつて區分される時期とをはつきり區別し、遺物によつてさらに細分しうる時期はそれが正しいもの——資料がお互いに矛盾せず、數多くの遺跡の例がすべてその設定に合致するもの——であれば、やはり認識していくべきであると信じている。遺物によつて區別された細かい時期がいくつかまとまつて文化期を構成し、さらには文化期がいくつかまとまつて文化（の發展）段階を形成するのである。最初から文化期ないし文化段階と遺物による時期が一致することは望みうるものではないので、パースペクティブな見方を常に念頭に置きながら、遺物、遺構の面での集體に基づいたできるだけ細かい時期の設定を行なうべきであると思う。

このような筆者の發想からいえば、どうしてもサラサート最下層の文化をいわゆるハッスーナ期から切りはなして考える方が建設的であるように思われる。今までにもハッスーナ遺跡の報告者の主張をいれてハッスーナ期（標準ハッスーナ期）の前に新石器ハッスーナ期を置く編年表を用いる人もい

る。(Parrot 1953 : Tableau II) だから、慣習に従えば、新石器ハッスーナ期という名稱を踏襲すればいいのであるが、筆者は「新石器」という名稱にこだわりをもつ。

舊石器、中石器、新石器、金石併用時代などという時代区分は、大ざっぱにみるとときには便利であるが、その境界あたりを問題にする場合は、この概念はかえつて邪魔である。農耕の萌芽から農耕・牧畜の發明、さらに都市への發展の過程を研究する際には、このような概念はとりのぞいた方がよい。ある時代が新石器時代であるのか金石併用時代であるのかなどと議論するのは愚の骨頂である。トルコ領北メソポタミアの紀元前5,000~6,000年ぐらいのチャユヌ(Çayönü)遺跡からは無土器時代に自然銅の道具があらわれている。(Braidwood 1966 : 504, Watson 1965 : 63) とすれば、この時代を論者は金石併用期と判断するのであるか。近年、この種の情報が増大するにつれて、いよいよ今までのトムゼン流の時代区分の意味がうすれてきているといえよう。そのかわりに、これからは社會經濟史的な視野のもとに新しい文化段階を設定していくべきである。

そこで、「新石器ハッスーナ期」なる名稱にかえて、筆者は「サラサート期」という名稱を與えたいのである。その理由は、テル・サラサートにおいてはじめて単一の文化集體が確認されたからである。時期の命名は、最初にみつかった遺跡の名をとつてするのが普通であり、その意味では「ハッスーナ期」とすべきであろうが、これは別の時期の名稱としてすでに採用されているので、あえてこの名を提唱する次第である。

2-4 サラサート期文化の集體

遺構としては、*tauf* (アラビア語; ペルシア語ならば *chineh*) による建物もしくは平地住居、堅穴住居がある。テル・サラサートやマタッラの知見によれば、堅穴や平地住居の方が建物より古い形態であるといえる。

遺物としては、粗製土器、石刃（鎌刃を含む）、磨製石斧（のみ）、石臼、石杵、土製投弾、石製および土製の紡錘車、土偶、そのほか玉などの装身具、そしてときには打製石鍬がある。粗製土器の器形の變化にはかなりの地域的な差が認められるが、共通するのは龍骨形の特異な壺である。そのほか碗、鉢、コップ形の深鉢などが含まれる。ここで注意しておかなければならぬことは、いわゆる脱穀盆（husking tray）⁽¹⁰⁾が含まれないことである。平面形が橢圓形を呈する鉢があるいは脱穀に用いられていたのかもしれない。というのは、脱穀盆は平面形が橢圓形を呈し、脱穀作用を大きくするために内面に凸凹がつけられているものだからである。

石刃にはフリント製と黒曜石製がみられるが、一般に貧弱である。兩者の割合は必ずしも一律にいうことができない。石刃が鎌刃として用いられ、イネ科の植物を刈り取ると、珪酸分が刃に付着して光るので、それが鎌として用いられたことがわかる。また石刃を加工して錐、石鎗にすることもある。テル・サラサート XV 層出土の有柄石刃（Pl 6—13, 15—3）は、ハッスーナ Ia 層より出土し、東地中海シロ・シリシア地方獨特の有柄ポイントの未成品ないしは破損品とも考えられる。

石臼、石杵の存在は穀物の利用の大なることを暗示する。實際、粗製土器の胎土に混入された苧は麥の莖だつたらしく、偶然入りこんだ麥粒の壓痕が土器の表面で確認されるのである。形態學的方法によつて、これらの麥が野生種であつたか栽培種であつたかわかるはずであるが、今までの所十分研究されているとはいえず、斷言することはできないが、栽培種も存在したであろうことは想像にかたくない。打製石鍬といわれるものは、おそらく耕耘用の石器で、これまた間接的ではあるが農耕の存在を裏づける資料となる。しかし、この種の石鍬は、ハッスーナ Ia 層のみで確認されているだけである。

紡錘車はいうまでもなく糸を紡ぐ道具であるが、さらに織布もつくられて

いたことは、土器の表面にのこされた布の壓痕によつて證明できる。紡錘車自體としては、圓盤狀の石製のものと同盤球狀の土製のものがあるが、さらには土器片を用いて加工したそれも存在したかもしれない。

土偶には、地母神像といわれる女性をかたどつたものと、動物をかたどつたものがあるが、いずれの場合も數量的にはそれほど多くはない。

装身具には、石製の玉や貝で首飾がつくられていたようである。

埋葬は、嬰兒では壘棺葬が行なわれ、幼兒ないし成人のときには土壙墓が營なまれた。土壙は屈葬にして身體がようやく入るぐらいのものである。副葬品はあつたりなかつたりする。

2—5 アリ・アガ遺跡

筆者のいうサラサート期に屬する文化として、ほかにどのような遺跡があるうか。

アリ・アガ (Ali Agha) 遺跡 (Braidwood and Howe 1960 : 26, 37, 66) はエルビール北西、大ザブ川の東岸にある。この遺跡の大きさは 80×100 m ぐらいで、1.5 ないし 2 m ほどの遺物含有層が認められた。發掘は 45 m² ばかりの範圍で行なわれ、24 m² の最大發掘區ですくなくとも 3 層の床が區別された。この區では確認されなかつたが最下層は地山に切りこんだ巾 4 m ぐらいの堅穴であつた。この堅穴の壁はマタッラのそれのように眞直ぐ掘りこまれておらず、傾斜している。これらが堅穴住居であつたかどうかはつきりしない。柱穴や *tauf* の壁はみつからなかつた。小さな河原石が並べられた遺構があり、あるものは爐のように並べられていた。發掘された範圍の知見からいえば、アリ・アガにははつきりした構築物はなかつたといつてよい。堅穴も構築物というよりは、むしろ何か農場に關係したものであるかもしれない。

土器は大部分が粗製土器であり、器壁は厚く、苧を混入し、低温で焼かれ

ている。器形で多いのは、龍骨形の壺や壘であり、ハッスーナ最下層のものと同一である。器形がハッスーナの脱穀盆と同じ形で、内面に凸凹のつけられていないものが出土している。(平面形が橢圓形を呈する鉢のことであろう——筆者) 貼付の突起が壺の口唇直下につけられていることがある。数個の目の形をした貼付文もみられる。わずかに2点だけ刻文のついた破片があり、1ないし2個の破片で彩文が認められる。

土製品の種類はすくない。紡錘車ではないかと思われる孔をあけた土器片が数点、てづくねの紡錘車、数点の人間をかたどつた土偶、ほかに棒の破片、球形土製品、圓錐形土製品、玉などが出土するのみである。動物像がないことを除けば、土偶はジャルモのものによくにている。

石器としては、フリントのスクレイパー、のみ様のうちかかれた礫、黒曜石製の石刃、石臼、石杵、磨製石斧(のみ)——表土からの出土品——、平底の石製容器の破片などがあるが、フリント工作はハッスーナにおけると同様貧弱である。

骨角器には篋、錘、玉などがある。

保存のよくない状態で屈葬の埋葬がみつかったが、これはイスラム期のものらしい。

發掘區域に限られた面積であつたためか、建築物に當らなかつたが、はたして本當になかつたものかどうか疑わしい。土器は、ジャルモ上層やハッスーナ最下層のものによくにている。石器とくにフリントや黒曜石の石器や土偶もこの関係を支持する。技術の面で地域的な變異が存在したとすれば、ジャルモ上層、アリ・アガ、そしてハッスーナ最下層はほぼ同じ頃に榮えたものと考えてよい。必ずしもアリ・アガがジャルモ期とハッスーナ期の間に位置すると考える必要はない。

この短かい報告から判斷すれば、アリ・アガ遺跡の文化は、全くサラサート期の文化集體に一致するので、これも同期のものともてよいと思われる。

アル・ハン (Tell al Khan) 遺跡 (Braidwood and Howe 1960 : 25—26, 35, 66—67) の文化は脱穀盆が出土することや土器がハッスーナ III 層のものに比定されているのでより新しい。「標準的ハッスーナ期」に属するものと考えられる。また、1964年にイラク政府の古物局によつて發掘され、多くの大理石製の人像や容器を出土して有名なテル・エス・ソワン (Tell es-Sawwan) 遺跡 (El-Wailley and es-Soof 1945) は、ハッスーナ Ib~II 層に當るものらしく、やはりサラサート期より新しい時期のものである。

ニネヴェ 1 層は有名な歴史時代の遺跡ニネヴェの最下層のものであるが、この報告 (Mallowan 1933 : 127—186) をみると、ニネヴェ 1 層は「標準ハッスーナ期」に比定できるものであることがわかる。この遺跡にはサラサート期に當る文化はなかつたものと考えられるのである。

2—6 ジャルモ期の編年に對する疑問

次に問題になつてくるのがジャルモ遺跡である。今までにもしばしばのべているように、この遺跡では、下層においては無土器で、上層になつて土器が出現する。ここでは、かりに角田 (1952 : 61) の下層を前期とし、上層を後期とする名稱をかりて説明したい。

後期になつて最初にあらわれる土器は、實は彩文土器であつて、その上の層で粗製土器があらわれるという。ジャルモ遺跡の報告のなかで現在もつともくわしい豫報 (Braidwood and Howe 1960 : 38—50) によつて、上下兩層に分けて記述のなされている建物と土器に關して引用したい。⁽¹¹⁾

ジャルモの家は *tauf* でつくられており、ときには石を土臺として敷いていることもある。⁽¹²⁾ ジャルモの代表的な建築は第 II 發掘區第 5 層 (土器を伴なう層) の南端でみつかつた。敷石があり、*tauf* でつくられている。方形のプランで北から西に 15° ほどよつた方位を示し、東には廣場があり、北 (と多分南にも) には隣の家がある。壁で仕切られた内庭が西にある。隣 (北と南)

の家との境の壁はそれぞれ独立していて、共通の壁を2軒の家が共用していない。家の中には7個の方形の空間がある。これがすべて部屋であつたかどうかはつきりしない。というのは、*tauf*の仕切りが天井まで達していなかつたかもしれないからである。5.6×2.2mの大きな部屋は家の東側にあつて南北にのびている。家の南の部分にある狭い廊下からこの部屋に入ったものらしい。東壁にも出入口があつたようである。この大きな部屋を仕切る壁(床上にマットが敷かれており、その上に仕切り壁が立っている)があり、南北2つの部屋に分けて用いていたらしい。廊下の北で家の西半分にとつて4個の部屋があり、小さくまとまっている。いずれもほぼ2.00×1.5mぐらいの小さいものである。これら小部屋のひとつにカマドがある。たき口は西の内庭に面しており、そこから焚いたらしい。炊事はこの西の内庭で行なわれたものと思われる。石臼の破片がその床上から出ているからである。カマドはパンを焼くためだけでなく、むしろ穀物をいつたり、はじかせる(pop)ためのものであつたと想像している。のこりの2つの北の部屋は穀物貯蔵庫で、もうひとつの東の部屋も多分同じ目的のものであつたであろう。

ジャルモ後期の建物は、おおよそこのようなものであつた。前期の建物については、第6層にカマドの例が出ているので、はつきりとはわからないが、ほぼ同じようなものであつたとみられる。次に土器にうつる。

1950/51年シーズンには204の土器片が第5, 4, 3層から得られた。第5層からはわずか65の土器片しかない。第5, 4, 3層から出土したものは、第3, 2, 1層から出土したものと土器の胎土(fabric)、整形、装飾などがちがひ、兩者をはつきり區別することができる。しかし、アダムズ(Adams)はこれらを2種の異つた土器型式とはみず、変化はあるにしても基本的には共通の製法をもつものとみている。ジャルモの新しい方の種類の土器は手づくねで、苧を混入し、表面は鈍黄褐色ないし橙色がかつた鈍黄褐色で壁心は黒い。

古い方の土器の半分以上は磨研してあり、ときには赤い化粧土や彩文の上

をも磨研している。この土器は土器づくりの上で、技術的にかなりの能力をもっていたことを示しているといえよう。決してなれぬ手つきで創造的な仕事をしていたとは思えないのである。新しい方の土器片はほぼ 12,000 點ある。しかし、これらは土器製作上すこし劣つた技術を示している。胎土は粗雑でやわらかく、器表面は製作上あまり注意を受けなかつたようで、彩文の例もすくない。一般的にいつて、器形の變化や器體の大きさに關係なく、器壁を厚くする傾向がみられる。大形の土器も出土しはじめている。貼付や刻文があらわれ、孔をあけた把手がある。

アダムズはジャルモの古い土器と新しい土器の間にちがいを認めないが、カルドウェル (Caldwel) とマトソン (Matson) は新しいジャルモ土器をアリ・アガ遺跡やハッスーナ遺跡最下層出土のものと共通のものともみている。

ブレイドウッドは、前期、後期（彼はこのことばを用いない）の間にわずかなちがいはあるにしても、「一つの文化期」に屬するものともみて、ジャルモ期の設定を行ない、その年代を C¹⁴ による年代測定によつて紀元前 6,750 年をはさむ 500 年ぐらいとし、次のハッスーナ期の初め (B. C. 5,750年) とを區別する。その根底には、ジャルモ遺跡の土器は、ハッスーナ層やマタッラ層のものとは別であつて、ジャルモの方が古いという見方⁽¹⁴⁾があり、ジャルモにおける中石器的な石器の存在を重視していることがある。ところが、これらの理由にひとつずつ検討を加えていくと、必ずしもその結論を鵜のみにできない面があるのである。

まず、C¹⁴ 年代については、ブレイドウッド (Braidwood 1958 : Table 1) によれば、ジャルモで 11 の C¹⁴ の年代測定の結果がでて⁽¹³⁾いる。それを再録すると次のごとくである。

C—113	I—7	6,707±320 B. P.
C—742	I—7	6,606±330 B. P.

C—743	II—5	6,695±360 B. P.
C—744	II—2	5,266±450 B. P.
E—44	II—5	6,650±170 B. P.
E—45	I—8	6,570±165 B. P.
W—607	PQ—14, 2.5m	9,040±250 B. P.
W—651	II—4(1950/51)	8,830±211 B. P.
W—652	I—7a(1950/51)	7,950±200 B. P.
W—657	PQ—14, 2.25m	11,240±300 B. P.
W—665	N—18, 2.0m	11,200±200 B. P.

實に、B. C. 3,300年から9,300年までの6,000年の開きをもつた資料があらわれているのである。これからいかにして、B. C. 6,750年という年代を出したか、その論理を追つてみよう。

この表によれば、ほぼ3つのグループを認めることができる。

- 1) C—113, —742, —743, F—44, —45などはほぼB. C. 4,750年ぐらいを示す。
- 2) W—607, —651, —652などはほぼB. C. 6,750年ぐらいを示す。
- 3) W—657, —665はB. C. 9,250年ぐらいを示す。

第1のグループは、マタッラ（4層、7,570±250：W—623）、ハッスーナ（5層、7,040±200：W—660）、メルシン（最下層、7,950±250：W—617）などの年代が正しいとすれば、ジャルモ期は一文化期であつて、北メソポタミア丘陵地帯のハッスーナ、マタッラ、トルコのシリア地方のメルシンよりも古いものであるから、意味のない数字である。また、第3のグループは、今日われわれの知つているメソポタミアの比較年代観からみて、あまりにも古すぎるので信じることができない。したがつて、ジャルモ期の年代として第2グループのB. C. 6,750年を採用する、というのである。（Braidwood 1958：1424—26）

この論理の展開の過程で重要な2つの前提がある。ひとつは、「ジャルモ期は一文化期であり、ハッスーナ最下層やマタッラ下層に先行するもの」という前提であり、もうひとつは、「ハッスーナ、マタッラ、メルシンのC¹⁴による年代が正しいとすれば」という假定である。まず前者に関しては、筆者としては大いに疑問を提したい所であり、型式學的、層位學的には未だ確認されていない⁽¹¹⁾ことなので、このように決めつけることはできない。後者の3遺跡でのC¹⁴による年代が正しいとすれば、という假定だが、それぞれの遺跡でわずかひとつずつしかないC¹⁴年代が比較的良好に一致する（テル・サラサートのC¹⁴年代もほぼこれに一致することは前に書いた）からといつて、どうしてそれを正しいと置き、11ないし12もあるジャルモ期のC¹⁴年代の決定の際に基準をなするのであるのか。これらの諸遺跡の年代が偶然誤つて測定された可能性も十分にありうるはずで、現に第1グループは5例もあり、第3グループは2例あり、さらにC-744も加えれば、大多数の8例までがジャルモでは誤つた年代を示しているではないか。

もしこれらの2つの前提をとつてしまえば、ジャルモの年代はマタッラやハッスーナと同じかあるいは新しいとみななければならないことも十分に起りうる可能性がある。

C¹⁴年代についてはとかく問題があるが、筆者には渡邊（1966：167）の忠告は先史學者にとつて忘れてはならないものと思うので、それを引用して、C¹⁴年代に関する議論を終りたい。

「C¹⁴年代から實年代を引出すには、年代既知試料の及ぶ年代範囲では、經驗的な補正がある程度可能であるが、これを越える古い時代については、C¹⁴年代既知試料について諸要因との關係を十分に分析した上で、理論的に推定するよりほかはない。いずれにしても、C¹⁴年代を利用するに當つては、一應C¹⁴年代を實年代とを區別して、C¹⁴年代が常にそのまま實年代を示すものでないことを念頭に置く必要がある。とくに、古い時代については、兩者の

懸隔は豫想以上に大きいかもしれない。考古學のように、事件の時間的位置や事件相互の時間的關係について比較的細かい差が問題となる分野では、C¹⁴年代と實年代を混同して、無用の混亂をひき起すことは避るべきである。」

次に、ジャルモにおいて中石器的な石器の認められる事實をどうみるかであるが、これについては、筆者は次のように考える。先史時代の文化をとらえる場合、ひとつの文化要素、たとえば土器あるいは石器だけでなく、文化の集體としてとらえるべきであるが、集體を構成する文化要素にはそれぞれ獨特の性格があるとみななければならない。現在は資料をあげて説得できるようには説明できないが、土器と石器とでは、その變化の仕方に基本的なちがいがあるのではないかと思つている。土器の方が人間の手によつてバラエティをつくりやすいことはもちろんであり、時代的に、また地域的に變化しやすいと考えられる。印象的には、今までの知見はこの見解に合致する。とすれば、考古學的資料によつてこまかい時代の動きをみようとすれば、一般には石器より土器の變化に注目すべきではないだろうか。⁽¹⁵⁾

その意味で、ジャルモの古さを證明するために、ジャルモで中石器時代的な石器が用いられていることを擧げるのは説得力が乏しいように思われる。この中石器的な石器と土器の併存という現象は、のちにのべるようにザグロス山中にみられるかなり普遍的なものではないかと筆者は考へている。

ジャルモ遺跡の年代に對する疑問は、この遺跡が発見されて間もなく、すでに當時の世界の考古學界の大御所的存在のチャイルド(Childe 1958 : 105)が提出しており、「いかなる考古學者もジャルモ遺跡が今わかつていゝるメソポタミア文化の編年上の出發點を明らかにしたとか、ハッスーナやサマツラより古いものであるなどとはいえない。理論的には、ジャルモ文化は、平原のハラフ文化に對應し、それが遅れて山中にたどりついた文化であるかもしれない。」とのべているのである。また、今日でも、メラート (Mellaart 1965 : 51) はジャルモの年代は決定されたものとはみておらず、これから解

決していかねばならない問題と考えている。

2—7 ジャルモ後期はサラサート期か

前項でジャルモの文化とその年代について、ながながしく議論してきたのは、いわゆるジャルモ後期がサラサート期に属するのではないかと思うからなのである。ジャルモ後期の粗製土器は、人によつて判断がちがうが、カルドウェルやマトソンはハッスーナ最下層の粗製土器と同型式のものとして認めている。(Braidwood and Howe 1960 : 44) またハッスーナの発掘者サファールも同じ意見を持つている。最近、ハッスーナ期の土器の比較研究を行なつたダバグ (Dabagh 1965 : 95) も同じ見解をとつている。ジャルモ遺跡の発掘報告で公にされたものはすべて豫報であり、くわしく土器に觸れたものはないので、筆者は自分で判断することができないのであるが、バグダッド博物館に陣列されていたものを見た限りでは、マタッラ下層、ハッスーナ最下層、サラサート最下2層の粗製土器と同一型式のものともみてよいと思つている。このようにあやふやな根據に立つて發言しなければならないのははなはだ遺憾ではあるが、現状ではいたし方ない。脱穀盆が報告されていない⁽¹⁶⁾ことは、土器に関するサラサート期の要素と合致する。

ジャルモの土器の報告を書いているマトソン (Braidwood and Howe 1960 : 65) は、「ジャルモの土器とハッスーナ、マタッラ、ギルド・アリ・アガの土器のちがいは、これら諸遺跡の編年上のちがいはなく、地方的な變異を反映しているのであろう。しかし、これらが同時代だとすれば、ジャルモにおいてハッスーナの標準的な彩文土器や刻文土器が全く出土しないのは不思議なことである。なぜならシエムシャラではそれらが出土しているのであるから」とのべているが、この疑問もサラサート期の設定によつて、よりよく理解されよう。

しかしながら、たしかにジャルモの文化と北メソポタミア平原部丘陵地帯

のサラサート期との間にはちがう面も多々みられるのである。*tauf* の建物に敷石の土臺があること、特異な古拙彩文土器、中石器的な細石器、全部で 5,000 点にもおよぶ大量の土偶（女神像、動物像でわずかに焼かれている）、これまた大量のみごとな大理石の石製容器などの存在は、サラサート、ハッスーナ、マタッラの資料で復原したサラサート期の文化とのちがいを感ぜさせる。もちろん、土偶や石製容器は質的な差でなく、量的な差とみることができのかもしれないが、これだけ多く出土するのと、わずか数点しか出土しないのとではかなり大きな——質的といつてよいかもしいない——ちがいを意味すると解さねばならないだろう。

この點に關してザグロス・グループなる文化圏的な發想によつて、かなり見事に説明している人がいる。

2—8 ザグロス・グループ

モルテンセン (Mortensen 1964) は、テペ・ゲーラン (Tepe Guran) の發掘をもとにして、ザグロス・グループなる新しい見解を提出している。

テペ・ゲーラン遺跡はイラン領ザグロス山中、フレイラン溪谷の西側カーレー村より北東に 6km、ジャズマン川の右岸より 150m の所 (33°43'N, 47°6'E) にあり、標高は 900m である。ここでは全部で A—V 層まで 21 層の堆積が認められ、上層の A—C 層はイスラム期ないしはルリスターン青銅器時代のもので、D—V 層の 6 ないし 7m の堆積が初期農耕村落に屬し、連続的に重なりあつている。最下層は地山の直上である。

最初の居住者は木の家に住んでいたらしいが、上の方の層では上手につくられた泥壁の家と木の家の兩方の共存を認めることができる。しかしながら、木の家は上層にいくに従つて徐々に減つていく傾向がみられる。もつと上層では、泥壁の家の中を小さく仕切つている。

下層では農耕に關係の深い遺物（石臼、石杵、鎌刃）はほとんどなく、上

層になるとかなりの量が出土するようになる。この事実から、はじめにここに住みついた人々は木の家に住む牧夫たちで、泥の家がつくられ村の構成が大きくなるにつれて、農耕が段々進歩してきたものと思われる。なお最下3層では無土器である。(Meldgaard, Mortensen, Thrane 1963 : 110—121)

テペ・サラブ (Tepe Sarab) の磨研土器はテペ・グーランの鈍黄褐色と赤色の磨研土器にており、サラブの彩文土器のスタイルはグーランのM—D層の標準的彩文土器の3種のうちの1種に當る。このことは、サラブはグーランの上層に對應するものであるとみてよいことを物語る。この事實はまたC¹⁴年代測定によつても裏づけされる。(サラブ : 5, 655 B. C. ±96, 5, 694 B. C. ±89, 6, 006 B. C. ±89, グーランH層 : 5, 810 B. C. ±150) ブレイドウッド (Braidwood 1960 : 695—96) は出土土器の型式學的觀察から、サラブはジャルモより若干新しい時期のものであるとした。そして、サラブは高原の牧畜民の一時的な居住のあとであり、ジャルモのようなタイプは山間の谷にある本據地であつたらしいと想像した。この指摘から考えれば、ケルマンシャーより 350 m ほど低い所の谷にあるグーランは、サラブ期の半遊牧的な人々の恰好な定住地であつたと考えられる。型式學的觀察からサラブがジャルモよりすこし新しいとみたブレイドウッドの見解は、テペ・グーランで確認された。つまり、テペ・グーランではジャルモ上層の彩文土器 (テペ・グーランO—H層) が徐々に變つてサラブ・スタイルのものに變つていくからである。O—H層では、數多くの無文鈍黄褐色土器と若干の古拙彩文土器が出土する。ジャルモの古拙彩文土器はグーランのものによくにていて、ハッスーナの古拙彩文土器との關係より近いものと思われる。残念ながら、グーランの資料にはジャルモとシェムシャラとの關係を示す何ものもない。(シェムシャラとハッスーナの關係については注11をみよ)

ここにとりあげたジャルモ、シェムシャラ、グーラン、サラブなどの諸遺跡は時間的に、また農耕・牧畜の發展という共通の經驗に基づいた農村社會

に由来する自然環境に関連するだけでなく、特殊な文化要素を共通に有するという点でも関連するのである。その文化要素とは、さまざまな打製石器工作、石刃を主としわずかの幾何學形の細石器、磨製石器工作、大理石製の容器、腕輪、玉など、それに多くの土偶などである。またシェムシャラを除くとすべてが同じ土器の傳統をもつ。しかし、グーランとジャルモでは土器の將來された時期が異つている。このような資料に基づいて、モルテンセンは「ザグロス・グループ」なるものの存在を主張する。

ブレイドウッドとハウ (Braidwood and Howe 1960 : 60, 161, Pl. 15, Fig 18) はハッスーナやマタッラで代表されるハッスーナ期はジャルモに由来するものと想像している。この想定は、泥土の建物が共通すること、アリ・アガ出土の土器がジャルモとハッスーナの間に位置するとみただけでできたのである。しかし、一方では粗製土器は遺跡によつて大いに差異もしくは變化のあることを認めている。(ibid 63, 64, 67)

山中のザグロス・グループは時期的にみると、すくなくとも部分的には平原のハッスーナ＝サマッラ・グループと併行し、ハッスーナ＝サマッラ・グループはシェムシャラの土器に影響を與えているとみるべきであつて、ハッスーナ＝サマッラ・グループがザグロス・グループに由来するという考えは疑わしい。建物の建てかたが同じであるというのは、この時期の近東に共通することである。ザグロス・グループの粗製土器は碗・鉢によつて特殊づけられ、ハッスーナ早期の大きなまるい壺(龍骨形壺のことであろう——筆者)を缺くのである。彩文土器や刻文土器はお互いに無關係である。ハッスーナやマタッラでは打ちかいた石器の工作はむしろ貧弱であり、土偶は非常にまれであり、大理石の腕輪や碗はないのである。

アリ・アガ (Braidwood and Howe 1960 : 38) はハッスーナ＝サラッラ・グループの地域的な變種であつて、ジャルモ期とハッスーナ期の間に来るものではない。

以上の理由から、ハッサーナ＝サマッラ・グループはザグロス・グループに起因するとは考えにくい。北メソポタミア最初の住民は、あるいは農耕・牧畜のアイディアをザグロス・グループから借用したかもしれない。しかし、たとえば石器や土器に関しては、北のタウロス山脈の方から由来したものが、あるいは北メソポタミアで発達したものなのであろう。タウロス方面の資料がないが、第6千年紀に黒曜石がヴァン湖から移入されているので交流は十分考えられる。一方北メソポタミアで発達したという考えも簡単には捨てられない。遺跡が風で蝕されていてみつからないか、小さくなつてしまつてい

る可能性もありうるのである。

結論的にいうと、ジャルモ、グーラン、サラブ、シムシャラは紀元前第7千年紀の終り頃から第6千年紀のはじめにかけての発展の様子を示し、文化的な統一體——ザグロス・グループを形成していた。ザグロス・グループはこの地域に紀元前第9千年紀の頃から連綿として續いてきた文化傳統をうけつぐものと思われるが、いくつかの間に入るべき文化層がわかつていない。また、イランやイラクの同時代の初期農耕村落のグループとの関係は指摘できにくい。つまり、ハッサーナ＝サマッラ・グループは現在では、ザグロス・グループに起因するとは考えにくい。だから、現在は北メソポタミア平原の最早期の住民の起源については、解答を與えにくいのである。

ホール (Hole and Flannery 1962 : 144—45) はアリ・コシュ (Ali Kosh) とジャルモ、サラブとの間に共通性のあることを主張するが、その共通性はそれほど密接なものではないので、ザグロス・グループにアリ・コシュを入れることはしない。

2—9 ザグロス・グループとサラサート期

モルテンセンの見解は明解である。と同時に、初期におけるメソポタミアおよびその周辺の農耕文化の解明に大きな光をなげかけている。彼の主張す

る所は、ザグロス山中には、紀元前第9千年紀から第6千年紀のはじめ頃にかけて、カリム・シャヒル、ジャルモ、グーラン、サラブ、シェムシャラなどの諸遺跡によつて知られる文化が連綿とつながつて存在しており、一種の文化圏を形成していたといい、その文化の発展は、北メソポタミア平原やイラン高原の文化の発展と併行していたというのである。これをいいかえれば、より狭い範囲での先史時代における文化圏の設定である。すくなくとも今日得られている資料を説明するには十分納得のいく發想であると筆者には思える。

自然環境の影響を強く受けとめざるをえない初期の農民、あるいは牧民にとつて、とりわけ生態學的環境は文化圏を形づくる大きな要因になつていたのである。とすれば、のちに文明への道を歩みはじめた段階で自然灌漑によつて十分農耕の行なえる北メソポタミアと、人工灌漑に頼らなければ農耕の営なめない南メソポタミアの沖積平野で、お互に関係はもちながら、それぞれちがつた文化圏を形成していたように、それよりはるか前の初期農耕村落の段階でも、ただメソポタミアという表現でひとつのものとして把握することはできず、その廣範囲の中に、生態學的環境のちがひによつていくつかの文化圏があつたと考えるのは、至極當然である。

資料の十分でなかつた時代には、カリム・シャヒル期に萌芽的農耕がはじまり、ジャルモ期に至つて定住農耕村落が営なまればじめ、それが北メソポタミアの平原に降りてきてハッスーナ期となつたという見方でもよかつたが、資料が増大してきた今日では、このシェーマは十分説明できないことが澤山でてきた。この新しい問題を解決しようとする試みをモルテンセンのザグロス・グループの設定に認めたいのである。この設定の正しさを證明するためには、將來發見されるであろう資料がこの假説に合わなければならないことはいうまでもないが、筆者としては、このような時間を限つた範囲の文化圏をできるだけ正確に認識していくことが、文明の發生を解く上にも有益

なものと考える。

もとより数多くの文化圏がみつげられたとしても、それぞれの間の関係を確かめていかねばならない。筆者の提唱したサラサート期は、北メソポタミア平原（文中でときどき丘陵地帯ともよんでいる）の文化圏とザグロス・グループとの関係を示す手がかりになるものと思つている。というのは、カルドウェルやマトソンのいうようにジャルモ上層の無文粗製土器がマタッラ下層やハッサーナ最下層の土器と同じ型式のものであるとすれば、ジャルモ後期はサラサート期に入るか、あるいは一步ゆづつてサラサート期に對應するものとみられるからである。今わかつていゝる範圍では、北メソポタミア平原では最古の文化であるサラサート期は、あるいはザグロス山中の文化から枝分れしてきたのかもしれないし、モルテンセンのいうようにアナトリア高原——タウロス山脈との関係を有するものであるかもしれない。しかし、一方では東地中海と関係を暗示する資料もみられるので、簡單にはいい切れない面もあり、決してその起源を解くことは容易ではないが、いくつかの文化圏の設定と相互の関係を示す資料がでてくれば、空間的なひろがりや時間的な近さによつて、北メソポタミアの文化の起源をよりよく説明できる方向に進むものと信ずるのである。

2—10 いくつかの文化圏

モルテンセンはアリ・コシュをザグロス・グループからはずし、ハッサーナと同じメソポタミア平原のグループに入れているがどんなものであろうか。アリ・コシュのあるフジスターン地方は、決して長期にわたつて獨立的な文化圏をつくりあげていたとは考えにくい、やはり北メソポタミアとは區別した方がよいのではないかと思う。さらに、イラン高原をザグロス・グループからきりはなしたことは基本的に賛成であるが、それは彼がとりあげたものがシアルク (Tepe Sialk) (Ghirshman 1938) であるからである。

フールス地方には、興味ある同時代の遺跡が澤山ある。タル・イ・バクーン (Tal-i-Bakun) (Langsdorf and McCown 1942, McCown 1942, 江上・増田 1962), タル・イ・ジャリ B (Tal-i-Jari B), タル・イ・ムシュキ (Tal-i-Mushki) (Vanden Berghe 1959 : 41—42, Pl 49) などである。これらの遺跡の文化的所屬をめぐってまだ十分に研究されているとはいえないが、バクーン、ジャリ B、ムシュキは東京大學イラク・イラン遺跡調査團が発掘しており、とくにムシュキ遺跡の調査には筆者自身も参加している。ムシュキ遺跡からは古拙な彩文土器に、数多くの半月形や梯形の典型的な細石器が併存する文化が発見された。これなどはザグロス・グループといかなる⁽¹⁷⁾関係にあるのか、大いに興味のもたれるところである。

また、ダイソン (Dyson 1965 : 217) のいう「軟土器文化層」(Soft Ware Horizon) は、グーラン遺跡ではジャルモ＝サラブ土器の前にあらわれ (Crawford 1963), カスピ海沿岸のホトゥ (Hotu), ベルト (Belt) 兩洞穴にもみられ (Coon 1957), タル・イ・バクーンの BI (McCown 1942) にもあらわれるが、この文化層の問題もザグロス・グループといかなる関係を有するか、さらには、サラサート期の粗製土器といかなる関係があるのか、重大な問題といわなければならない。

一方、目を西に轉ずるならば、パレスティナではイエリコ (Jericho) (Kenyon 1957 a, b, 1959, 1960) に併行すると思われる無土器時代のイエリコにいた村落が、ベイダ (Beidha) でみつかつている。(Kirkbride 1960 a, b, 1966 a, b) ここではメソポタミアとはかなりちがった様相を呈している。シロ・シリア地方には、メルシン、テル・ジュデイデ (Tell Judeideh) (Braidwood and Braidwood 1960), ラス・シャムラ (Ras Shamra) (Contenson 1963) などの諸遺跡があり、東地中海獨特の様相をみせている。アナトリア高原では、ハジラル (Hacılar) (Mellaart 1958 a, b, 1959, 1960 a, b, 1961 a, b, c, 1965) やチャタル・ヒュク (Çatal Hüyük)

(Mellaart 1961 d, 1962, 1963 a, b, c, 1964 a, b, 1965, 1966, 1967) など興味ある遺跡が調査されている。

これらのメソポタミアをとりまく地方とメソポタミアとの関係は必ずしも十分に解明されてはいないが、その地域内での発展の様相が明らかになれば、メソポタミアといかなる関係にあつたかよりよく理解されよう。その際、文化圏を設定していくことはやはり有意義なことになるであろう。メラート (Mellaart 1965) がメソポタミアおよびその周辺の先史時代の概説を行なうとき、シリア＝パレスティナ、メソポタミア、北イラン、アナトリアと地域的に區別して記述しているのは、これらの地域によつて発展の様子がそれぞれ異なっているからであると想像される。

かくのごとく、メソポタミアとその周辺の地域の初期農耕村落に関する研究はいよいよ面白い局面に入つてきたといえる。ところが、どういうわけかこの地域に調査團を派遣する國々が多いが、この時期の調査をする國の数はすくない。アメリカ、イギリスのいくつかの調査團、デンマーク、それに日本のわれわれの調査團ぐらいのものである。それだけにわれわれに課せられた任務は大きいといわねばならない。

2—11 第2部のまとめ

第2部において、筆者はテル・サラサート第2號丘最下2層の文化を集體としてとらえ、それがハッスーナ最下層やマタッラ下層の文化に比定できることを明らかにした。この文化は、従來のハッスーナ期の中に入れてしまうのは適當でなく、慣習にしたがえば、ハッスーナ期の中の最古の部分として「新石器ハッスーナ期」とよばれることのある時期に當るので、その名稱を用いて區別してもよいが、「新石器」ということは誤解を生じさせるおそれがあるので、あえてそのかわりに「サラサート期」なる名稱を提唱した。この文化を従來のハッスーナ期から切りはなすことは、メソポタミアの初期

農耕村落を研究していく上に生産的であると思われる。また、アリ・アガ遺跡の文化もこの時期の中に入ることを証明した。

さらに、ブレイドウッドはジャルモ遺跡の文化をジャルモ期なる一文化期としてとらえているが、この上層の粗製土器はサラサート期のそれと共通する面があり、C¹⁴による年代測定の結果も必ずしもジャルモ期がハッスーナ期もしくはサラサート期より古いことを示しているとは考えられないので、ジャルモ上層はサラサート期に入るのはではないかという試案を出した。しかしながら、ジャルモの文化は、北メソポタミア平原の文化とはちがう要素を多分にもつており、むしろモルテンセンのいう「ザグロス・グループ」の一員であるとしてとらえた方が有意義であり、もしジャルモ上層がサラサート期に含まれるとしても、それはザグロス・グループと北メソポタミア平原最古の文化であるサラサート期の文化との関係を示しているのであろうと考えた。

そして最後に、メソポタミアの先史時代研究には、今後はよりこまかい地域的な文化圏とそれぞれの文化圏のなかでよりこまかい時期を認識していくことが、先史時代の発展を知る上に有効な方法であろうと指摘した。

2-12 将来の課題——結語にかえて——

筆者がもつとも深い関心を寄せている問題は、人類が農耕・牧畜という生産手段を發明し、それからいかなる過程をへて文明の段階にまで達したかを知ることである。もちろん、生産經濟に達したからといって必ずしも文明の段階にまで一直線に進むものではなく、いつまでたつても農耕村落の段階にとどまり、それ以上の発展をしない所も澤山あり、なにゆえ文明にまで達する所をそうでない所があるのかを明らかにすることもこの問題の中に含まれている。この課題は決して容易に解決できるものではない。また、思辨的に考えるだけでなく、實證的に研究していこうとすれば、どうしてもかなりわずらわしい個々の問題をひとつずつ解決していかなければならないことはい

うまでもない。

ここでは、さし當つてメソポタミアで農耕・牧畜を發明し、定着村落を營なみはじめた時代をとりあげたわけである。今日この分野での新しい知見は徐々に増えつつあり、資料的には複雑さをみせている。單純な一線的進化主義的な考え方では處理できないデータが山積しているのである。現時点では、この大きな問題の解決に一步でも近づくためには、よりよき生産的なアイデア——作業假説とよんでもよい——を出し、それを確かめていく必要にせまられているといえよう。

筆者があえてこの論文において「サラサート期」を提唱したのは、メソポタミア先史時代をより細かく、より正確に把握するためのものであつて、いたずらに時期区分を繁雜にしようとするものでは決してない。意味のないものであれば、すぐにでもひっこめてよい。しかしながら、筆者はすでにのべてきたように、この時期の設定が今までの資料をよりよく説明するものであり、生産的であると信ずる。

その理由は、筆者が文明發生に關して、次のような見通しをもっているからである。文明につながる文化要素——逆にいえば、文明發生の必要條件となるさまざまな文化要素は決して一時期に、ある限られた所で急激に發明されたものではなく、ある廣範圍の地域の各所で跋行的に發生していた。今わかる所では、たとえば、銅は紀元前7,000年ぐらいにトルコ高原に近い北メソポタミアですでに知られていた。これとは獨立にイラン高原南部でも同じ頃に知られていたらしい。農耕・牧畜はクルディスターンの山中で長い間かかつて發明された。イェリコやベイダにみられるように、無土器時代にすでに立派な町が發生していた。同時にアナトリア高原ではチャタル・ヒュクにみられるごとく特異な信仰形態が極度に發達していた。また、土器は西アジアのどこかで、メラート (Mellaart 1964 a : 81) のいうように數ヶ所で獨立に發明されたにちがいない。今日わかっていることは、まだ十分に先史時

代の發展に關する見通しをつけられるだけのものではないが、すでにこのようなそれぞれの地域における特異な發達の様相があつたことがわかつているのである。

文明の發生は、これらの文明につながる諸要素を集中し、統合する所にある、という風に考えているのである。さまざまな文化要素を集中する地域と時代、さらにはその人びとについて研究していかなければならないが、まずわれわれがしなければならないことは、具體的な資料をより多く集め、それらを正しい方法で分類し、認識していくことである。これこそ、實證的、科學的な態度であると考えらる。

サラサート期の設定、それに筆者個人の發想ではないが、最後にのべたある時代における文化圏の認識は、メソポタミア先史時代の研究、とりわけ食料生産革命から文明の發生に至る過程を明らかにしていく上にわずかなりといえども貢獻できるのではないかと思つている。このような發想法がどれほどの妥當性を有するかは、今後のこの分野での研究をしていくものにとつていかに有意義であるかにかかつている。筆者は自分の提出した作業假説の有効妥當性を證明するために、メソポタミアおよびその周辺の地域の先史時代をできうるかぎり緻密に研究していきたいと思つている。

註

- 1 マタツラ遺跡出土の粗製無文土器は 363 例あり、全體の土器片の 35% に當る。粗製のでずねの土器であつて、363 例の約 10% は燒成不十分のため壁心を黒くしている。この壁心の黒い部分は平均して、器壁の厚さの 60% ぐらゐである。胎土は、燒成のよい場合、橙がかつた鈍黄褐色を示すが、發色はその燒成の度合により、「きたない」鈍黄褐色から縁がかつた鈍黄褐色（加熱多量による）まで變化する。胎土には粘土以外のものを 2 種混入しており、一つの破片に兩者が共に含まれている。一は各色の砂粒であり、一は植物性の礫である。礫の混入はかなりの高密度を示す。一方砂粒の密度は Braidwood and Braidwood (1960: 33—34) にしたがえば、低密度から中密度に位する。また砂粒の大きさは、細粒（直徑 0.33 mm 以

- 下)が15%, 中粒(直径 0.66 mm 以下)が37%, 粗粒(直径 1 mm 以下)が25%, 極粗粒(直径 1 mm 以上)が32%である。(Braidwood *et al* 1952: 10—11)
- 2 江上ほか(1965: 13—14)は「わずかに精製と粗製の別が認められる。(中畧)精製土器は外観は似ているが, 器面調整は粗製に比しややすぐれ, 中核部の黒色もほとんどみられない。(中畧)器壁も薄手である。」とのべている。これは基本的には薄手の器面調整の比較的ていねいな土器を稱して精製とよんでいるものと考えられる。精粗の区別は量的な差であつて質的な差ではないから, 印象的に把握するならば別であるが, 載然と精粗を区分することはむづかしいと思われる。
 - 3 これらの数字は, 日本に持ち歸つた土器片の点数をかぞえたものである。しかし, イラクの古物局が, バグダッド博物館に見本として保存しておきたいというので, 数袋の粗製土器を残してきたものがほかにある。口縁部, 底部, 龍骨部, 装飾ある破片などの寫眞が撮つており, それを調べると, 乳房状突起装飾が XV 層より 1 點, XVI 層—Pt 105 より 1 點, 計 2 點出土していることがわかつた。これらを加えれば, 乳房状突起装飾は全部で 26 點の多きをかぞえることになる。他の貼付装飾はバグダッドに残してきたもののなかにはみられない。
 - 4 石器の使用痕に關しては, 今までかなり直観的な判断がなされてきたといえる。しかし, 使用の際生ずるこまかい損耗を手がかりとする研究が行なわれるようになり, 科學的な説得力をもつようになってきた。たとえば, セミョーノフ(Semenov, 1964)の研究はその代表的なものといえよう。筆者は田中(1964)の抄譯によつてセミョーノフの考え方の一部を知るにすぎないが, 石器の使用についての研究はかくあるべきものと思う。
 - 5 江上ほか(1965: 15)は, 「テル・ハッスーナやメルシンなどから出土している有柄ポイントの破片であるとは, いまのところ考える根拠はない」と保留しながら, 「むしろ甕としての完形品」と考えている。
 - 6 この数字は, 全發掘區, 全層位のものである。
 - 7 ほかに archaic Hassuna という表現がときどきみられる(Dabbagh 1965)が, これは時期の名稱としてではなく, 土器のみの分類に用いられている概念であり, ハッスーナ期の土器の中に archaic (粗製土器), standard (彩文, 刻文土器),

derivative (いわゆるサマッラ式土器) の 3 種をもうけることができるという判断である。

- 8 Lloyd and Safar 1945 : Fig 5 のハッスーナ出土の土器片を層別別に各型式の点数をかぞえた表をみると、たしかに粗製土器は I b 層から II 層までわずかに残存する。この事実を必ずしも、I b~II 層にわたって粗製土器がつくられたとみる必要はない。というのは、発掘において、下層の遺物が上層に「浮き上る」という現象が常にみられるからである。“Some” と記されているのは、このような浮き上り現象のためであるとみてよいと筆者は思う。遺跡の表面に散在している土器片によつて、その遺跡の性格を豫想するのは、このような浮き上り現象を利用しているのである。テル・サラサート第 2 号丘においても、ウバイド期の遺物の中に最下 2 層の粗製土器の破片が若干混入しているが、だからといってウバイド期の文化集體の中にこの種の粗製土器があるとはみない。この考えからいえば、ハッスーナ粗製土器は I a 層でのみつくられ、使用されたものであるとみるべきものと思う。
- 9 新聞報道であるため信頼度が落ちるが、イランの南部ケルマンの近くのタル・イ・イブリース (Tal-i-Iblis) から紀元前 7,000 年頃の銅が出たという。なお、この遺跡はすでに古くスタイン (Stein 1937) が報告しているものである。
- 10 脱穀盆とは、最初にハッスーナ遺跡の第 II 層より上層で発見され husking tray と命名された。これは名の示すとおり、脱穀のための容器と考えられ、おおむね楕圓形を呈する浅い鉢の内面に凸凹がつけられているのがその特徴である。マタッラ遺跡の報告者は「脱穀盆は VI 區, IX 區, TT-1 (階段状トレンチ) の各區で発見される」(Braidwood *et al* 1952 : 11) とのべている。また、同頁の表によれば、全部で 14 点出土しているらしい。脱穀盆の紀述の中で 13 点がとりあげられて、圖や寫眞で示されているが、VI 區 3~5 層のものはその中に 1 点もみられないのである。このことから筆者には報告者の「各層から出土している」という表現を信ずることができず、第 3~5 層では出土しなかつたものと思つている。とすれば、サラサート XV, XVI 層、ハッスーナ I a 層にもないのであるから、當然サラサート期の文化の集體からはずさねばならない。脱穀盆はたしかに粗製土器ではあるが、サラサート期においてはまだ發明されていなかつたのである。

- 11 この豫報もマタツラ遺跡の報告と同様、各區各層出土の遺物、遺構について報告するという態度がみられず、ジャルモは一文化期であるという見解に立つて、記述がすすめられているために、筆者が上下兩層に分けてそれぞれの文化の集體を復原しようとしてもできないような報告のされ方なのが残念である。
- 12 メラート (Mellaart 1965 : 47) によれば、數石のみられるのは上層 (後期) のみである。
- 13 Braidwood and Howe (1960 : 159) には12の資料があるとのべられており、Watson (1965 : 84~85) にはたしかに12の例があがつている。これらをひとつずつ當つてみると、2, 3 違つているものもあり、ブレイドウッドのいう12とワトソンのあげた12が同じものがどうかかわからないので、11の例を引く。また、この年代決定に関しては、Braidwood (1959) にのべられているらしいが、目を通すことができなかった。
- 14 ブレイドウッド (Braidwood 1960 : 161~62, 184) は、デンマーク調査團の行なつたシェムシャラ (Shemshara) 遺跡の發掘によつて、ジャルモがハッスーナ最下層やマタツラ下層より古いことが證明されたとするが、同調査團に参加したモルテンセン (Mortensen 1962 : 80) は次のようにのべているのである。
- シェムシャラ遺跡の先土器時代 (Shemshara 16—14) は、ハッスーナ早期 (early Hassuna) に、土器時代 (Ceramic Phase : Shemshara 13—9) はハッスーナ IV~VI 層に比定しうる。シェムシャラとジャルモの關係を認めることはできるが、不幸にして、これらの遺跡間の編年的な關係を決定的に發言するほど十分な資料がない。そして同様にジャルモとハッスーナの關係に關する問題に解答を與えることはできない。しかしながら、ジャルモからほど遠くない谷に位置するシェムシャラの資料は、石刃工作の傳統、大理石の腕輪や碗がハッスーナと同時期の先土器農耕村落に存在することを示す。したがつて、もつと有效な資料がえられるまでは、ジャルモがハッスーナより前に來ることを、型式學もしくは層位學的な證據に基づいていうことができず、ただ C¹⁴ 年代にのみたよらねばならない。
- 15 アリ・コシュ遺跡をセリエイション法によつて發掘し、遺物の整理を行なつたホール (Hole) は土器のセリエイションは全くうまくいつたが、石器の方はうまくい

初期農耕村落の研究

かなかつた、とイランで會つたとき筆者にもらしていたが、そのとき理由として、石器と土器とではやはり基本的に變化の仕方がちがうのではないかという意見であつた。

- 16 筆者には、バグダッド博物館の陣列のなかに脱穀盆をみたような記憶があるが、ジャルモの報告書にでていないので、見誤りもしくは記憶ちがひであるらしい。
- 17 タル・イ・ジャリ Bは1959年の第2次調査の際、タル・イ・ムシュキは1965年の第5次調査の際に東京大學イラク・イラン遺跡調査團が發掘している。兩者とも報告書は未刊であるが、近年中に發表される豫定である。

〔後記〕

1. 調査團の本報告書の出版前にこのような研究の出版に快諾された、調査團の方へ感謝の意を表す。
2. この論文の原稿は昭和42年10月10日に脱稿されたものであるが、その後、筆者の提出した問題に關して斯界の關心が急に高まりつつあることを知つた。イギリスの調査團は、バグダッド東部のマンダリ市近邊で、ジャルモに類似すると思われる遺跡の發見をし、早速これの發掘調査にとりかかろうというのである。(Oates 1966, 1968) 筆者の假説の正否が確認されるのは案外早いことであるかもしれない。

引用文獻

Braidwood, R. J.

- 1952 *The Near East and the Foundations for Civilization*. Condon Lectures, Oregon State System of Higher Education, Eugene, Oregon.
- 1958 "Near Eastern Prehistory." *Science* 127 : 1419—30.
- 1959 "Über die Anwendung der Radiokarbon-Chronologie für das Verständnis der ersten Dorfkultur-Gemeinschaften in Südwestasien." *Österreichischen Akademie der Wissenschaften, phil-hist. Klasse* 1958 : 249—59.
- 1960 "Seeking the World's First Farmers in Persian Kurdistan: a Full-Scale Investigation of Prehistoric Sites near Kermanshah." *ILN* 237; Oct. 22nd; 695—97.
- 1961 *Prehistoric Men*. 5th ed. Univ. of Chicago Press, Chicago.
- 1966 Book review of Butzer's *Environment and Archaeology*. 1964, Aldine, Chicago. *CA* Vol. 7, No. 4 : 504.

Braidwood, R. J. and L.

- 1953 "The Earliest Village Communities of Southwestern Asia." *JWA* I : 278—30.
- 1960 *Excavation in the Plain of Antioch I, The earlier assemblages*. *OIP* Vol. LXI, Chicago, Univ. of Chicago Press.

Braidwood, R. J. *et al*

- 1952 "Matarrah : A southern variant of the Hassunan assemblages, excavated in 1948." *JNES* XI : 1~75.

Braidwood, R. J., Howe, B., *et al*

- 1960 *Prehistoric Investigations in Iraqi Kurdistan*. SAOC No. 31, Univ. of Chicago Press, Chicago.
- 1962 "Southwestern Asia beyond the Lands of the Mediterranean Littoral." in Braidwood and Willey (eds.) 1962 : 132—146.

Braidwood, R. J. and Willey, G. *eds.*

- 1962 *Courses toward Urban Life*. *VFPA* No. 32, New York, Wenner-Gren Foundation.

Contenson, H.

- 1963 "New Correlations between Ras Shamra and al'Amuq." *BASOR* No. 172, Dec. : 35—40.

- Coon, C.
1957 *Seven Caves*. Johathan Cape, London.
- Crawford, V. E.
1963 "Excavations in Iraq and Iran." *Archaeology* 16 : 290—91.
- Dabbagh, T.
1965 "Hassuna Pottery." *Sumer* XXI : 93—111.
- Dyson, R. H. Jr
1965 "Problems in the Relative Chronology of Iran, 6000—2000 B. C." in Ehrich 1965 : 215—256.
- 江上波夫編
1953 『テル・サラサートI』(東京大學イラク・イラン遺跡調査團報告1)東京大學東洋文化研究所 東京
- 江上波夫, 曾野壽彦, 深井晋司, 三宅俊成
1965 「メソポタミア北部の初期農耕村落文化に関する一考察——第4次イラク・イラン遺跡調査團の發掘(1964年)を中心として——」東洋文化研究所紀要第38册 : 1—40.
- 江上波夫・増田精一
1962 『マルヴ・ダシュトI——タル・イ・バクーンの發掘, 1956』(東京大學イラク・イラン遺跡調査團報告書2)東京大學東洋文化研究所 東京
- Ehrich, R. W. ed.
1965 *Chronologies in Old World Archaeology*, Univ. of Chicago Press, Chicago.
- Garstang, J.
1953 *Prehistoric Mersin, Yümük Tepe in Southern Turkey*. Oxford, Oxford Univ. Press.
- Ghirshman, R.
1938 *Fouilles de Sialk, près de Kashan 1933, 1934, 1937*. Vol. I, Paris, Genthner.
- Hole, F. and Flannery, K.
1962 "Excavations at Ali Kosh, Iran, 1961." *Iranica Antiqua* II : 97—148.
- 堀内清治
1964 「テル・サラサートの發掘と北メソポタミア建筆の傳統」オリエント VII—3, 4 : 31—47.
- Kenyon, K.
1957a "Excavation at Jericho, 1956." *PEQ* 101—7.
1957b *Digging up Jericho*. E. Benn Ltd, London.

- 1959 "Earliest Jericho." *Antiquity* XXXIII : 5—9.
- 1960 "Excavations at Jericho, 1957—58." *PEQ* July-Dec.
- Kirkbride, D.
- 1960a "A Brief report on the pre-pottery flint cultures of Jericho." *PEQ* July-Dec.
- 1960b "Excavation of a neolithic village at Seyl Aqlat, Baidha, near Petra." *PEQ* July-Dec.
- 1966a "Beidha. An Early Neolithic Village in Jordan." *Archaeology* Vol. 19, No. 3 : 199—207.
- 1966b "Beidha : 1965 Campaign." *Archaeology* Vol. 19, No. 4 : 268—72.
- Langsdorf, A. and McCown, D. E.
- 1942 *Tall-i-Bakun A, season of 1932*. OIP No. 59, Univ. of Chicago Press, Chicago.
- Lloyd, S.
- 1961 *Twin Rivers*. (3rd ed.) Oxford Univ. Press, Oxford.
- Lloyd, S. and Safar, F
- 1945 "Tell Hassuna." *JNES* IV : 255—89
- Mallowan, M. E. L.
- 1933 "The Prehistoric Sondage of Nineveh, 1931—32." *AAA*, XX : 127—86.
- McCown, D. E.
- 1942 *The Comparative Stratigraphy of Early Iran*. SAOC No. 23.
- Meldgaard, J., Mortensen, P., Thrane, H.
- 1964 "Excavations at Tepe Guran, Luristan." *Acta Archaeologica* XXXIV : 97—133.
- Mellaart, J.
- 1958a "Hacılar-Burdur Excavations, 1957." *TAD* Vol. VIII—1 : 17—18.
- 1958b "Excavations at Hacılar, First Preliminary Report." *AS* VIII : 127—56.
- 1959 "Hacılar-Burdur Excavations, 1959." *TAD* Vol. IX—I : 23—24.
- 1960a Excavations at Hacılar, 1959." *TAD* Vol. X—I : 67—68.
- 1960b "Excavations at Hacılar, Third Preliminary Report, 1959." *AS* 10 : 82—104.
- 1961a "Hacılar Excavation 1960." *TAD* Vol. XI—I : 29—34.
- 1961b "Excavations at Hacılar, Fourth Preliminary Report, 1960." *AS* 11 : 39—75.
- 1961c "Two Thousand Years of Hacılar-Starting from Over Nine Thousand

引用文獻

- Years Ago : Excavations in Turkey which throw light on the earliest Anatolia." *ILN* 238 : 588—91.
- 1961d "Çatal höyük Excavation, 1961." *TAD* Vol. XI—2 : 49—52.
- 1962 "Excavations at Çatal Hüyük." *AS* 12 : 41—65.
- 1963a "Excavations at Çatal Höyük 1962, Summary of Results." *TAD* Vol XII—1 : 36—40.
- 1963b "Excavations at Çatal Höyük, 1963." *TAD* Vol. XII—2 : 43—49.
- 1963c "Excavations at Çatal Hüyük, 1962." *AS* 13 : 43—103.
- 1964a "Excavations at Çatal Hüyük, 1963." *AS* 14 : 39—120.
- 1964b "The Third Season of Excavations at Çatal Hüyük." Pt I~IV, *ILN* Feb. 1, 8, 15, 22. Archaeological News Section Nos. 2169—2172.
- 1965 *Earliest Civilizations of the Near East*. (Library of the Early Civilizations) Thames and Hudon, London.
- 1966 "Excavations at Çatal Hüyük, 1965," *AS* 16 : 165—192.
- Mortensen, P.
- 1962 "On the Chronology of Early Farming Communities in Northern Iraq." *Sumer* XVIII : 73—80.
- 1964 "Additional Remarks on the Chronology of Early Village farming Communities in the Zagros Area." *Sumer* XX : 28—36.
- Parrot, A.
- 1953 *Archéologie Mésopotamienne II, Technique et Problèmes*. Albin Michel, Paris.
- Perkins, A.
- 1949 *The Comparative Archaeology of Early Mesopotamia*, SAOC No. 25.
- Renfrew, C., Dixon, J. E., Cann, J. R.
- 1966 "Obsidian and Early Contact in the Near East." *PPS for 1966*, XXX II : 30—72,
- Semenov, S. A.
- 1964 *Prehistoric Technology : An Experimental Study of the Oldest Tools and Artefacts from Traces of Manufacture and Wear*, (translated by M. W. Thompson) Barnes and Noble, N. Y.
- Stein, A.
- 1937 *Archaeological Reconnaissances in Northwestern India and South-eastern Iran*. MacMillan and Co., London.
- 田中琢
- 1968 「石器の用途と使用痕」『考古學研究』14—4 : 44—68 (Semenov, S. A. 1964

の抄譯)

角田文衛

1957 「ジャルモ文化について」考古學雜誌 38—2 : 58—69.

Vanden Berghe, L.

1957 *Archéologie de l'Iran Ancien*. E. J. Brill, Leiden.

渡邊直經

1966 「縄文および彌生時代のC¹⁴年代」第四紀研究 5—3~4 : 157—68.

Watson, P. J.

1965 "The Chronology of North Syria and North Mesopotamia from 10,000 B. C. to 2,000 B. C." in Ehrich 1965 : 61—100.

畧號

AS Anatolian Studies.

CA Current Anthropology.

ILN Illustrated London News.

JNES Journal of Near Eastern Studies.

JWH Journal of World History (Cahiers d'histoire mondiale).

OIP Oriental Institute Publications.

PEQ Palestine Exploration Quarterly.

PPS Proceedings of the Prehistoric Society.

TAD Türk Arkeoloji Dergisi.

引用文獻 補

Oates, J.

1966 "First Preliminary Report on a Survey in the Region of Mandali and Badra," *Sumer* XXII : 51—60.

1968 "Prehistoric Investigations Near Mandali, Iraq," *Iraq* XXX : Pt 1 : 1—20.

圖 版 目 次

凡例：文末括弧内は出土層位を示す。鍵括弧内は同一遺構もしくは同一遺物を示し、参照の意。

PL 1—1 XV a 層の状態。XV b 層の建物のくずれた壁のみえる範圍。左の凹みは XIV 層からの掘りこみ。〔PL 7〕

PL 1—2 XV b 層の建物を西南より望む。壁下の 2 本の線に注意。上方は壁の立つて

圖版目次

いる面。下方は XVI 層の堅穴の掘りこまれた面。左にわずかにみえるのは、
F 2 (XIV 層) の壁。〔PL 8〕

- PL 2—1 Pt 150 と Pt 103 のカマド。後方、發掘區域の隅でピットを掘り、處女層
であることを確めた。〔PL 9〕
- PL 2—2 Pt 101 a と Pt 101。〔PL 9〕
- PL 3—1 龍骨形壺 (XV c 層)。登録番號 3 ThII—839。〔PL 10—3〕
- PL 3—2 同上壺の龍骨部にみられる織布の壓痕。
- PL 4—1 乳房状突起裝飾 (XV 層)。〔PL 12—6〕
- PL 4—2 乳房状突起二個連裝飾 (XVI 層, Pt 102)。〔PL 13—4〕
- PL 4—3 十字文貼付裝飾 (XIV~XV 層)。〔PL 12—1〕
- PL 4—4 乳房状突起・圓弧文貼付裝飾 (XV 層)。〔PL 11—2〕
- PL 4—5 人形文貼付裝飾 (XV b 層)。〔PL 11—4〕
- PL 4—6 口縁部に貫通孔のある破片 (XV 層)。〔PL 12—10〕
- PL 4—7 子安貝形文貼付裝飾 (XV b 層)。〔PL 11—3〕
- PL 5—1 石膏を塗りつけた口縁部破片 (XV 層 R 139)。
- PL 5—2 石膏についてくずれた土器片 (XV b 層)。
- PL 5—3 穀物の壓痕を有する土器片 (XV b 層, R 137)。
- PL 5—4 穀物の壓痕を有する土器片 (XV b 層, R 139)。
- PL 6—1~3 黑曜石製石刃 (XV 層)。
- PL 6—4 黑曜石製石刃 (XV 層)。〔PL 15—2〕
- PL 6—5~7 黑曜石製石刃 (XV 層)。
- PL 6—8 黑曜石製石刃 (XV 層)。〔PL 15—8〕
- PL 6—9 黑曜石製石刃 (XV 層)。〔PL 15—5〕
- PL 6—10 黑曜石製石刃 (XV b 層)。〔PL 15—4〕
- PL 6—11 黑曜石製石刃 (XV b 層)。登録番號 3 ThII—822。〔PL 15—6〕
- PL 6—12 黑曜石製石刃 (XV 層)。登録番號 3 ThII—813。〔PL 15—1〕

東洋文化研究所紀要 第47冊

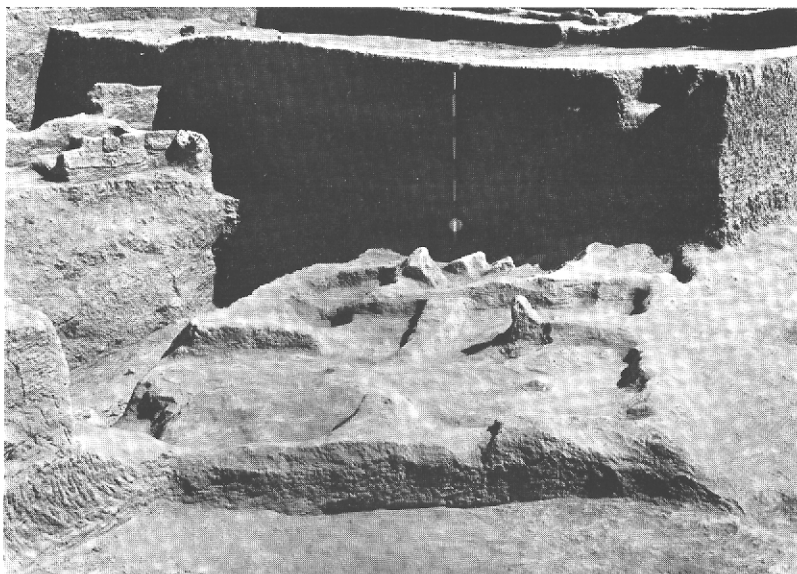
- PL 6—13 黒曜石製有柄石刃 (XV 層)。登録番號 3 ThII—814。〔PL 15—3〕
PL 6—14~16 フリント製石刃 (XV 層)。
PL 6—17 フリント製鎌刃 (XV 層)。
PL 6—18 フリント製石刃 (XV 層)。〔PL 15—7〕
PL 6—19 磨製石斧破片 (XV 層)。登録番號 3 ThII—812。〔PL15—9〕
PL 6—20 土製紡錘車 (XV 層)。〔PL 16—4〕
PL 6—21 石製紡錘車 (XV 層)。登録番號 3 ThII—829。〔PL 16—3〕
PL 6—22 石製紡錘車 (XV b 層)。登録番號 3 ThII—811。〔PL 16—1〕
PL 6—23 石製紡錘車 (XV c 層, R 139)。登録番號 3 ThII—827。〔PL 16—2〕
- PL 7 XV a 層の遺構。〔PL 1—1〕
- PL 8 XV b 層, 層の遺構。〔PL 1—2〕
- PL 9 XVI 層の遺構。〔PL 2—1~2〕
- PL 10—1 馬蹄形文貼付裝飾のある壺 (XV b 層, R 139)。
PL 10—2 鉢 (XV b 層, R 140)。登録番號 3 ThII—825。
PL 10—3 〔PL 3—1〕
PL 10—4 碗 (XV 層)。
PL 10—5 碗 (XV 層)。
- PL 11—1 壺 (XIV—XV 層)。
PL 11—2 〔PL 4—4〕
PL 11—3 〔PL 4—7〕
PL 11—4 〔PL 4—5〕
PL 11—5 底部脚足のついた破片 (XV 層)。
- PL 12—1 〔PL 4—3〕
PL 12—2 直線文貼付裝飾 (XIV~XV 層)。
PL 12—3 鋸形文貼付裝飾 (XV 層)。

圖版目次

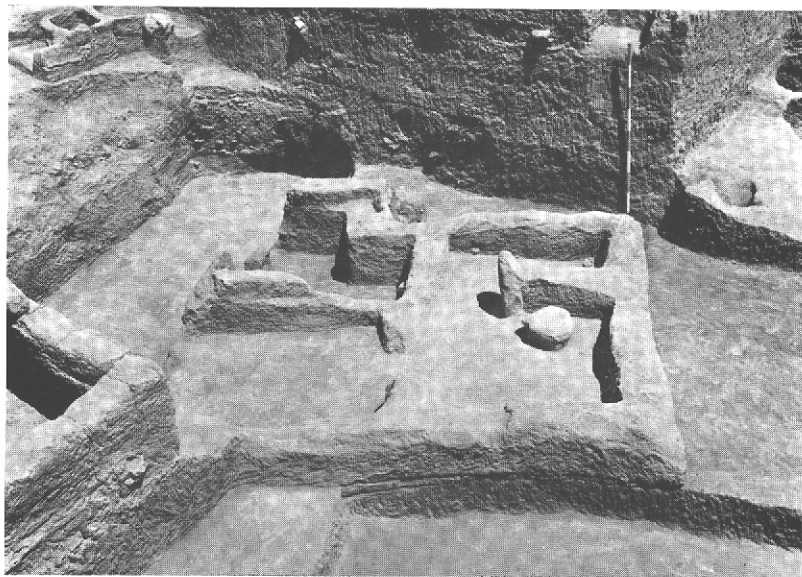
- PL 12—4 乳房狀突起裝飾 (XV 層)。
PL 12—5 乳房狀突起裝飾 (XV 層)。
PL 12—6 [PL 4—1]
PL 12—7 乳房狀突起二個連裝飾 (XV 層)。
PL 12—8 乳房狀突起裝飾 (XV b 層, R 139)。
PL 12—9 乳房狀突起裝飾 (XV b 層)。
PL 12—10 [PL 4—6]
PL 12—11 直線文貼付裝飾 (XIV~XV 層)。
PL 12—12 乳房狀突起, 直線文貼付裝飾 (XIVP)。
- PL 13—1 底部脚足の破片 (XIVP)。
PL 13—2 底部脚足の破片 (XV 層)。
PL 13—3 彩文のある破片 (XV 層)。
PL 13—4 [PL 4—2]
PL 13—5 乳房狀突起裝飾 (XVI 層)。
PL 13—6 石膏を塗りつけた口縁部破片に乳房狀突起裝飾がみられる (XVI 層, Pt 105)。
PL 13—7 方形土器底部破片 (XVI 層)。
PL 13—8 「L」字文貼付裝飾 (XVI 層, Pt 102)。
- PL 14—1 鉢 (XV 層)。
PL 14—2 底部破片 (XVI 層)。
PL 14—3 小形深鉢 (XV 層)。
PL 14—4 平面形が橢圓形を呈す鉢 (XVI 層, Pt 105)。
PL 14—5 平面形が橢圓形を呈す鉢 (XIVP)。
PL 14—6 龍骨形深鉢 (XVI 層)。
PL 14—7 龍骨形壺の底部破片 (XV 層)。登録番號 3 ThII—809。
- PL 15—1 [PL 6—12]
PL 15—2 [PL 6—4]
PL 15—3 [PL 6—13]

東洋文化研究所紀要 第47冊

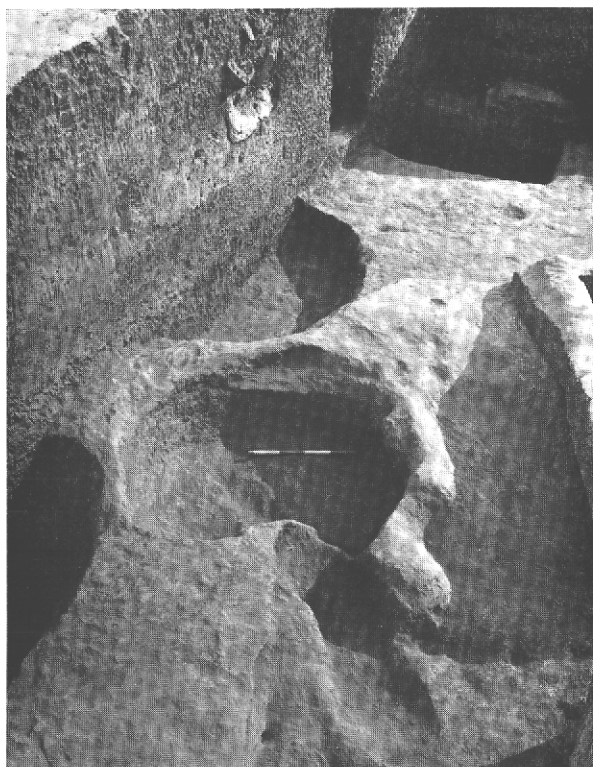
- PL 15—4 [PL 6—10]
PL 15—5 [PL 6—9]
PL 15—6 [PL 6—11]
PL 15—7 [PL 6—18]
PL 15—8 [PL 6—8]
PL 15—9 [PL 6—19]
PL 15—10 石製容器破片 (XV 層)。
PL 15—11 石製玉 (XV 層)。登録番號 3 ThII—817。
PL 15—12 鍬形石製品 (XV b 層, R 139)。登録番號 3 ThII—824。
PL 15—13 球形石製品 (XV 層)。
PL 15—14 石膏で修復された土器口縁部 (XV b 層)。
PL 15—15 石製容器破片 (XVI 層, Pt 105)。
- PL 16—1 [PL 6—22]
PL 16—2 [PL 6—23]
PL 16—3 [PL 6—21]
PL 16—4 [PL 6—20]
PL 16—5 土偶 (XVI 層, Pt 105)。
PL 16—6 土製投彈 (XV b 層)。登録番號 3 ThII—826。
PL 16—7 土製投彈 (XV b 層)。登録番號 3 ThII—815。
PL 16—8 土製投彈 (XV b 層, R 139)。登録番號 3 ThII—828。
PL 16—9 骨製篋破片 (XV b 層)。登録番號 3 ThII—819。
PL 16—10 骨製錐 (XV 層)。登録番號 3 ThII—818。



1



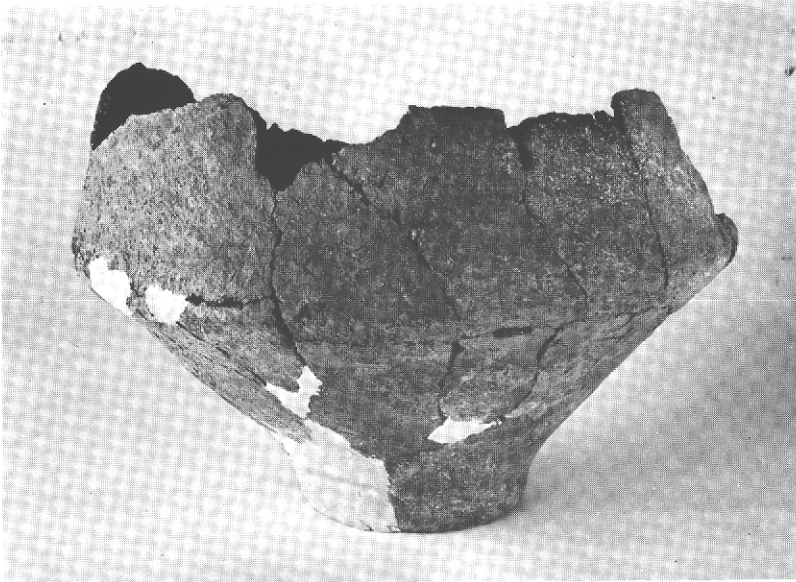
2



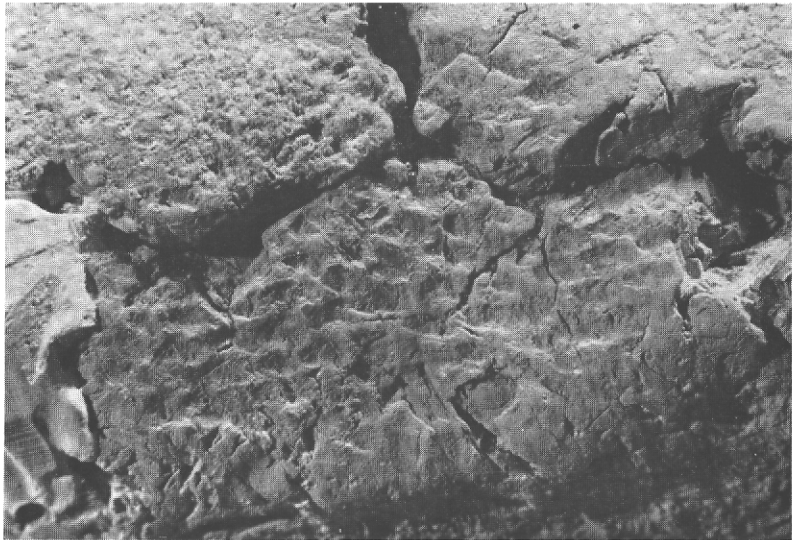
1



2

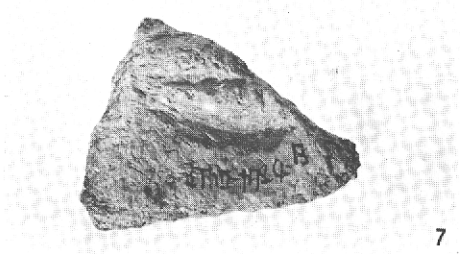
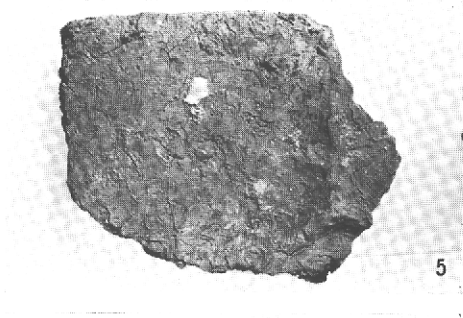
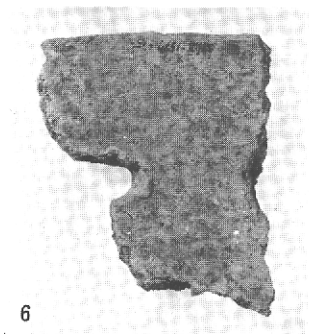
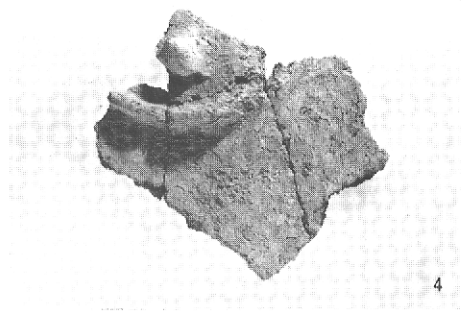
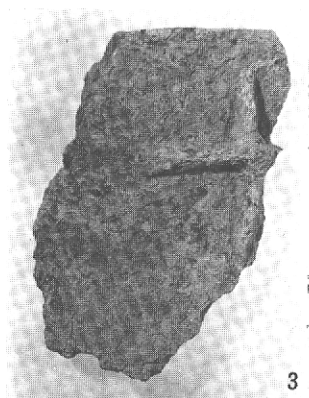
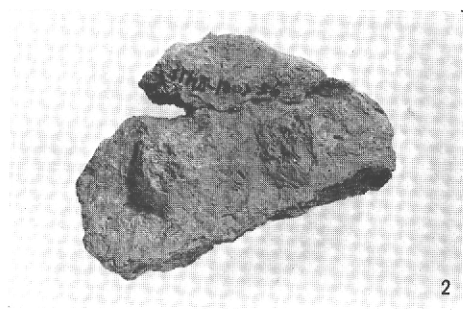
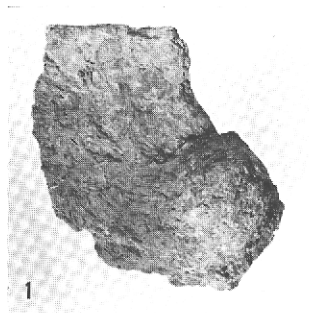


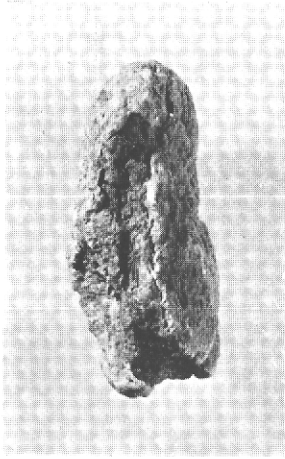
1



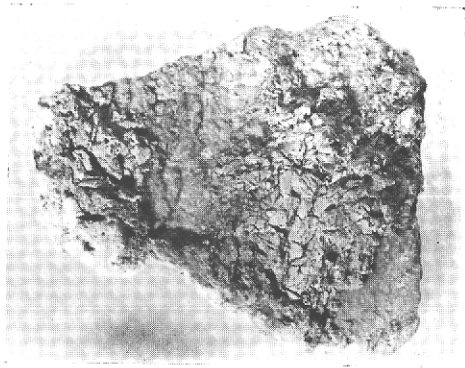
2

PL 4

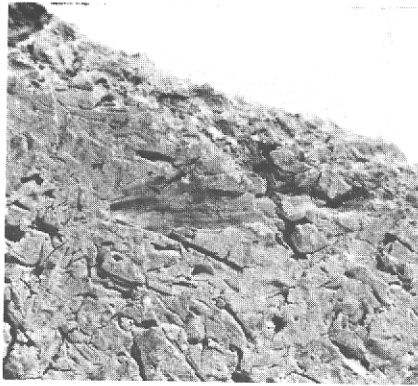




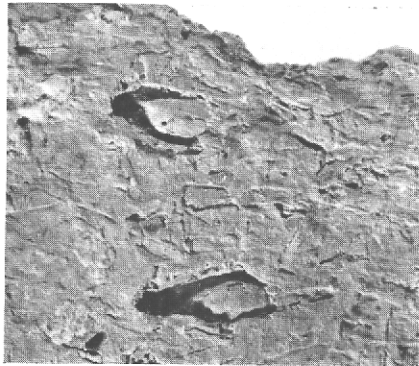
1



2

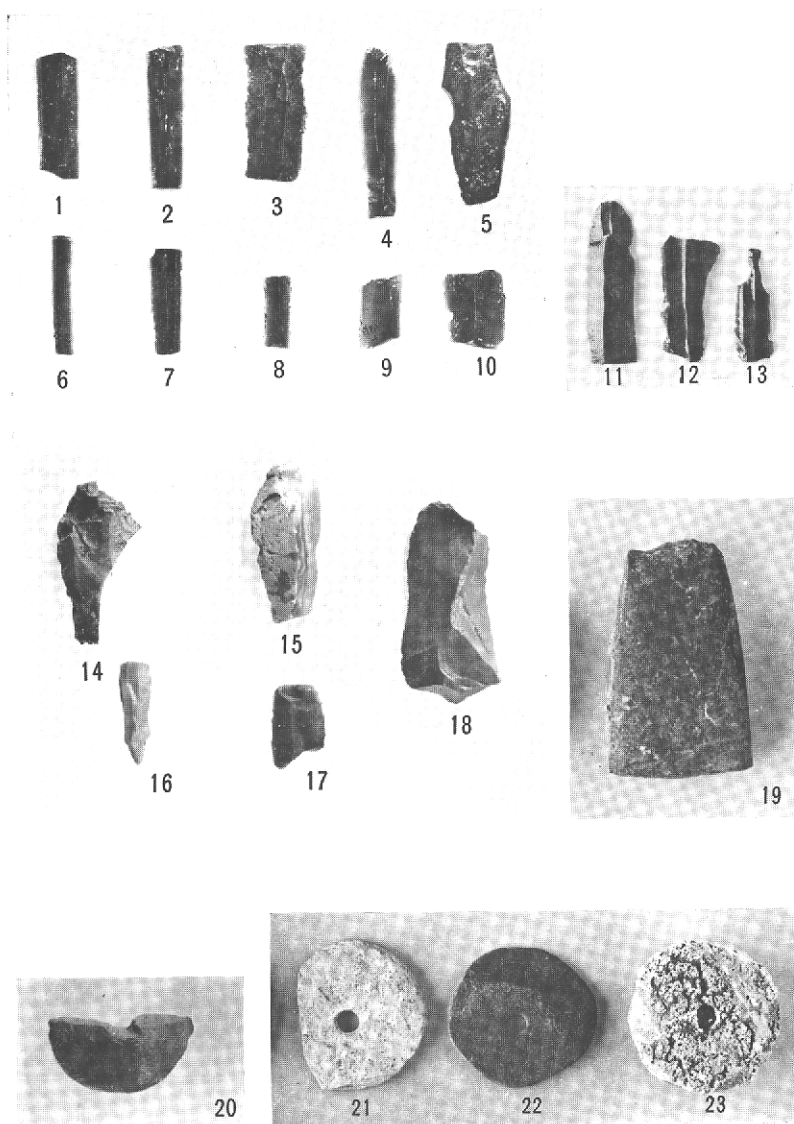


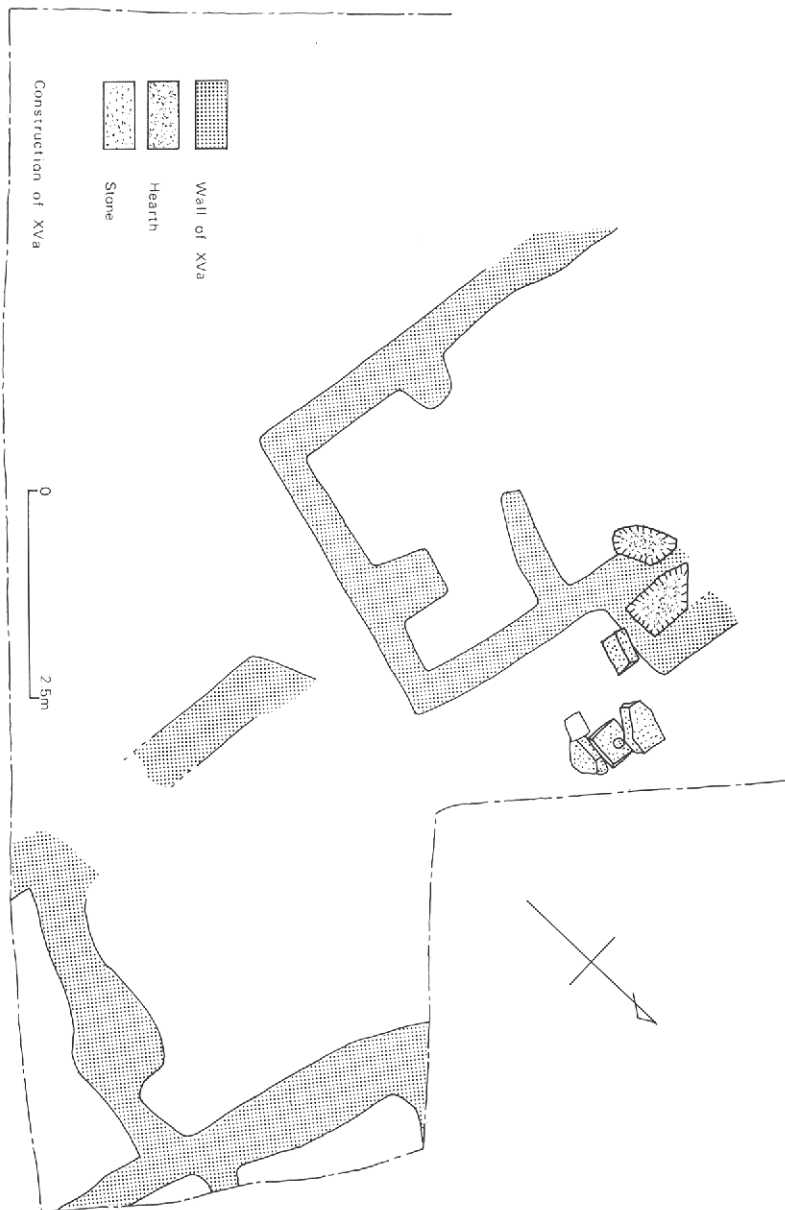
3

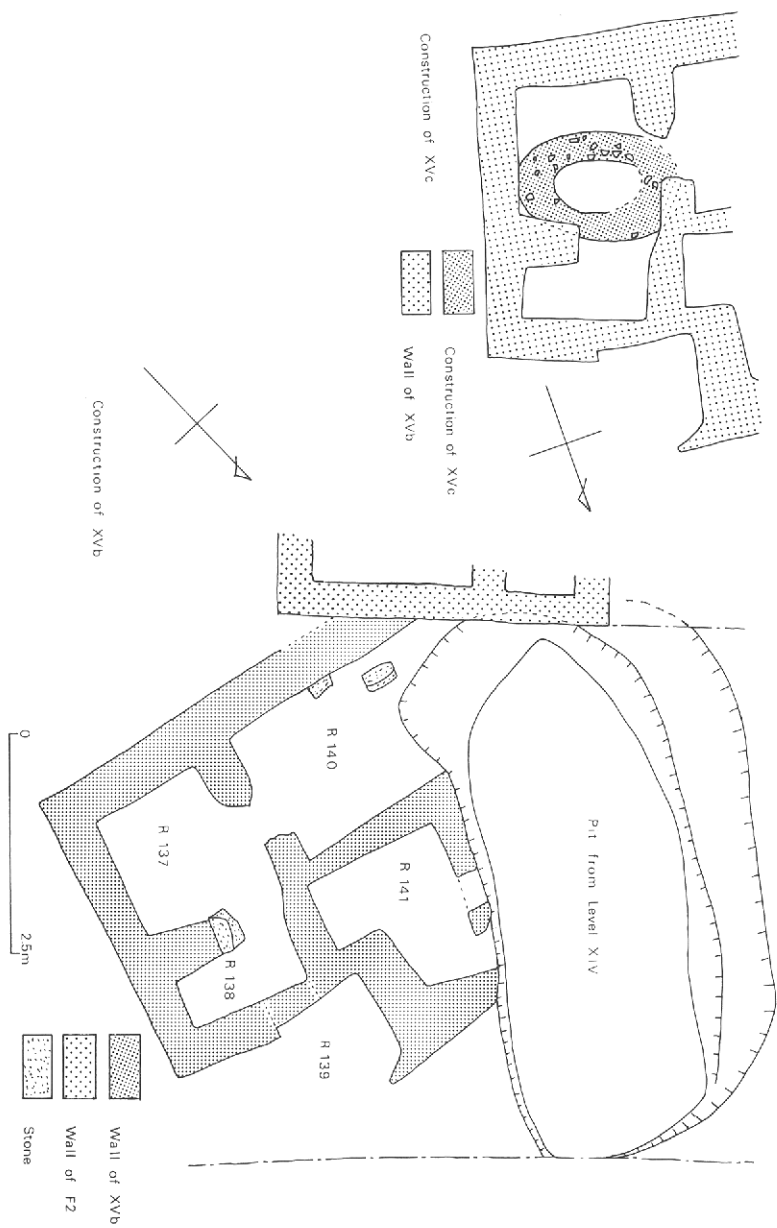


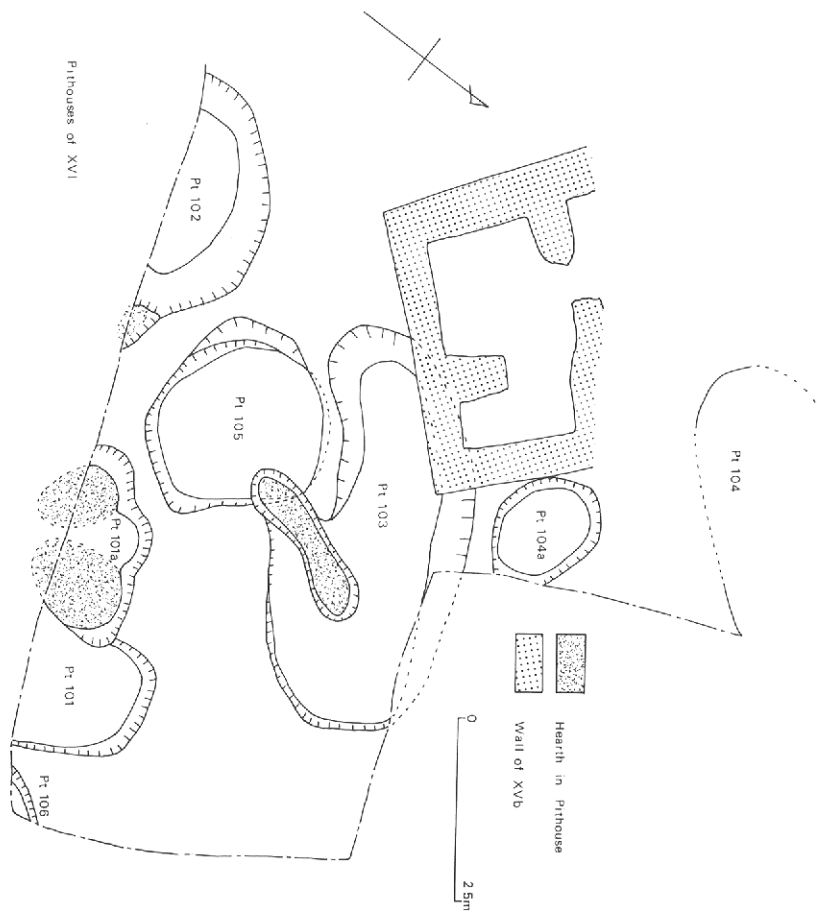
4

PL 6



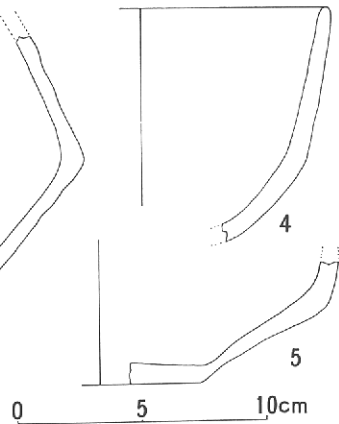
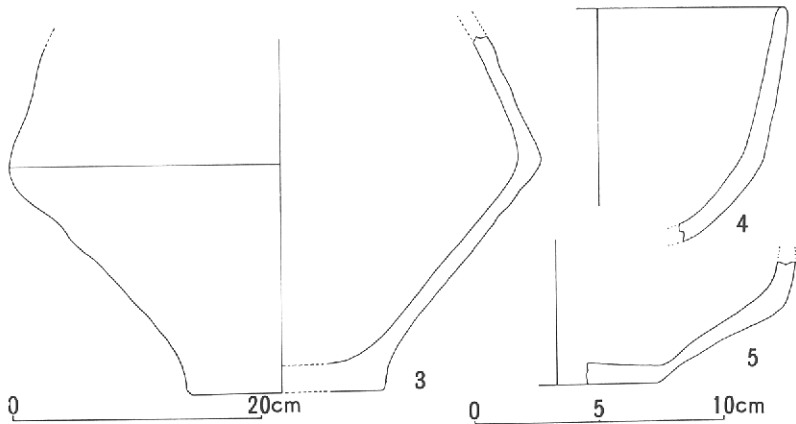
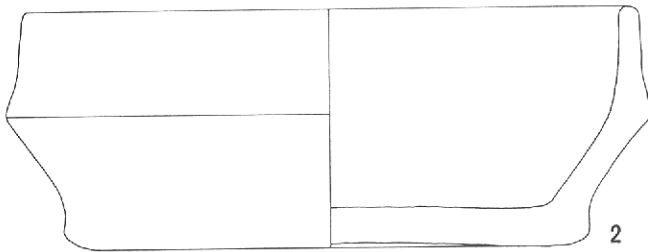
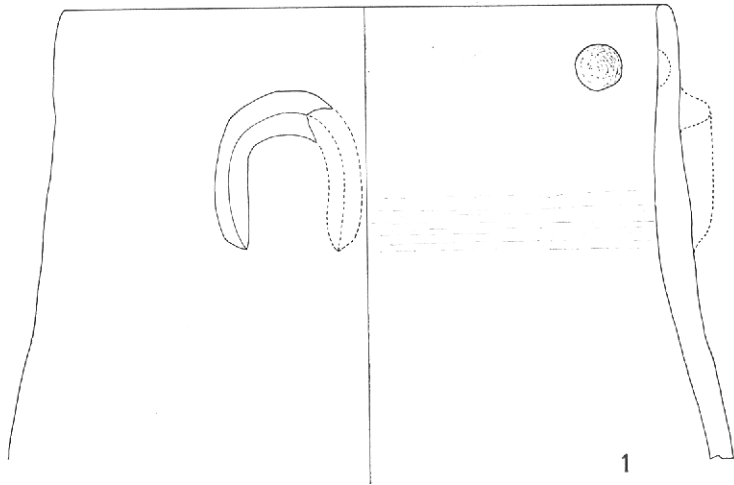


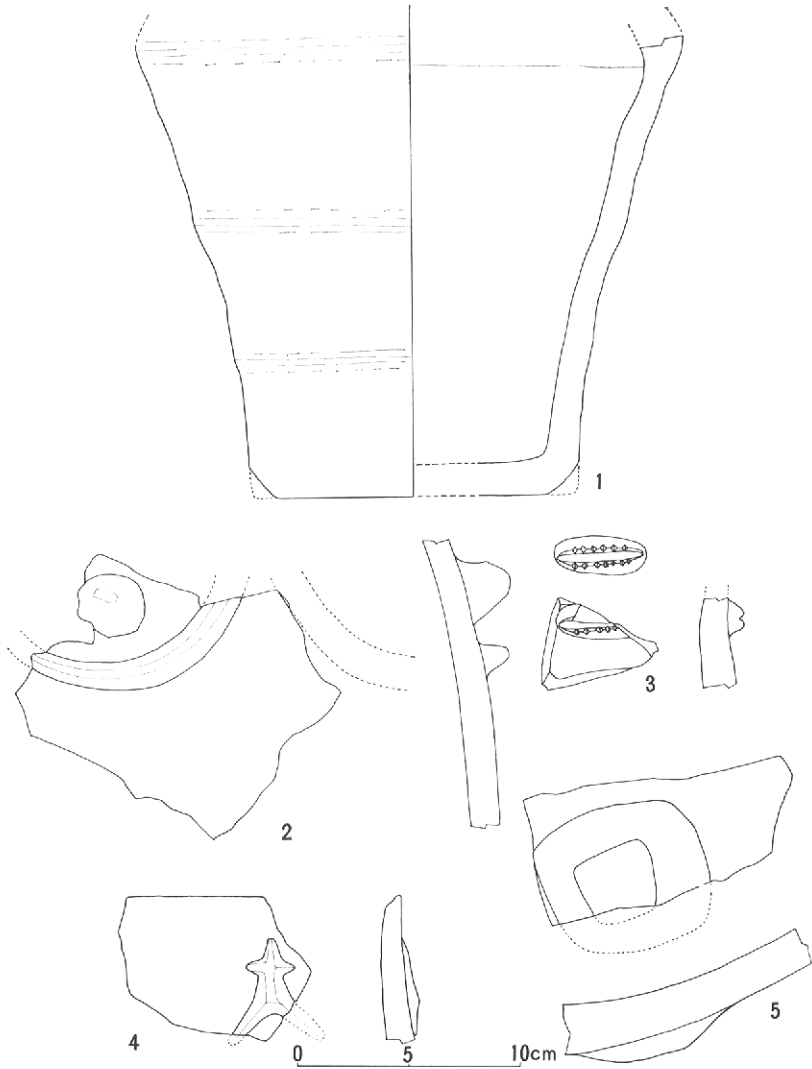


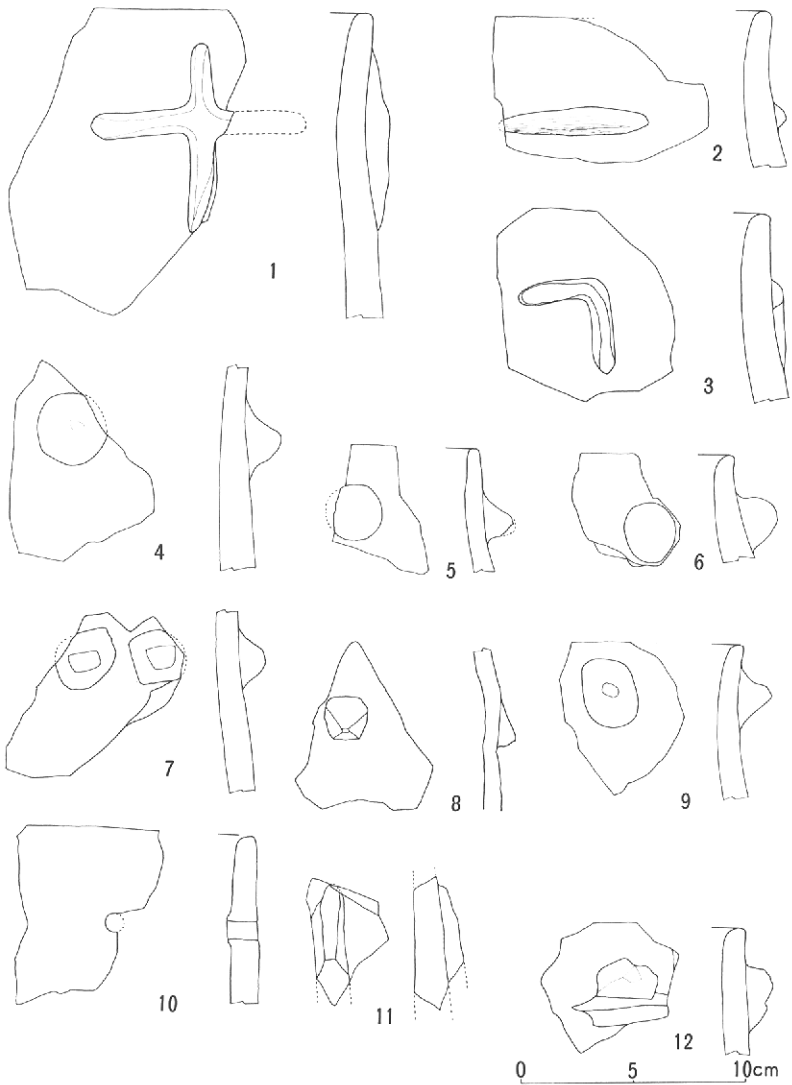


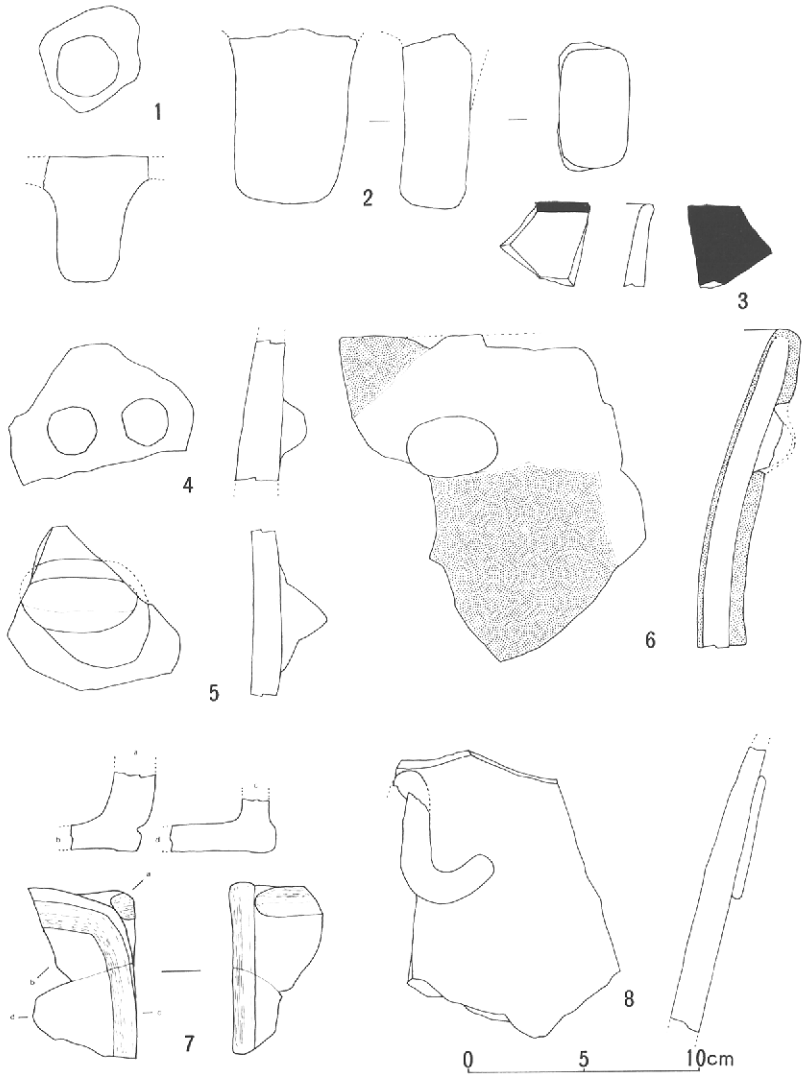
Pithouses of XVI

PL 10

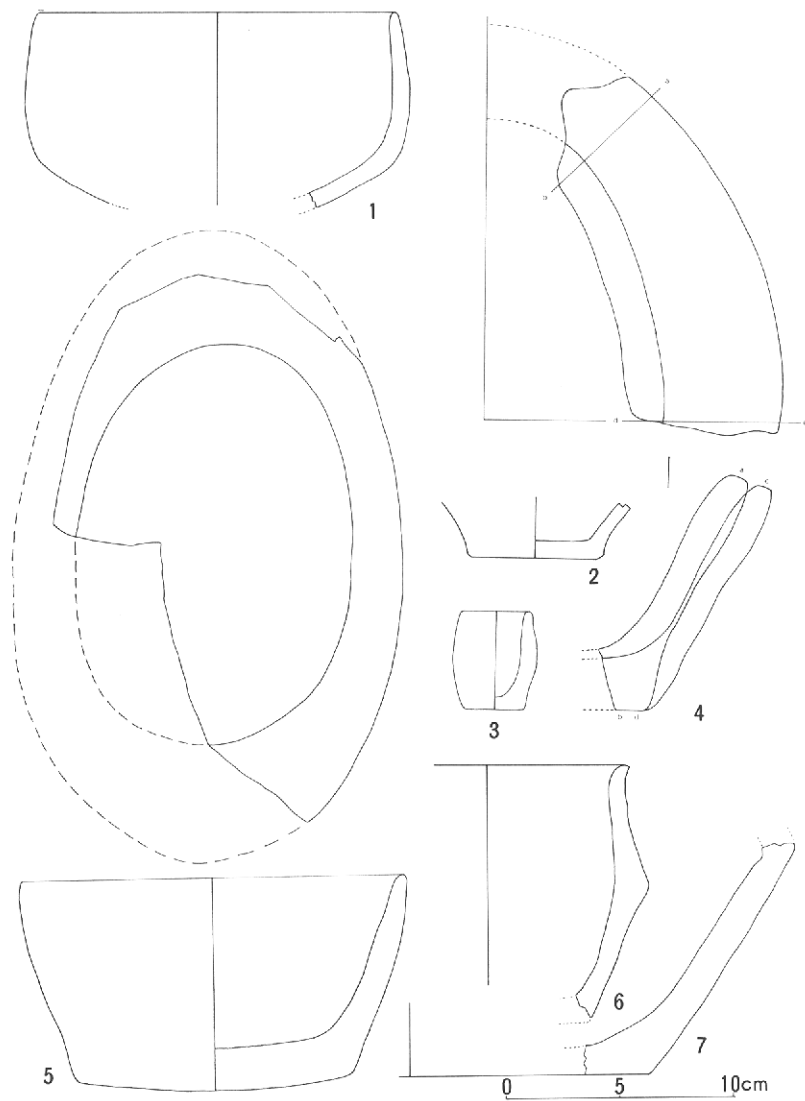


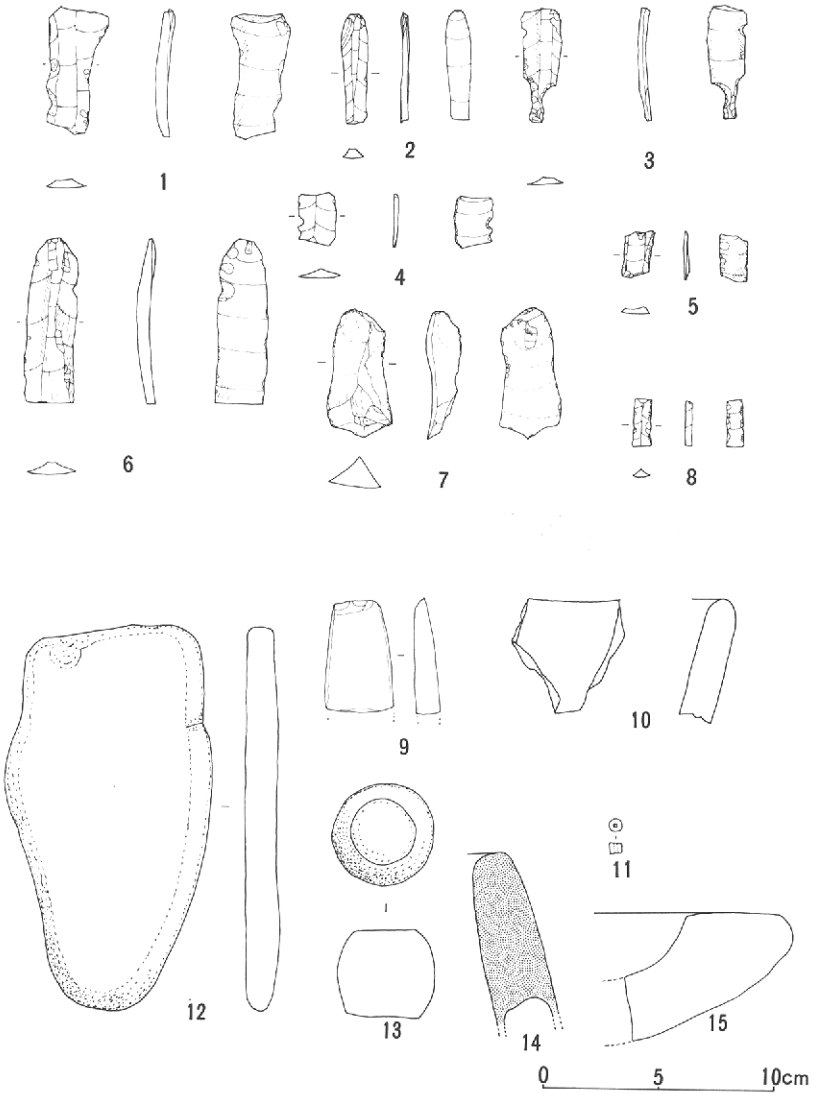




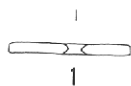
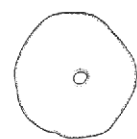


PL 14

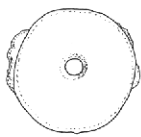




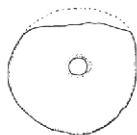
PL 16



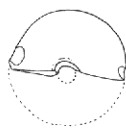
1



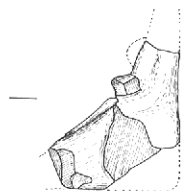
2



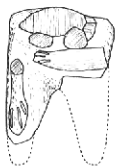
3



4



5



6



7



8



9



10

0 5 10cm